
IS ~ インフィニットストラトス ~ 不思議な翼

柊 稜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜インフィニットストラトス〜 不思議な翼

【Nコード】

N8193V

【作者名】

柊 稜

【あらすじ】

父と母、それと、妹を持つごくごく普通の中学卒業生。柳瀬薫。そんな彼が、春休みの旅行先で、女でしか起動できない兵器、ISに触れることから、物語は始まる。

独自解釈というか、独自設定が時々混じるかもしれません。ご注意ください。

あと、極端に見せ場の減るヒロインがいるかもしれないので、その辺もご注意ください

ブログ：始まりはいつも唐突に（前書き）

という訳で、懲りずに投稿です

・・・他のは、ネタがないんだ。ネタが
放置気味になることがあるので、気長にみたってください

プロローグ：始まりはいつも唐突に

悲しいことに、世界には博物館を作り上げてしまえるほど、数多の種類の武器・兵器がある

剣、槍、弓、大砲、戦車、銃器、毒ガス、航空戦闘機、爆弾、戦艦、核弾頭

数え上げたらきりが無い

しかも、古代から今までで、武器・兵器が生みだされなかった時代なんてないのだろう
なぜか？

人種・国・宗教・思想の相違、経済的な利潤、怨恨、腕試し、一時的な激情

考えてもみれば簡単で、古来からずっと、人類同士で争う理由に事欠かないからなのだろう

早い話が、『人類の歴史には、常に争いという影が付きまといていく』ということだ

その影を嫌い、恒久的に争いのない世界を望むのか
その影を好み、恒久的に争いの続く世界を望むのか

そこは俺の知ったところではないが、いま、一つだけ言いたいことがある

それは・・・

「・・・家族旅行で『国立兵器歴史博物館』なんてところをコースにするな！」

春休み使っていくところなのか！？
もつと他に行くところがあるだろ！？
海とか山とか川とか月とか！

いや、月は無理か・・・

とにかく、何でよりもよって兵器博物館なんて物騒なところに・

「何を騒いでいるのかおる薫。恥ずかしいからやめなさい」

お袋。周りを見てみる。俺たち家族以外に誰もいない
だからって叫んでいいわけではないが

「いやー、兵器と言っても多くの種類があつてだな・・・」

そうだ。うちのおやじがミリオタ（軍事物オタク）だったんだっけ
っーか、一人で行け！

「おにいちゃん、はやくいこーよ」

こんな小さな娘（小学5年生）を連れてくるところじゃねえ！

「・・・と、さまざまな進化を遂げてだな」

・・・父は、ミリオタよりは兵器オタなのかもしれない

「はいはい。誰も聞いてないから。とにかく入った入った」

「うつ・・・すいません」

「ほら、薫、みさと、置いてくよ」

『はい』

親父はいつまでたってもお袋に弱い

――

博物館のなかには、誰もいないのに空調がしっかりきいていて、とても快適だった

入口付近にはテーブルや椅子が置いてあり、歩き疲れた人の休憩場となるのだろう

つーかどれだけ広いだこの博物館

「古今東西全ての時代・土地の兵器があるなんて話だからな。展示品の数も一日で回りきれるようなもんじゃないんだろっな」

へー・・・

「ホントは全部をじーっくり見たいんだが、今日は下見がてら、さっと見て帰ろうか」

「はいはい・・・」

下見つて・・・盗みにも入る気が

古代の武器、中世の兵器、近代の兵器と続いていて、時代による武器の変遷・進化が見て取れた

正直何が書いてあるかは見当もつかなかったが、次第に機械化・自動化されていっただけは、なんとなくわかった

銃に関していうなら、いまでは引き金引いてズドン

昔は弾込めて、火薬詰めて、火をつけてと、ややこしいことこの上なかったらしいのに

「まあ、そうやってすぐ撃てるようになってしまったせいかな、銃で命を落とす人も増えてるんだよ」

「だろうな」。銃は、引き金を引けばそれだけで人を殺せてしまうようなシロモノだし」

誰かいつてたな『ナイフや拳と違って、銃は人を殺したという感触が残らない』って

罪の意識も軽くなってしまう訳だ

「もし、銃を持つ機会があったとしても、それを忘れるんじゃないぞ」

「はい」

んだよ、まるでここから先、誰かが銃を撃つ機会があるみたいな言い方じゃないか

俺は、そんな機会願ひ下げだぞ

「よしよし。みさとはいい子だな」

「えへへー」

あ、みさとはひょっとしたら持つちゃう機会があるのか
このご時世だもんな・・・

おそらくは一番金かけているであろう、現代兵器の展示場へと移る
拳銃、自動小銃、対戦車用ロケットといった、銃火器系統の項目が
続いていた中、突然妙な物が目に入ってきた

「あ、みさとしてるよ。あれ、『インフィニット・ストラトス』
っていうんだよね」

「あら、みさとは物知りね」

「えっへん」

偉いでしょ、とでも言いたそうに腰に手を当てて胸を反らしている
みさと

お袋が撫でると、気持ち良さそうにはにかんでいた

今の今まで銃器ばかり目に入ってきたから、妙な物だと思ったが、
決して『現代兵器』の欄においては妙ではない

むしろ、コレ関連のものが無いことにはいまの時代、兵器博物館な
んて名乗る資格はないんじゃないかと思う

——『インフィニット・ストラトス』

名前だけ知ってるその兵器

——通称、アイエスISと呼ばれるこの兵器は、もとは宇宙空間での活動を
想定した、マルチフォームスーツでした。開発当初は見向きもされ

なかったISでしたが、『白騎士事件（ ）』を契機にその有り余るスペックを注目され、兵器として転用され、いつしか『世界最強の機動兵器』として扱われるようになりました。ISの中核となるコアはブラックボックスとなっており、女性にしか起動できないという不思議な特性に関してなど、未だ解明されていない部分が多いのが現状です。また、この特性は、以前の風潮であった『男尊女卑』を『女尊男卑』に変えてしまうなど、社会的な風潮の変化をもたらしました

白騎士事件の詳細については、お近くの『現代戦史』をご覧ください

と、IS説明のディスプレイは語っている

「ISが世に出回るようになってから、既存の兵器はただの鉄屑同然となったなんて言われてるよ」

それ、なんてチートだよ・・・

その説明ディスプレイの奥には、退役した第一世代のISや、開発が終了した第二世代の量産機の模造品レプリカが、世代の簡単な説明とともに並べられている

というか『このISは本物を真似た模造品レプリカです。ご自由に触れて感触を楽しんでください』ってなんだ。レプリカなら壊れてもいいってか？

壊れないようになってんのか？

・・・いや、ISの足元に細かい部品の欠片らしきものが散らばっている

展示物への扱いではないな

「へえ・・・やっぱり冷たいのね」

「このレプリカって、本物のISの素材をつかっているのか？」
「かつこいー」

三者三様、それぞれの反応を示している
みさとに至っては、ばしばしはたいている
あ、ちよつと欠けたぞ

「・・・はあ」

ふと目をあげてみると、そこで俺は隅にある妙な物を見た
ISのレプリカであることは、この一覧にある以上間違いない
問題は、その形だった

他のISのような、洗練された、鋭いシルエットと違い、まるい。
とにかく丸っこい
小学校に通っているみさとが、図工の時間に粘土で作ってきた『ひ
と』くらい、丸くて歪だった

「これも、IS？」

どこかに、『流線形のボディラインで、正面からの実弾を全て受け
流してダメージを減らす』とかいう、でっかくて赤い、隻腕のパイ
ロットでも扱えるMAがなかったっけ？

0083だったらどっかの三号機も捨てがたいけど、俺は断然、緑
の方だ

だって三号機^{アレ}ってただスペックを持て余して暴れてるだけじゃない
のか？

好きな人には申し訳ないけど、少なくとも俺にはそう見えた
一号機と二号機は・・・どっちも素敵です

えーと、他には・・・

形を歪にすることのメリットを考えてみたものの、人型のマルチフ
オームスーツに採用できるようなものじゃないことに気がつき、考
えをやめる

「・・・」

なんとなく何も考えずに

いや、何も考えていなかった訳ではない、純粹な好奇心があつた

俺は、そいつにふれた

キンッ

『見つけたよ。ボクのパートナー！』

「は？」

そんな声と、金属質の機動音が頭に響く
色々なイメージが流れ込んでくるような、来るべくしてここに来た
ような、そんな不思議な錯覚を覚える
ぐちゃぐちゃなのに、スッキリしている。本当に不思議としか言い

ようなない感覚が頭の中を駆ける

「ちょっと薰、アンタ何して・・・」

「お母さん。お兄ちゃんはどうして光ってるの？」

「みさと、じつと見てたら目が・・・うおっ、まぶしっ」

目の前のISの模造品は急に光を放ち、最後には『現代兵器』の展示場全てを飲み込むほどの光を放つ

そして、一瞬のうちに、『消えた』

「え？え？・・・え？」

目の前にあったISと思しきなにかは消え失せ、代わりに俺の腰に、見覚えのない鎖がついていた

新学期 入ったクラスは 女だけ

「全員そろってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そう副担任の先生は言う

桜咲く新学期

10代ならば、誰しもが新しい世界に一步踏み出す時期。俺もその例に漏れず、新しい世界に踏み出していた

どんな世界かというのだ

右を向けば女の横顔

左を向けば女の横顔

前を見ても女の頭

後ろを振り返れば苦笑いの女の顔

上を向いたら無機質な天井があるだけ

下を向けば無機質な床があるだけ

少しくどかったな

とにかく周りは上下を除いて女だらけ、なんていう世界だ
ちなみに片道切符。帰りの切符は三年後に発行されます

・・・こういう状況に立たされると、むさいだけだと思っていた男連中って大事なんだな、ってしみじみと感じる
失って初めて分かる、常にそこにあるありがたみ

なんつって

俺が入学したのはIS学園とよばれる、ちょっと特殊な学園だ

端的にいうのであればIS操縦者の育成を目的とした教育機関
日本にあるのに日本にあらずといった、どこの国にも属さないとい
う、不思議な場所。もちろん生徒の出身国も様々
全校生徒の半数がkaroujite日本人ということらしい

で、IS操縦者っていうのは女しかない。つまりは国際的な女子高

場違い感が半端じゃありません

何でこんなところに入学した（放り込まれたという表現が正しいか
もしれない）かというのだ

あの博物館での一件で、俺はあのISを起動させたということらしい

しかも、《IS適正のある女性が誰一人として起動できなかった不良品》を

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

どうやら博物館の人も本当に模造品だと思っていたらしい
一般の来場者が触っても何もなかったらしいし

政府はこのレプリカにコアの存在を確認したものの、『欠陥品』と
判断

廃棄処分しようにも、コストや時間の問題が浮上。結局、博物館
側にコアの存在を隠匿、レプリカとして展示させ、適合者が現れた
らIS学園に半ば強制でもいれる、という措置を取った

『捨てる神あれば、拾う神あり』なんて言葉があるけれど、ここま
で迷惑でスケールのでかいのは初めてだ

俺の個人的な感想はともかく、そんな《誰一人起動できない不良品
》を《男である》俺が起動できてしまったもんだからさあ大変
俺はその場で警備員にしょっ引かれ、高校の入学を無理矢理取り消
され、IS学園への入試を経て入学させられた次第だ
ちなみに親父は『男でIS乗りとは羨ましい』と、ムフフとした顔
つきで言ったもんだからお袋にしょっぴかれてた

雉も鳴かずば、撃たれまいに・・・

俺のほかにも男でISを起動させた奴がいるとのことだが

親父『やるからには全力でやれ』

お袋『選ばれちゃったものはしょうがないね。恥かかないようにし
っかり頭に基礎を詰め込んでおくんだよ』

なんて言うもんだから、俺は自室に軟禁され、入学前にもらった参
考書や、IS起動についてのルールなどを刷り込む作業を行っていた
でも、それらすべてを覚えられたかは正直めっちゃ不安

部屋にテレビは無いから、覚えこみの間テレビを見ることができな
かった

聞こえてくる音声で名前は分かったものの、どんな顔かまではさす
がに分からない

「は、はいっ!？」

そんな素っ頓狂な声を聞き、思考が現実引きもどされる
声の主は、先生とひとしきり会話した後、後ろを振り返る
ちなみに俺の席は最前列窓側より一列目。窓からは、綺麗な木々が
見える。で、そいつは最前列中央。隣の隣という感じだ

あ、男

ということは、あいつが『ISを起動させた、もう一人の男子』た

しか名前が・・・

「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

うん。同じクラスでよかった

女子オンリーのこの空間は一人じゃきつい

今までここに至るまでの経緯に浸ることによって無視（逃避）していた、後ろからの視線

見るとかそういうのじゃなくて、刺さってくる

こう、ビシビシと。ひしひしなんて優しいものじゃなく

コレじゃあまるで動物園にやってきた珍獣、パンダじゃないか！

誰だハーレム羨ましいなんて言ったの！

けしからん！代わりなさい！

織斑がいるおかげでこの視線も単純計算で半分になつてと思うと、一人放り込まれた時の厳しさは測りかねる（というか考えたくない）

「・・・以上です」

がたたっ

「おわっ」

急にずっこける生徒がいたもんだからビックリした。比喻でなく、実際にずっこけた

いくらなんでも期待しすぎだったの

俺も少しはネタ、考えておこうか・・・

・・・ダメだ、何も思い浮かばない

パン！

俺もああいう空気を作っちゃまいそうだな

第一印象っていうのは人間関係を形成する上ではとても大事でだ・

パン！

さつきから誰だ、パン！パン！ってうるさ・・・

パン！

「つてえっ！」

「その反抗的な眼は何だ馬鹿者」

アンタはどここの生活指導の鬼教師かつん？ どうかで見たような・・・

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出

来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

逆らっていいなんて言っておいて、なんでさっき逆らった（ように見えるだけの）俺を叩いたのかは、この際言わないでおこう。また叩かれるだけだろうし

織斑千冬。『戦乙女』ブリュンヒルデなんて呼ばれている、世界一に名を轟かせていたIS乗り

ISの国際大会である『モンド・グロッソ』の初代チャンピオン。それぐらいしか知らない

教師というよりは教官と言った方がしっくりくる、ピンと張りつめたオーラを持っている

『きゃあああつ！千冬様、本物の千冬様よ！』

『ずっとファンでした！』

『私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！』

だのに、教室は引き締まるどころか黄色い声

というか、どこから出るんだ？この高い声。ああ喉か

とにかくその後は、織斑の姓でなんとなく想像がつくように、織斑千冬と織斑一夏は姉弟であることが発覚。また教室は盛り上がった

「というか、やけに弟に厳しいな、千冬さん」

パン！

「つてえっ！」

「初対面の女の名を気安く呼ぶな。織斑先生と呼べ」

すみません・・・

「ちょうどいい。お前の名を聞いておこう・・・名前は何と云うんだ？」

早速目をつけられたオチか？・・・そういうオチだな、絶対

「とつとと名乗れ。それとも、最近では珍しい、名前の無い人間か？」

・・・ぜつてえ、この人怒ってる

当然か。見ず知らずの人間に、突然親から授かった大切な名前を呼ばれたんだから俺が非常識だった

「・・・柳瀬薫です。・・・こんな名前だけど、男です」

昔、『なんとか聲』^{かおる} っていう人、実際に居たんだぞ。男で

「では、時間が推しているのだからこれにてSHRを終える。自己紹介は各自で済ませておけ。各々一時間目の準備も忘れるな」
『はい』

・・・自己紹介、それでいいのか？

新学期 入ったクラスは 女だけ（後書き）

ということでは話目でした

セシリア・オルコット（前書き）

という訳で第三話です

9 / 24 セリフ回しをちょっと変更しました

セシリア・オルコット

「―であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ―」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生

あとで、「本物のISを博物館に展示する行為」は枠内を逸脱して
るのかどうか聞いてみよう

あのときは冗談抜きにビックリしたわ

ふと、周りを見てみると、皆熱心にノートを取っている

やはり、ISを使えるだけあって、勉強熱心だな。特に関係ないの
だろうけど

俺は特に何もやらないでここまで来ちゃった、というか連れてこら
れた身だけど、他の女子はきつとかかなりの倍率のなかを選ばれたエ
リートに違いない

そう思つてまたノート記入の作業に戻ろうとすると、女子のものと
は違う視線を感じる

「・・・」

そっちを見ると、織斑がこちらに視線を送っている

『お前、理解できてるのか?』みたいな目でこちらを見てくる織斑
というか、あの目はそう語っている。目は口ほどにモノをいうんだ

とりあえず俺は、満面の笑みと一緒にサムズアップをかえしておく
それをどう受け取ったのかは知らないが、織斑は若干安堵の表情を

浮かべ、視線を戻す

「そこ二人。何をしている」

「お、織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか」

「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

エヘンとでも言いたそうに胸を張る山田先生

なにこの人かわいい。というか、動きが褒めて欲しい時のみさとに似てる

少しの間迷ってから、織斑はハッキリした口調でこう言った

「ほとんど全部分かりません」

山田先生の表情が、一気に変わる

あ、アレはおそらく凄く困っている時の顔だ

どれくらい困っているかというと、バキュームカーが事故起こした現場を・・・

やめておこう。下ネタだし、そもそもバキュームカーを最近見ないし・・・

アレって今どこにあるの？ガソリン運ぶ車にでもチェンジしてるのか？

それはそれでなんかいやだな・・・

「ぜ、全部ですか・・・えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

だーれも手を上げない。それどころか、手が動く気配すらない

「や、柳瀬君は大丈夫ですか？　ついてこれてます？」

大方、『同じ男だけれど、こいつは大丈夫なのか？』みたいに思われてるのだろう。多分ここまで汚い言葉ではないのだろうけど、だいたいあつてゐる気がする

「えーと・・・入学前の参考書をみていればある程度ついていけるかと・・・」

「ええっ！柳瀬も分かってないんじゃないのかよ！」

「失礼な。俺は見ると言われたものは一応見ておくタイプだぞ」

「・・・ちなみに織斑。入学前に渡されたISの参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

ブツ

パパン！

すかさず、織斑先生の出席簿が飛んでくる

間の女子を叩かずに、俺と織斑だけを叩くのは、器用というかなんというか

「つてえっ！」

「笑いごとではない。・・・それに、必読と書いてあっただろうが、馬鹿者共。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

そういった後、織斑教官（今はこっちの方が先生よりもしっかりくる）は、

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器をはるかに凌ぐ。その《兵器》を深く知らなければ、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚えろ」

さすがは織斑教官。言ってることはもつともだ

「それと自分は覚えているからいいなどと、甘い考えをするなよ。もう一度言っがISは《兵器》。実力を見誤った愚か者の余裕は、仲間を巻き込んだ事故を引き起こす」

・・・もつともです

「分かったのであれば、授業を続ける。織斑は放課後、山田先生と私で理解できるまで教えてやる。異論はないな？」

「は、はい・・・」

「・・・山田先生。授業を続けてください」

「は、はいっ」

妙に優しい声だった

なんて言っんだらう。怯えている子を諭すよう・・・とでもいうのだろうか

とにかく織斑弟に対する態度とはうって変わったものだった

今は休み時間

なんだかんだでさっきの休み時間に話ができなかった織斑一夏との
コンタクトをとる

だってさっきの時間は気がつけば、篠ノ之箒に連れ去られてるんだ
もん

えーっと、どうやって話しかけようか

あ、そうだ

「傑作だったな、さっきの『冗談』」

皮肉をこめて、目の前に居る織斑にそういつてみる

コレが第一声って、印象かなり悪いな、俺

実際、ちよつと考えても思いつかなかったただけなんだけどさ

「いや、冗談言ったつもりはないんだけど・・・」

「アレを冗談と言わずして何を冗談というんだ？」

「・・・すまん」

謝られてしまった

「んーごほん。とりあえず改めて・・・柳瀬薫だ。同じ男のIS乗
りとしてよろしく頼む」

「ああ。織斑一夏だ。よろしく頼む柳瀬」

うん、これでとりあえずは良いだろう

「ところで織斑よ。篠ノ之とはどういう仲なんだ？」

「は？」

「さっきだって、休み時間になるなり廊下に連れ去られてたじゃん。

知り合いかい？」

「ただの幼馴染だよ。一緒に剣道やってたんだ。六年ぐらい前に転校したつきりだったな・・・」

「へえ・・・。そら、すごいグーゼンだな」

「そういう柳瀬は知ってる奴いないのか？」

「めんどつちいから薫でいいよ。そうだな・・・誰もおらん。学園関係者にも、どこもない」

見知らぬ異国に売り込まれるパンダって、こういう気分なんだろうか

「ちよつと、よろしくて？」

「「え？（は？）」「」

呼ばれたようなので振り返ってみると、そこに居たのは地毛の金髪が鮮やかな女子だった

白人のようだから、欧州出身だろうか

高貴な感じもないとは言えないが、なんというか、いかにも『今時の女』という感じだった

「訊いてます？お返事は？」

「よかつたな織斑。早速お呼び出しだぞ」

「一夏でいいよ。薫を呼んだんじゃないの？」

「あはは。俺みたいなのを呼ぶ女なんていないだろ？それじゃ邪魔をしては・・・」

俺は最近の女は嫌いだからなさつさとケツまくって・・・

「貴方達二人を呼んだのです！その人、逃げようとしなさい！」

「うつ・・・で、どーゆー用事なの？」

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられることだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

・・・ピキピキ

ホント、こういうのは苦手だ

『ISが使えるのは女子だけ』という世界の常識ができてから、『女性』『偉い』な構図ができてしまったわけで

ちよつと散歩のために街中歩いただけで、見ず知らずの女にパシリにされることもごく稀にある

「焼きそばパン買ってきて。もちろん、あんたの自腹ね」みたいな感じで

大抵は無視して歩けば放置されるが、中には『暴力を振るわれた』なんて訳のわからない事を言い出す奴もいる

そのわけ分らないことに煽られて、事実確認もなしに『逮捕』なんてあるから大概だ

ぶつちやけいうと男（少なくとも俺個人）から見るとそういう、高圧的な奴は目障りでしかない訳で

「人と話すときはまず自分の名を名乗るものだろう？それとも、そういう態度すら教わってないのか？」

「そうそう。俺たち、君の名前知らない」

あ、一夏も知らないのか

というか、結局SHRはいろいろあって自己紹介が終わってなかつ

たんだっけ？

「私を知らないといえますの？ この、セシリア・オルコットを？
イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

入試主席・・・

筆記でもあったのだろうか？

筆記テストなんて受けてねえぞ

「うん。シラナイ。今知った」

「・・・貴方、わたくしをバカにしています？」

「あのさ、質問いいか？」

「一夏。この際時間とられるだけの『代表候補生って何？』なんて
質問はやめろよ」

「・・・」

一夏は気まずそうに口を閉ざす

図星かよ

「はあ。そっぴやお前、電話帳捨てたんだっけ？代表候補生って
うのは確か・・・」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリート
のことですわ。・・・あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そっぴわれればそっだ」

・・・お前、外国人に母国語の日本語についてつまれるのって
どうなんだよ

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすること
だけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解してただける？」

「ソイツハスゲエヤ」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・貴方がた、私をバカにしていますの？」

よく分かってる

一夏はどうか知らんが

「ソナナコトナイデスヨ」

「幸運だっけだったの、そっちじゃないか」

「そんなことよりもだ、一つ聞いてもいいか？」

「下々のモノの要求にこたえるのは貴族の務め。よろしくてよ」

「入試って・・・筆記あったのか？」

「「は？」」

一夏とオルコットが同時に疑問符を浮かべる

「いや、首席とか言うからさ。点数のつくなにかがあったのかな？
って」

「はあ？ 貴方入試に出ていないのですか？」

「いや、IS使って戦うのには出たぞ」

「それ以外に何かあるというのですか。私、教官を唯一倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「「・・・は？」」

俺、負けたぞ？

あんなのに勝ったとか、こいつは可能性の虎か何かか？

「じゃ、じゃあ私だけたおしたっていうのは・・・」

「『女子限定』ってオチじゃない？・・・っ！かもつチャイムなりそうだから、さっさと席つこうぜー夏。もう俺出席簿アタックは御免だぞ」

「え、ああ・・・」

「ちよつと！　そういつて逃げ・・・」

キンコンカンコンコン

ちよつと良く3時間目を告げるチャイムが鳴る

「くっ・・・いいですか！またあとで来ますから、逃げないでください！」

・・・マッハで逃げたい

セシリア・オルコット（後書き）

はい、一夏とのちゃんとしたファーストコンタクトでした
・・・ちゃんとしてるのだろうか？

白手袋は投げられたらとりあえず拾っておく

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明する」

今回教壇に立つのは織斑先生だった

余程重要なだろう、山田先生までノートを出している

「ああ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表を決めないとな」

代表・・・何とも言えない響きがある

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席・・・クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

簡単にいや、雑務担当か？

面倒な仕事が多いんだろうな

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれに賛成！」

注目の的っていうのはつらいねえ。一夏よ

「では候補は織斑一夏。他にはないか？自薦他薦は問わないぞ」

「って、俺え！？」

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか？いなければ無投票当選だぞ」

「いや、俺やらな・・・」

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。選ばれた以上、覚悟を決める」

「うつ・・・」

「一夏。男なら腹あくくれよ」

『あ、柳瀬君もいいかも・・・』

『だね、私もいいと思うよ』

はあっ！？

つつーか二人目、そんな簡単に乗っかるな！

「ふむ。ではもう候補二人目は柳瀬薫。他に居ないのであれば、この二人への投票になるぞ」

「ちょ、ええっ！？俺辞退・・・」

「選ばれた以上、覚悟を決めろとさっき言った筈だが？」

「薫。男なら腹あくくれよ」

「ぐっ・・・上手く返してくるじゃねえか」

くそっ！余計な事を言うんじゃないかった

パパァン！

「うるさいぞお前達。喚くなんて男らしくない」

「すみません・・・」

うつ・・・要は一夏よりも票が少なければいいんだろ？

それはそれでなんか悔しいけど、一年面倒おしつけられるよりはすつとまし・・・だよな？

「待つてください！納得がいきませんわ！」

そういったのは、さつき一夏との会話に割って入ってきた、セシリ・オルコットだった

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしです！そのような屈辱を、一年間通して味わえとおっしゃるのですか？」

『男が代表は恥さらし』ねえ・・・

だったら俺たちが候補に挙がる前に自薦すりゃよかっただろうに

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しicaからという理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、サーカスをする気は毛頭ありません」

サーカスだってさ

俺たちが猿なら『猿まわし』だろ

いや、そうじゃないか

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい・・・」

「ちよつと、黙ろうか」

「なんですの？極東の猿の分際で私に口答えをするでも？」

「とりあえずハッキリさせておきたいのは、俺は猿ではなく、人。それとも？^{ブリテン}英国人は皆自分ら以外の人間は猿にしか見えないとか？御大層なもんで」

「なっ・・・！あ、あなた！私の祖国の人々を侮辱する気ですか！？」

アレか、自分が見えてないのか？この兎は

「まず、俺の祖国を侮辱したよな『文化としても後進的な国』とか何とか」

「それは事実を言っただけでしょう！？」

「なら、俺も事実を言っただけ。それとも？他人をいきなり猿呼ばわりするのは貴女だけ？品がありませんね」

実際、あつて間もない人間を猿呼ばわりするのは男女問わず『品がない』

というか恥ずかしくないのか？『自分は礼儀を知りません』っていつてるようなもんだろ？

お互い一歩も譲らない

『一度張った意地は貫き通せ』

お袋がいつてたっけ

・・・なんか違う気がするが、まあいいだろう

「あーもう！こうなったら決闘ですわ！」

どうしてこの流れでそうなるのかはよく分からないが、頭に血が上っている人間には何をいつても無駄

投げられた手袋は拾うしかないだろうし、そもそも今の俺に拾わないという選択肢もない

賽は投げられた。とか、そんな感じなんだろうな

「・・・四の五の言うより分かりやすい。『勝者が代表』ってことか？」

「その通り。弱者に代表は務まりませんわ。だからと言って、手を抜くのは許しませんことよ？」

「真剣勝負にそれは無粋つてもんだよな。貴女も手を抜く必要はありませんよ？」

「もちろんです。獅子というのは、一匹の兎を狩るのにも全力を注ぐとのこと。わたくしもそれにならない、一切手加減しません」

「上等」

「話はまとまったな。それでは、勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナにて行う。オルコット、柳瀬、織斑の三名はそれぞれ準備をしておくように。では授業を始める」

そういつて、織斑先生は授業を始めた

「・・・つて、俺もなの!？」

「当たり前だ。お前だって候補に挙がったのだ。『勝者が代表』のルール上、お前が参加するのは当然だろうが」

で、その日の放課後

「あ~~~~~」

やっちゃった

相手は代表候補生。エリート中のエリート
対して、俺は展示品を偶然起動させただけ
無論、戦闘経験なぞゼロに同義

どっちが勝つかなんて明白だったし、冷静になって考えてみると勝

てる訳がない

だけど、俺にだって塩粒ながら意地があるってもんだ

「薫……。大丈夫なのか？」

「大丈夫な訳がないだろう。アレだ、差し出されたものはありがたく受け取る性分なんだよ。っつーかお前も大丈夫なのか？」

「大丈夫な訳がないだろう」

「お前もか」

「「はあ……。」「」

俺らIS初心者

オルコットは代表候補生

その差は明白。戦う前から牙を折られた気分だ

「あ、織斑君、柳瀬君。まだ教室に居たんですね。よかった」

そういわれた方を見ると、山田先生がいた
女性としては平均的な慎重なのだろうが、サイズがあっていなさそう
なゆつたりとした服のせいか、結構小さく見える

「あ、山田先生。どうしました？」

「えつとですね……。寮の部屋が決まりました」

そういつて番号の書かれたキーを俺たち二人にくれる山田先生

そういえば、先生は山田真耶っていうんだっけ
ヤマダマヤ……。おお！逆さに読んでもヤマダマヤ
どうでもいいか

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。部屋には個別にシャワーがあるので、当面はそちらをつかってください」

「そちらってことは、他にもあるんですか？」

「はい、大浴場がありますが、二人は今は使えません」

「え、何ですか」

・・・ここに、とびっきりの阿呆がいた

「お前は、同年代の見知らぬ女子大勢と一緒に風呂に入りたいんだな？」

ちなみに俺は、好きな人と入れればヒヤッハウだが、大勢となれば話は別だ
場違い感のなかではゆっくり出来ないし、下の方も縮こまって落ちつかない

というか、俺はともかく、一夏が入ればそこは、大浴場ではなく大欲情

絶対一年間使用禁止になる

「あ・・・」

「お、織斑君は女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ」

「いえはいりたくないです」

「妙に即答だが、お前はひよっとしてオナナスキーでなく、オトコスキーか？それはそれで問題だぞ・・・」

「そっという訳じゃねえから！」

で、そんな会話が伝播したのか、廊下の女子は腐じよ．．．もとい『婦女子談義』が始まっていた

『織斑君．．．男にしか興味ないのかしら？』

『それはそれで．．．いいわね』

『薫、俺もう．．．』「一夏、こんなところでダメだよ．．．」
あぁ．．．」

最後の奴、妄想だろうと俺を巻き込むな！
一夏はどうか知らんが、俺はノンケだ！

「俺もノンケだよっ！ まだそういうのに興味がないだけで」
「こんなうら若き少女たちに興味がわかないなんて、枯れた爺かお前はっ」

「なんでだよ！」

『薫くん、私たちに興味津々みたいね』

『十五歳の男の子なら普通そうなんじゃないの？』

『え、えっちなのはいけないと思います！』

そんな、『婦女子談義』が聞こえてくる

ふとそちらを向けば、みてもいないのに胸元を隠す人もちらほら

．．．穴があつたら入りたい
むしろ、穴掘つてでも埋まっていたい

「え、えっと．．．柳瀬君と相部屋にして大丈夫なのでしょうか．．．
．．．個室の方が．．．」

「大丈夫ですよ！何もしませんって」

「もし何かやってきたら、かつ切ります」
「怖っ！」

まあ最終防衛手段、というか、武術とかそういうものの経験は皆無だから、爪を尖らせて引っ掻くぐらいしかできないが
・・・授業云々で身についていくのだろうか？というか、身につけたいな

「それはそれで困るんですけど・・・。んんつ。と、とにかく部屋のカギ、たしかに渡しましたからね。それじゃ、私は会議があるのでこれにて」

「お仕事頑張ってくださいね」
「はい」

「やっぱり、部屋を分けたほうがいいのかな・・・いやでも、男の子だけ一人部屋という訳にも・・・」

そう呟きながら、山田先生は去っていった

「んじゃ、俺はアリーナってIS動かしてくるから。先に部屋行つてろ」

「え？ 薫はIS持ってるの？」

「俺のは経緯が経緯だからな。んじゃ、いつてくるわー」

「おう。先にシャワー浴びとくわ」

んー・・・、取りあえず空を飛ぶという感覚にだけ慣れておこうかな
角錐を展開がどうのこうの言ってたけど、いまいちわからない

あれだ、戦闘とかをボードゲームでイメージしてる人とか居るけど、あれって上手くいくのか？

結局、飛行のイメージを何となくつかんだような気になっただけで、
あっという間に月曜日

白手袋は投げられたらとりあえず拾っておく（後書き）

という訳で四話目でした。

・・・次は戦闘シーンですが、あまり期待しないでいてください

クラス代表決定戦

「薫、本当に大丈夫なのか？」

「・・・」

「目をそらすな・・・まったく、大丈夫かよ」

ここはピット

簡単な説明をすると、ISの出撃準備をする場所だ

訓練の結果、ISをとりあえず飛ばせるようにはなった

が、俺にはISの手ほどきをしてくれるような人はいないし、一夏のような幼馴染というツテもない

相手のISについても知らないし、機体の管制にも自信がない

ないないづくしで、圧倒的に分が悪い

良くて5分持つかどうか・・・

「つーか、お前のISは届いたのか？」

「いや・・・それがだな・・・」

「目をそらすな」

ISというのは女性用に設計されている

だからこそ、男が使おうと思うと、男用にISを再設計して作り上げなければいけないのだ

それ以外にもデータ取りとかそういうのもあるらしい

え？俺の？

気が付いたら俺色に染まってた。以上

というか、俺のデータってどこに向かうのかな？

「まさか、まだ届いてないとか？」

「いや・・・そろそろ来るらしいんだけどさ」

「そういや、篠ノ之とはどうなったんだ？ISのコーチになってもらったんだろ？」

「筈？・・・よくわからないが、剣道をみっちり復習させられた」

一夏曰く、『お前にISがいつ来てもいいように、しっかり稽古つけてやる！』とか『IS起動以前の問題だ！』とか、篠ノ之に言われたらしい

「やっぱりISって基本的な体さばきは武術と変わらないのかな？」
「さあな。でもISの基礎についてはあんまり教えてくれなかった」
「案外、詳しいことは知らな・・・」お、織斑君織斑くんおりむらくんっ！」

一夏の名前を叫びながら、誰かが走ってくる音がする
少しして、Aピットに現れたのは山田先生だった

「や、山田先生、落ちついて・・・」

「これが落ちて着いていられますか！来ましたよ！織斑君のISっ！」
「・・・え？」

「よかったじゃないか一夏」

運び込まれてきたのは『白』

一夏を待っているかのように、白いISがコックピットを開いている

「これが・・・」

「そつだ。お前専用のIS《白式》だ」

気がつけばそこには織斑先生がいた
多分ISの搬入と一緒にやってきたのだろう

「すぐに装着しろ。初期化と最適化を行っておけ」
フォーマット フッティング
「はい！」

そういつて、一夏は背中を預けるようにして白式に乗り込む
へえ。最初はああやって乗るのか

「柳瀬はすぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られて
いるからな」
「了解です」

そこで俺は目を閉じ、意識を腰のウォレットチェーンに向ける

『——起動要請確認。』
アルカナ
『《Arcana》、起動します』

機械質の音声とともに、あの日のように光が俺を包む。消える頃にはアルカナが装備されていた

「3秒か、遅い。熟練のIS乗りならそんなにかからないぞ」
「うつ・・・」
「っていつか、薫は専用・・・IS？」

何故『IS？』と疑問形なのか。ぶっちゃけ俺も疑問なのだ
白式のような洗練された、剣のような鋭いシルエットと違い、アル
カナは博物館の時のまま、小学生の粘土人形
戦えるのかも疑問だ

「一応ISだぞ。『アルカナ』っていうらしい」
「アルカナ・・・タロットカードの類か？」
「千冬姉、しってるの？」

スッパーン

出席簿アタックが一夏に飛ぶ

「織斑先生と呼べと言っているだろう。タロットカードというのは占いに使われるカードでな、トランプの起源になったなんて説もある」

「へえ」

「たしか、それぞれのカードに暗示というか、意味があるんですよね」

「ああ、正位置か逆位置かでそれも変わってくるらしい。私はあまり知らんが、何故『アルカナ』なんだ？」

たしかに、まったくタロットカードとの関連性が見えてこない

「こんな訳の分からない名付けをしたものは、まさしく『愚か者』だな。意味が分からない」

「あー・・・そういえば、たしか『愚者』というカードがありましたね」

「ほお？　そういうことが、くだらない・・・」

名付け親が『愚者』。そのカードがあるから『アルカナ』・・・ホントにそれだけなの？

「とにかく、試合開始だ。さっさと行って来い」
「了解です」

ハイパーセンサーにより、いつもどこかぼやっとしている視界が鮮明になる
しかも、360°どこでも顔を向けなくても知覚できるのだから優れモノだ

『戦闘待機状態のISを確認。搭乗者セシリア・オルコット ISネーム《ブルーティーズ》中距離射撃型 特殊装備保有——解析開始』

そんなISのアナウンスのあと、みるだけで眩暈がするほどの数と文字が忙しく動きまわる
時折、画像データが見えるのはオルコットのISやその武器だろうか？

「薫、大丈夫か？」

一夏がそう聞いてくる
たぶん、ハイパーセンサーがないとわかんなかったと思う
少し不安げな気がした

「・・・お前、『大丈夫か？』以外言えないのか？」

「あ・・・そういわれればそうだな」

うつて変わって間の抜けた声に変わる

織斑先生がどこか呆れたように表情を変化させた気がした

「そうだな・・・頑張れ！薫！」

「おうよっ！《アルカナ》柳瀬薫、出ます！」

俺とアルカナの初陣！
きばってこうか！

「あら、逃げずに来ましたのね」

「逃げてるだけじゃ、男が廃るってものさ」

それもそうですわねと、オルコットは笑う

それは、楽しいとかそういうのではなく、勝者の余裕を纏ったものだ
尻尾巻いて逃げなかったためか、嘲りのような不快になるものは無い

つか、腰に手を当てるポーズがお前ほど様になる奴、みたことない

「あなたのIS・・・泥人形？お似合いでしょ」

「そりゃどうも」

オルコットのIS『ブルーティアーズ』

鮮やかな青が綺麗な、中距離射撃型

劣等感を感じてしまうのは致し方のないことである

もう試合開始の鐘は鳴っている、いつ撃ってきてもおかしくない

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンス？今なら許してやるとか、んなもんならいらねえよ」

「あら、それは残念ですわね」

『警戒、敵射撃武器へスターライトMk?』のセーフティロック

解除を確認』

アナウンスが聞こえてくる

「ならここで・・・」

次第に、銃口が俺の方を向いてくる

『警告！敵IS射撃体勢に移行！ロックされています！』

^{アラート}警告に従い、いつでも飛び退けることができるように、足に力を込める

「お別れですねっ！」

「っ！」

間一髪、射撃を横っ跳びでかわす

『右脚部に被弾。ダメージ21。シールドエネルギー残量は629
実体ダメージ最低。大きな問題はありません』

機械質な音声の報告が流れる

「くそっ！」

回避で崩れた姿勢を整えて、俺はブルーティアーズとの距離を縮めるため接近する

敵の銃はスナイパーライフル。距離を縮めれば思うようには撃てな

いはず・・・

それに武器はただの長めの鉄棒一本。コレを持って女に飛びかかるとか、どこのゲスだよまったく・・・

「ブルーティアーズの装備はこれだけではなくってよ！」

そういつて、さっきアルカナが言っていた特殊装備——《ブルーティアーズ》を展開してきた

早い話、これはビット兵器。少し前のアニメとかだと《ファンネル》なんて呼ばれていたりする、アレだ

ちなみに、ビット兵器の名前が先

その試験機だから、ISネームはブルーティアーズなのだからオルコットが射撃しながらそんなこと言っているのが聞こえた

そのビット群が、射撃の隙をカバーするようにビームを撃ちこんでくる

手数が多いし、攻撃してくる方向が読めない

回避につぐ回避で、とてもじゃないが前進できるようなものではないむしろ一発も当たっていないことを褒めて欲しいくらいだ

「ああもう！ちょこまかと！」

オルコットは当たらないことに若干苛立っている様だが、そんなことを気にかけていられる状態ではない

防戦一方では勝てない。何とか道を開かなくては

（手っ取り早いのは、ビットを叩く事だよな・・・）

何とか姿勢を整え持っている棒を使い、ブルーティアーズを叩き落

とそうとする

が、全部棒の軌道からそらされる。当たり前と言えば当たり前

「隙ありですわ！」

棒を振った時の硬直を狙われ、シールドエネルギーを削られる

『敵IS解析率70％に到達。《ブルーティアーズ》は全部で6基。ビーム発射型4基と、ミサイル発射型2基です』

ISからそんな報告が届く

今そんな情報がなんだというんだ！

『なお、ブルーティアーズはオート操作ではなく、使用者が一つマニュアルで操作している模様』

だから、そんな情報が・・・

ちゅどん！

「ぐっ・・・」

『肩装甲に被弾、シールドバリアの消耗はありませんが、被弾部が破損』

「くそっ！」

肩装甲と言え、一撃は一撃

それで姿勢の崩れた俺は、そのまま立て続けにビットの攻撃をくらいい、シールドバリアは一気に消耗

『シールドバリア残量436』

「やはり、口ほどにもありませんわね！」

「ええい、黙ってるい！」

とりあえず距離をとつが、相手の思いつボだったようだ
このビットの射撃に加え、あの銃からのビームもごく稀に来るように
やばいな・・・

ブルティアーズ
『敵ISの解析終了、データ反映・・・』
トレース
『《複写開始》』

「はあ？」

途端、アルカナから光がほとばしる

歪な粘土人形だった装甲は削られていき、次第に新たな装甲を形成
してゆく

ただの鉄棒も、銃のような形に変化していく
ごちゃごちゃとした考えは消え失せ、頭の中が妙にスッキリする

「っ！させませんわ！」

セシリアがスターライトで射撃してくる
が、アルカナの放つ光に当たった瞬間、『消えた』

「なっ・・・」

無力化なのか、吸収なのか
それすらもよくわからないまま、アルカナの光は輝きを増し、そし
てある一瞬に強く輝いて消えた

『複製完了。システムオールグリーン。アルカナ・カルレムサジタリー、いけるよ!』

気がつけば、洗練されたISが、そこにあつた

クラス代表決定戦（後書き）

という訳で、アルカナの初陣です
次も戦闘ですが、テンポがちゃんとつかめているのか不安です

青き射手へカルレムサジタリー

「え、あ、アレって何ですか!？」

ピットでリアルタイムモニターを見ているのは山田麻耶、織斑千冬
フォーマツト フッディング
に、初期化と最適化の完了した白式に乗っている一夏だ

「あのIS、セシリアが乗ってるのにそっくりだ・・・」

ちなみに、早々に喧嘩してセシリアと陰悪になっていたのは薫だけ
であり、一夏は普通にセシリアと接していた

正直な話、あの日は一夏もブチギレ寸前だったのだが、薫が先にキ
レたため、頭が冷えた

人というのは、近くに自分より強い感情があるほど相対的な意識が
働いて落ちつくらしい

「ふむ・・・」

さて、あの日の一夏の話はこれぐらいにしておこうか

この三人だけでなく、観客も啞然キャラクターとしてることだろう

柳瀬薫の乗る粘土人形のようなISが、セシリアの乗るISアルカナそつく
ブルーティアーズ

りに形態移行したのだ

人によつては、『変身した』とも表現しそうなそれは、形態移行とはかけ離れたものかもしれない

ファースト・シフト

「一次移行・・・なのか？」

「で、でもISが形態移行で装甲全体の形を急激に変化させることなんてないんじゃないんですか!？」

「・・・ありえないなんてことは、ありえない」

そう一夏はつぶやく

「ふむ・・・おそらく、『愚者』は、自分を愚者だとわかっている。そういうことだろうな」

「「え?」」

「ISの完成形なんてものは未だに存在しない。だからこそ、他のISのデータを引っ張ってきて、自分に最適な形で完成形に持つていこうとしているのだろう。見た目がブルーティアーズそのままなのは、他に使えるデータがないからということか？」

「そ、それって・・・」

「ISの公開情報である『自己進化』の設定を、どこかの誰かが過剰なまでに刺激するような何かを施したのだろう」

「ということは・・・まさか」

「あの歪な粘土人形のような形も、ISのコアが作り上げたのかもしれん」

実際のところは、何とも言えないがな。そう千冬は付け足すそれを聞いて、真耶は何と言っていいか分からなくなる

そう考えれば、装甲の形が急激に変わったのも納得がいく

『ISのコアが作りだした装甲』だから、形もISの意のままなのだ

制作者は、ISの作成に必要な知識と素材をISのコアに与え、あとはISの好きにさせる

他のISとの戦いを続ければ学習し、自然に装甲を作り上げ、自然に強くなっていく

「じゃあ、あのISって戦えば戦うほど強くなるってことなの？千冬姉」

「元々ISはそういうものだ。あれはその働きが他のと比べて強いのだろう。あのブルーティアーズに似た姿、おそらくは持っている能力も似ている」

「それって、BT兵器が使えるってことですか？」

「おそらくは。まあ、今ここで理論を飛ばしていても仕方ない。試合を見ていれば、そのうち向こうから教えてくれるはず」

そういつて、千冬はモニターを食い入るように見つめている

『青い射手』

ISネームをそう変えてもいいんじゃないかと思うほど、そのISはブルーティアーズに似ていた

「な・・・ま、まさか・・・わたくしの『ブルーティアーズ』が・・・」

歪んだ形状でもなく、『ブルーティアーズ』
どうして・・・

『どうどう？この形、気にいつてくれた？』
うお、ビックリしたっ

急に頭の中に声が響く

それはあの日博物館で聞いたのと同じ質のものだった

『ブルーティアーズの解析に手一杯で、適当な機械音声使ってごめんね。でも、もう大丈夫だよ』

つか、君は誰だい？

『ん？ボク？ボクは《アルカナ》。今、マスターをのせてるISだよ。やっとボクの原型をつくることができたから、こうやって出て来たの』

・・・は？ ISのコアは深層に意識があるって聞いたことあるけど、ひよつとして、それか？

『んー・・・難しいことはあんまりわかんないけど、これからよろしくね、マスター』

お、おう・・・

『それで、今のボクの状態なんだけどね、ブルーティアーズのデータをもらって、ボクがちょっと弄ったのを反映させたんだよ。すごいでしょ？』

な、なるほどな・・・よくわからんが、なるほどな

自信満々なその声に、なぜか胸を張るみさとの姿が頭によぎった俺って、シスコン？それとも軽いホームシックになっているのだろうか？

ああ家が恋しい・・・

『ちようどいいから、試してみようよ。ボク、マスターの戦い方もっと知りたいし』

あ、ああそうだな、アル

『・・・アル？』

うん。アルカナじゃ長いし、縮めてアル

『そっか、えへへ・・・アルかぁ・・・。って、言ってる場合じゃないよね。マスター、いくよ！』

おう！

この間、約0.5秒

コンピューターより速く思考ができるようになる、ハイパーセンサーの恩恵であつた

「さて・・・これからはこっちから行くぞっ！」

『ブルーティアーズをロックオン！』

「くっ・・・ただのモノマネ上手なISなんかに！」

「ただのモノマネ上手か、戦えば分かることだ！」

そんな口上と一緒に俺は、ブルーティアーズの《スターライトMk
?》を模した銃、《フルメン》を構える

なんと今まで唯一の武器だった棒も銃に変化していたのだ
多分他にも色々増えてるんだろうな。確認しておかないと・・・

（銃を扱う機会なんて、俺は願ひ下げだぞ）

なんて、親父の話の間に考えていた自分を急に思い出す
ISを使う以上、こういうのを持たなければいけない
どうも、俺の願ひは現状では叶うこともないようだった

とにかく、銃を扱うのは初めての経験だがアルがサポートしてくれる

『軌道予測・・・こつち!』

ターゲットサイトが左にずれる。そのまま引き金を引くアルの予測した射線に、オルコットの移動先が重なる

直撃

「きゃっ!」

「おー! ジャストショット!」

『ボク、軌道予測とかISの解析とかつて得意なんだ!』

おおっ! 超頭脳派IS

『ISに脳筋はいないよ? それよりマスター、くるよ!』

「ブルーティアーズならば!」

そういつて、ビットのブルーティアーズを再び展開する

・・・ややこしいから俺たちのなかではこれから先ビットで統一

「アル!」

『任せて! ビット軌道予測中・・・! 真上だよマスター!』

「了解っ!」

上に銃口を上げると、ちょうど良くその位置にビットが来た

「なっ・・・」

「まず一つ!」

爆炎をあげて、ビットは碎け散った

『お見事っ！それと、セシリアさんはマスターの注意がいきにくい場所、つまりは後ろとか真上とかからビットを攻撃するみたいだよ！』

そうか、だから反応が遅れて回避に専念するしかなかったのか

「攻撃支援ビット、《トリックスター》展開！」

『トリックスターの操作はボクがやるよ。マスターはセシリアさんを攻撃して！ボクがビットを破壊するよ』

「たのむぜアル！」

ああ・・・二人いるってこんなに色々できちゃうのか

俺が引っ張られてる感じなのはこの際しようにないとして

ちなみに《トリックスター》とはビットのブルーティアーズを模したものだ

性能はブルーティアーズと同じだが、二基しかない

ビット同士の戦いが始まる

俺はその間もオルコットに狙撃を仕掛ける

オルコットは俺たちと違って、ビット操作と同時に他の作業を行うことができないようだ
足が完全に止まっている

いくら銃器初心者の俺だって静止している標的なら大丈夫
ターゲット
しっかりと照準を合わせ、また引き金を引く

稲妻のような鋭い光が、オルコットに向かってまっすぐ飛んでいく

「このっ・・・」

さすが代表候補生。俺みたいにむぎむぎ当たるのではなく、しっかり回避

だけど、その時集中が若干途切れ、ビットの動きが鈍る

『いまだっ!』

「しまっ・・・」

アルがビットを一基落とす

オルコットが動揺した隙を狙って撃とうとするが、チャージ中で、撃てなかった

そっか、連射ができないのか

「アル!フルメンの性能を変えることってできるか?」

『今やろうとすると、それに掛かりきりになっちゃうよ。マスター、トリックスターの操作出来る?』

出来っこないとか言ってられる状況ではない
やらなくちゃいけないんだよな。多分

「コツを教えてくれ」

『チェスとか将棋の駒を動かす感じだよ』

「オッケー!やってみる!」

『頑張れマスター!』

「おうよ!」

そついうと、アルは喋らなくなり、フルメンが粒子に戻る

「チエスの駒を動かす感じ……」

戦場を頭のなかでチエス盤に置き換える。俺はキング、ビットは差し詰めクイーンか

クイーンが二つ……最強じゃないのか？

敵のビットは同じクイーン、オルコットはキング

やることはさつきとだいたい同じだ
オルコットをトリックスターで攻撃^{チェック}

それを避けるために移動した隙に、もう一つのトリックスター^{クイーン}でブルティアーズをとる

ファイアー
射撃！

「くっ……」

成功！

残りのビットはあと一基

悔しがってるうちに、一気に詰め寄り、蹴り飛ばす

「ビット駆除、終了」

『こっちも終わったよ。反映！』
フィードバック

アルがそういうと、新しいフルメンが出て来た
銃身は半分程度になり、片手でも扱える仕様だ

スコープはついたままだが、飾りか？

「な・・・何なんですの！？さっきと銃の形が・・・」

『銃身を短くして、すぐに撃ちだせるようにしたんだよ』

「なるほど！ ガ○ダムのビーム○イフルみたいだ！」

『ガン・・・？よくわかんないけど、さっきより連射出来るはずだよ』

「それと、接近戦闘武器つてある？」

『あるよ。だけど迎撃用の武器みたいだよ』

「よし、それ出してくれないか？」

『いいよ。《グラディウス》！』

左手に現れたのは、剣としては小型の武器だった
なるほど、斬るよりは受け流したりの方が得意そうな形だ

「でも斬りこむ！」

『ええっ！？でも・・・』

相手の方が射撃の腕は上。それは間違いない

それなのに射撃戦をやれば腕前の差でこちらがジリ貧だろう
回避と射撃を同時に行うことは今の俺にはできない

ならば間合いをつめて、斬り伏せばいい

武器は心許ないが、相手の得意な間合いであるよりはずっとましだ
ろう

新しくなったフルメンを構え、突撃

「動きが直線的すぎますわ！」

セシリアは、スターライトを構え、撃ってくる

それをきりもみ運動でよけ、射撃で牽制

狙いなんてつけない。とにかく撃って息つく隙すら与えない

速度は落とさない。フルスロットル 最大速度で一気に間合いを詰める

『む、無茶苦茶だよ・・・』

昔から言っじゃん。エリートとかって自分の予想だにしない攻撃に弱いつて

方向修正が何度か入りながらも、着実にブルーティアーズとの距離を縮める

「くっ！」

スターライトからの近距離射撃が飛んでくる

直撃だったが、構わずに突っ込む

「獲った！」

間合いを詰め、相手の胸元めがけてグラディウスを構え突っ込む！
いくら相手のシールドエネルギーが残っていようと『絶対防御』が
発動すれば、勝機はあるはず！

「ふっ・・・」

不意にセシリアの口元がゆがむ

「！？」

「おあいにく様！ブルーティアーズは6基あつてよ！」

「んなあ！？」

『・・・ボク、少し前に報告したと思ったんだけど。ビームビット
4基 ミサイルビット2基つて』

何故もう一度言わない！

『いや、了解して突っ込んでるのかなって』
ちくしょおっ！

「さようなら！」

「くそっ！ここまで来てやられるかよっ！」

近距離でミサイルが撃ち込まれる。今の姿勢を考えると、おそらくは回避不能

「うらあああああっ！」

ミサイルに照準を合わせて引き金を引く

シュウウン・・・

情けない音を立てて、中空に霧散するフルメン

『考えなしに撃ち過ぎだよ、マスター。もう銃弾に回せるエネルギーは無いよ』
「くそっ！くそがあっ！」

次第に迫ってくるミサイル

ISは高速で移動しているはずなのに、着弾までが妙に長く感じる
そのまま、俺が弾頭に突っ込む形で

――着弾

ドガアアァン！

赤色を通り越して白色をした爆発に、俺は巻き込まれていた

遅れてやってくる着弾の衝撃

鉄球か何かで思い切り殴られたような衝撃と、炎に手をつ込んだような熱が、一瞬体を通る

『敵のシールドエネルギー残量は133・・・ボクらはもう0だよ』

《試合終了。勝者、セシリア・オルコット》

そんなアナウンスを、俺は自分の浅はかさを呪いながら聞いていた

青き射手へカルレムサジタリー》（後書き）

という訳で戦闘パート後半でした

初陣は黒星

戦闘シーンはやっぱり難しいです。はい

アル（前書き）

今回は解説が入るので、若干長めになります

その上、ちゃんと解説できているのかさえ分からないという・・・

アル

『ごめんねマスター。ボクがもつとしつかりしてれば・・・』

「いや、気にすることは無いさ。俺が考えなしに飛び込んだのが悪いわけだし。というか、あつという間に減ったな、エネルギー」

400以上あったエネルギーがビームの直撃とミサイルの直撃で全部消えた

当然なのか多いのかは俺はよくわからないが、5とかそれくらい残っていてもよかったのではないだろうか？

『トレースにもエネルギーを使うからね。それに、トレース後2時間は機体へのダメージも二倍ぐらいに膨れ上がるし』

アレか。羽化したての昆虫みたいな感じが

羽化したては脆いもんな・・・

『エネルギーの効率的な運用方法も学んでいかなとなあ』

「だなあ・・・俺は、乗り手としての技術も学ばないとなあ」

『言つとくけど、ボクは制御とかの補助は出来ても指導はできないよ』

俺のスキルが上がれば、アルが裏でやれることが増える

結局、損は無いのだ

『ほら、セシリアさんをほつといていいの？ 詳しいことはまた寮

で話そうね、マスター』

「ああ。あとでな」

「何をぶつぶつ言ってるのですか？ピットに戻りましょう？」

ひよつとして、アルと話てるのが聞こえてたのかな？

それがひとりごととして受け取られた。なんという赤っ恥か

「ん？ ああそうだなオルコット。・・・すいませんでした」

『相手が怒ったら、取りあえず謝つとけ。自分が酷い目に合わないうちに』

親父がいつてたっけ・・・ビクビクしすぎだろ
というか、もう遅いな。これは

「何をいまさら。それに元々この決闘を申し込んだのはわたくしです
してよ？」

ああ、そついやそつだつたな

「わたくしが勝つなんて元々当然の結果です。それよりも、な
ぜ搭乗経験が二回しかない人間が、初めて触る《ブルーティーズ
》を操作できたのですか？」

「お、俺はもう猿ではないんだな」

負けた悔しさは残るが、そこはオルコットに当たっても仕方がない
ISの道は鍛錬に次ぐ鍛錬。それだけなんだろうな

今は、今後三年間こいつから猿呼ばわりされることがなくなった
けどでもよしとしよう

「認めた相手には敬意を。それがイギリスですよ」

「っつーことは俺は、お前に認められたのか？」

「一応は。ですてよ」

一応、か。もつと確立したものにしていかないと、また猿にされそうだ

「そこ！立ち話をしていないで、さっさとピットに帰ってくるように！」

「お、これは出席簿アタックくらっちまうな。じゃあオルコット、またあとで」

「・・・セシリアでよくってよ。薫さん」

「ん？そう？ んじゃあセシリア、またあとで」

「はい。またあとで」

そういつてセシリアは向こうのピットに帰って行った

「いやあ、戦いのあとの友情というものは、いいものですねあ」

『・・・マスター、言い方がオヤジくさいよ』

とりあえずピットに戻るか。アルがなんか言った気がしたが、気にしないでおこう

「考えなしに動きすぎだ、馬鹿モノ」

「はい・・・」

俺は、到着一番に織斑先生よりありがた〜いお言葉をもらっていた

「今回のように馬鹿みたいな動きをしていれば、ISが泣くぞ」

「・・・はい」

スパアン

「もつとしゃきつとした返事が返せないのか！」

「はいっ！」

くそ、やっぱりこの人容赦ねえ

ことさらESに関しては先生というより教官だな。やっぱり

ちなみに一夏はいまセシリアと対戦中

わりと劣勢だった

「それと、お前に少し聞きたいことがある」

「なんでしょうか？」

「そうだな、《粘土人形》から《ブルーティアーズモドキ》に変化したあとの事だ」

モドキ。やっぱり周りからみればそんな感じなんだろうな

『ぶーっ。仕方ないじゃん。まだ材料だって足りないんだしさー』

アルがぶー垂れてるが、ほうっておこう、織斑教官の話を放っておいた方がまずい

『ぶーぶー』

「あの、形態移行の後、明らかにお前の動きが変わっていたのだが、何故だ？」

『複写だもん、形態移行とはちょっと違うんだもん』

「変わっていた、と言いますと？」

「IS初心者丸出したった動きのはずが、オルコットにもまだ出来ない、ビット操作中の射撃をやつてのけたな。何があつた」

「・・・言っちゃつていいのかな？」

『別にいいんじゃないの？ボクにとっては困ることないし』

信じてもらえるかだよなあ

・・・かくかくしかじか

「ISの深層にあるはずの意識が顕在化しただと？」

「はい。それで、そいつが色々補助してくれたんです」

「・・・には信じ難いな」

「でしょうね。そして、今は僕にもそれを証明する術はありません」

『証明なんてできないよねー、ボクはマスター専用だし。他に誰も
のせたくないし』

「ふむう・・・」

「あの、織斑先生？」

「まあいいだろう。今日はもう寮に帰つて寝てしまえ。織斑、お前
もだ」

「「はい」」

いつの間にか帰つて来ていた一夏と一緒に、まわれ右してビットを
出る

あー・・・どつと疲れが

で、今は寮に向かって移動中

先頭に俺、後ろに一夏。一夏の隣に篠ノ之

この三人で歩くときは、俺が前か後ろかの違いである事が多い

「あー・・・結局、俺たちぼろ負けだったな」

「いや、俺はあの一撃が入っていれば・・・」

俺は振り向かずに応える

「五十歩百歩って故事成語を知ってるか？」

「大差がないとことの喩えだったな？」

「そうだよ篠ノ之。つまりは、俺たちが何を言っても・・・」

「なるほど。いまのお前たちが何を言っても・・・」

「負け犬の遠吠えということだ」

「ぐおおおっ！」

顔は向けてない、なのに一夏がどんな表情をしているかがわかる
そして、俺がそれ以上に酷い表情をしているのも分かる

・・・というかアル、どうしてハイパーセンサー開きっぱなしなんだよ

『だって、いろいろ知りたいもん。ハイパーセンサーはボクの目と同然だもん、マスターだって、便利でしょ？イロイロと』

・・・否定はしない

『ならいいじゃんか』』

はあ・・・目立たないようにだけしといってくれよ・・・

『はいはい』

俺の頭にはカチューシャがついていた

・・・男なのに

「はあ・・・」

「ん？どうしたんだ薫、ため息なんかついて」

「・・・俺、体力もつかないあ？」

常時ハイパーセンサーとか、体力使いそうなんだけど・・・

「????」

なんのことだから分からないって表情だな一夏君

「訳のわからない男だな。お前は」

「分からなくてもいいと思う」

「？」

「ーで、結局お前はなんだ？」

ここは、学生寮。一夏を先にシャワーに入れさせ
そのさい一夏はごねた。が、そこはあれだ。平和的解決手段で何と

かした

『んー？なんだ、ってどういうこと？』

そんな声が頭に響く

・・・傍目にはこれって俺の独り言にしか見えないのかな？
頭で念じても通じるようならそれに越したことは無いが

以下、俺の思考との区別のために、《「」》がついてるだけになります。
俺は喋ってません

「たしかに、質問が曖昧すぎたな。そうだな、まず一つ。何で博物館に居たんだ？」

『それは簡単だよ。マスター以外、誰ひとりとして起動できなかったんだよ？ 完全に博物館用の模造品だと間違えられたってワケ。
失礼しちゃうよね』

そーいやそうだったわけ？
じゃあ問題はそこじゃなくて

「・・・ISって、女性に反応するもんだろ？何で俺に反応したんだ？」

『女の子だからいいってわけじゃないもん！他の皆が人コアを選ばなすぎなの！』

「それで、男を選んだお前も、かなり偏屈だと思うぞ」

『え、そーかな？それだったら、白式も男の子を選んでるよ？』

「・・・というか、ISってIS乗りを選んでたんだ」

『そりゃ、命を預け合う仲になるんだもん。他の皆はどうか知らないけど、ボクはしっかり選びたいんだよね』

「で、俺はお前のお眼鏡になかった」

『そーゆーこと。マスターとなら、憧れのブリュンヒルデにもなれる！って思ったんだ』

「根拠は？」

『直感』

ガタッ

「・・・しっかり選ぶんじやなかったのかよ」

『自分の感覚は大事にしたいもん』

「はあ・・・、で、次だ。《複写》^{トレース}ってなんだ？」

正直俺もビックリした

だっていきなり相手のそっくりさんになるんだぜ？

『ボクの得意技だよっ！相手のISデータを複写^{トレース}して、それにボク自身の経験を加えて、マスターに最適の形で機体^{フィードバック}に反映させるんだ』

待ってましたと言わんばかりに、言いだすアル

心なしか、早口だ

「で？先いつてた《材料》っていうのは？」

『ISのデータ。ボクは装備を作る基礎的な技能はあっても、具体的な設計プランとかないんだ』

だから、相手のISから構造データを引っ張ってきて、自分なりのアレンジを加えるのか

それって要は相手IS次第で強くもなったり弱くもなったりするわけだろ？

なんつーか、俺を選んだ理由といい、行き当たりばったりで無計画

だな

ひよつとして、その行き当たりばったりもコイツは計画してたんだろっか

「それで、形態移行との違いはなんだ？」

『トレース ワンオフ・アビリティー
複写は単一仕様能力のような扱いだから、何度でも出来るんだ。
形態移行がほとんど一度きりなのに対してオトクだよ』

単一仕様能力

たしか、使用者とISが最高の形で同調した時、発生する現象だったっけ？

普通は『二次移行』からしか発現しないって話だけど

『不思議な話だよー。ボクも白式も、一次移行から使えるんだよね』

「え？白式もそうなの？」

『うん、ちよつとシェアリングしただけなんだけどね、使えるっていつてたよ』

「・・・ひよつとして、お前ってISデータをシェアリングして拾ってくるのか？」

『そうだよ。ちよつとお話すると構造とかの詳しいデータくれるんだ』

・・・そのお話、なんか怖い

『細かいことは気にしない。・・・老けるよ？』

「老けねえよ！」

『あははっ』

「・・・で、あのあとISネームに追加されていた《カルレムサジタリー》っつーのは何なんだ？」

『簡単だよ。これからも色々な形態が出てくると思うから、それを整理するための表記だよ。カルレムは、青という意味の《カエルレウム》と射手っていう意味の《サジタリウス》から』

なるほど。何でそんなことを知ってるのかは甚だ疑問だが、おそらくはネーム用に辞書でもインプットされてるんだろう
中二臭いと思ったのは、俺とキミの秘密だぞっ

・・・キモいな

『装備はさっき作った三つを基本にして、色々弄っていくつもりだよ』

「・・・俺でも扱えるようなチューンでな」

『もちろんだよ。いざとなったら、ボクも補助するし、あ、でも・・・』

「補助の分、余計にエネルギーを消費するとか？」

『そうそう。それと操作の補助はできるんだけど、それやってるうちにはかかりきりになるから、機体制御とかはマニュアル操作になるよ。マスターも自分を磨くのを忘れないでよね』

「りょーかいだ。アル」

『うむっ。素直でよろしい』

どっちが使われてんのかわかんねえな。これじゃ
そこまで話した時、シャワー室の扉が開く

「あー、早く風呂につかりたい・・・」

『お、一夏くんが上がったようだね。マスター、お風呂じゃないけどシャワー浴びてくれば？』

「ん。そうするわ」

そのまま一夏と入れ替わりで、シャワーを浴びた
程よく調整された温度は気持ちよかった

・・・アルカナの意識『アル』か

シャワーの音が響く

もくもくと湯気が立ちあがる中、セシリア・オルコットは今日の試合を思い出していた

（まさか、あのようなことを・・・）

突然、『ブルーティアーズ』のような形になった彼のIS
おそらくブルーティアーズと同じ、中距離射撃型であろうスペック
のISなのに突っ込んできた

それ自体は、ただ愚かな行為でしかなかったが、何よりも驚いたのが『ビット操作中と同時に他の行動をやった』という点だ
セシリア自身ができない事を、薫はやつてのけたのだ

・・・本当のところはISのサポートがあつたから出来たのだが、
彼女はそれを知らない

故に、薫一人で、代表候補生である自分以上の事を、やつてのけた

と思っているのだ

（この、わたくしが・・・まさかあのような男に後れをとるとは）

知識も経験も自分より劣っている人間に、あそこまで追い詰められるそれは、彼女自身の経験がまだまだ足りないことの証であろう

だが、彼女の胸は高鳴っていた

（骨のある人間がいなければ、面白くありませんものね）

フフッ

彼女は、とても楽しそうに笑う

（他のところはまだ初心者ですから、基礎基本はわたくしが教えて差し上げましょうか・・・）

とにかく、セシリア・オルコットは試合以降、柳瀬薫のことを好敵手^{バル}となりうる存在として意識するようになった

（どんなIS操縦者になるのか、楽しみですわ・・・）

シャワーの音が、セシリアの鼓動の高鳴りを隠すかのように響き続けていた

で、代表決定戦の次の日

「という訳で、一年一組のクラス代表は柳瀬薫君に決定です。」

パチパチパチーッ

クラスのあらゆる場所から『おめでとう』とか聞こえてくる
という訳かをしっかりと聞きたいが、まず、聞きたい

「・・・辞退していいですか？」

スッパーン！

「・・・っ。っっーか俺昨日負けただろ！『勝った方がクラス代表』
って話じゃなかったのかよ！？」

そう、たしか昨日の決闘は『勝った方がクラス代表』という内容だ
ったはず

俺は見事なまでの完敗を喫していたではないか

『馬鹿正直に突っ込んで近距離でミサイル直撃だもんね』
それを言うな恥ずかしいっ

「あ、それはですね・・・」

「わたくしが辞退したからですわ！」

そういつて、相変わらず例のポーズをとってセシリアがそういつた

「は？辞退？」

「そうです、まあ、あなたは結果的に負けましたが、それは相手が

このセシリア・オルコットだったから。仕方のない事ですわ」

『実際負けてるんだから、セシリアさんの言うことに文句は言えないよね』

「む、むぐう・・・」

約束されていた勝利みたいな言い草に思わずまた怒ってしまいそうだったが、アルの一言で出かけた言葉を止める

実際俺らは負けたんだもんな。『敗者は勝者にしたがうべき』って、両親に揃って言われたっけ？

言ってた時は、明らかにお袋の方から勝者のオーラが漂っていた

「それでまあ、大人げなく怒ったことを反省しまして。薫さんに、クラス代表を・・・」

「あれ？織斑君はどうなるの？」

「たしか候補にあつたよね？」

「そうだそうだ、むしろ織斑君が代表の方が・・・」

流れに乗って一夏を代表に仕立てるように言ってみるが、声質的に無理があつたらしい。セシリアはあつという間に反応した

「さりげなく自分の期待をいってみても却下ですわ！私は一夏さんよりも、あなたがいいと思います！」

「なんだそれ！？」

一夏でもよいではないか！

「だってそっちの方が一夏さんにつきつきり指導が・・・」

「・・・言いたい事があるなら、ハッキリ言ったらどうだ？」

セシリアが何か言いだすが、まあ俺にはバツチり聞こえている訳で

ハイパーセンサーって聴覚にも作用するのか？それともただの地獄耳？

うーん？

「な、なんでもありませんわ！それにいまならば、一夏さんと一緒に、クラス対抗戦まで放課後ISの指導をしてあげます！」

「えっ！俺もかよっ！」

そりゃそうだ

お前だって専用機持ちなのに、遊ばせてる余裕は無いだろ

「あいにくだが、一夏の教官役は私が直々に頼まれたからな。必要ないぞ」

篠ノ之が『一夏さんと一緒に』に反応してくる

そつえば、一夏もそんなこと言ってたな

『直々に』というところがやけに強調されている

つかそんなに睨むなよ。なんか周りの空気が冷えてる気がするぞ

「あら、あなたは篠ノ之さん。IS適正Cのあなたより、IS適正Aのわたくしのほうが、指導者役としては適切でなくて？」

「て、適性は関係ないだろう！適性は！」

そんな篠ノ之の睨みも関係なしに、セシリアは切り返す

ちなみに俺はIS適正は『・（ナシ）』。まったくの0だったらしい
じゃあなんで動かせるのか

俺が知りたいわ！！

『マスター、セシリアさんが指導者になってくれるって』
そこはこっちにとつてもありがたい話だ

さすがに指導者なしの独力で行くのは限界がある。というかもうすでに頭打ち

セシリアは結構な人の中から選ばれているであろうエリート
教えを請うてみるのも悪くは無いかもしれない

「それに、代表ともなれば実戦経験を積む機会も多くなります」
「・・・」

『ボクはこの話乗ったほうがいいと思うよ。ボク、いろんなISと戦って、相手を知りたいし』

「・・・そこまで言われて辞退したら、俺ってとんだKYだよな」
「よく分かっていらしてますね」

「えっと、じゃあ、決定でいいんですね？後悔しませんね？」

山田先生が俺の意思を聞いてくる

「はい」

「じゃあ、一年一組、クラス代表は柳瀬薫君に正式に決定です！」

「これから一年間、ままならないこともあるかもしれませんが、よろしく願います」

今度は形だけの拍手でなく、暖かく迎え入れてくれる拍手な気がした

「柳瀬君はIS操縦の経験が積める。私たちは他のクラスに柳瀬君の情報が売れる。そこからついでに織斑君の情報も売れる。一粒で

「三度おいしいわね」

そんなことを『きゅぴゅん』とか言いそうな目でいう女子がいた
・・・俺的には、商売しないでほしいって感じかな
売るなら一夏オンリーで

「俺の情報も売るなよ！」

「さて、次はISの基本操縦訓練だ。各人遅れないように。遅れたら罰としてグラウンド5周」

ちなみに、グラウンドの外周はたしか10kmぐらいあったと思う
五周したら50km。パネエッス

さっさと行くことにしよう

アル（後書き）

という訳で、前書きにも書いたとおり、いつもより長めの回でした
分けたほうがよかったかですね・・・？

THE 飛行訓練

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。柳瀬、織斑、オルコット、ために飛んでみる」

遅咲きの桜も散った四月下旬

正直桜を見る機会もなくあつという間に月末に突入
光陰矢のごとしとはよくいったもんだ

「さつさとしろ馬鹿共。オルコットはもう準備がすんでいるぞ」

セシリアの方に意識を向けてみる

なるほど、あつという間に展開して、あつという間に浮かんでる
ちなみに俺がブツ壊したビットの回復は終了しているようだ

というか織斑先生、一夏と俺をまとめて呼ぶときは必ず『馬鹿共』
なんだけど・・・なぜだ？

俺そんなに馬鹿な動きしてないと思うのに

「集中しろ」

ういつす！出席簿アタックはもうこりこりつす！

(アル、出番だぞ)
アルカチ
『了解、IS展開！』

心で念じると、光の膜が俺を包み、次の瞬間にISが出てくる
この間0.8秒

一夏よりも展開終了は若干遅かった。くっ・・・

「もつと、発光を抑えられないのか？目に悪い」

「すいません・・・」

「まあいいだろう、飛べ」

セシリアの動きは速かった。あつという間に飛んでいって、遙か頭上で停止する

俺もそれに続くが、セシリアよりは遅かった

ちなみに一番遅かったのは一夏

スペックがどのより慣れやイメージの問題なんだろうな

ちなみに俺はトリックスター操作のイメージから『盤上を動く』イメージだったりする

アレだ、ゲームにもある座標をクリックしたところにキャラが動く感じ

『マスター！自由に動いてみようよ！』

半ば興奮気味の声

「いや、あかん。あの織斑先生だ。適当なことしたら、間違いなく俺が出席簿アタックくらう」

『えー・・・』

分かってくれアル。あれメツチャ痛いんだぞ

ふと、一夏とセシリアの方を見てみると何やら話しこんでいるおそらくはセシリアのレクチャーだろうな

『ISの移動はイメージが大切。本に書かれているようなイメージ

をするよりも、自分でやりやすいイメージを作り上げたほうが建設的でしてよ?」

なんて俺も言われたな。初期の初期に

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く下りてこい！」

と、オープンチャンネルで怒号が飛んできた
みてみれば、篠ノ之が山田先生のマイクを奪って叫んでいた

あーあ、アレは篠ノ之に出席簿アタックだな

「ほら一夏。嫁が怒ってるぞ」

「よ、嫁え！?い、いや、筈はただの幼馴染で・・・」

「・・・薫さん、そういうからかい方は、どうかと思いましてよ?」

「うつ・・・すいません」

「分ければ、よろしくてよ・・・」

なんなんだ、このプレッシャーは?

本気で睨まれたようだ。気をつけないと

「たしかに今のはちょっとないと思うなー。あの二人、付き合ってもないんでしょ?」

「うーん・・・絶対に脈ありだと思っただけだなあ・・・」

特に篠ノ之は。指導の話の時の必死さとか、そんな気がするんだけど

『確証のないうちからそんなこと言っちゃだめだよ?』

「へーい・・・」

「三人とも、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上十センチだ」

『マスター、自分で頑張って！ボクはしっかり受け止める準備しとくから』

「何故に、墜落前提！？」

『だってボクが飛行の補助したら、マスターが成長しないじゃん。それじゃあ訓練じゃないよ』

もつともです・・・

「オルコット、その二人に例を見せてやれ」

「わかりました」

セシリアは、急効果を開始

そして、ギリギリの位置に、すごい綺麗に止まった

「よし、柳瀬、やってみろ」

「了解」

頭のなかでイメージを起こす

チェス盤に見立てる

移動先は地面から10センチ上

『うわ、イメージはチェス盤なの？トリックスターの操作とおんなじで？』

「同じ形の方が、イメージしやすいだろ？」

『そうだけども、三次元的なイメージとしてつかみにくくないの？』

「開始地点と移動先をつなげた直線があるのは平面だ。問題ない」

『な、なるほど・・・』

この間までは特に何も考えずに動かしてたからな。ここでイメージを確立させたい

「んじゃ、動くぞ。対衝撃に備えておいてくれ」

『了解だよ！マスター！』

一気に速度を上げる、目標は地面

結構おっかないが、アルがいる。多分大丈夫だ

100センチ、60センチ、30センチ・・・

次第にセンサーに表示される高度が下がってゆく

いまだっ！

自転車のブレーキをかけるイメージを起こす

物体を止めるというイメージはどうしてもコレしか浮かんでこなかった

『ちぐはぐだよね』

今は応える余裕もない

自転車のブレーキのイメージがまずかったのか、ぴったりと制止せず、ISが少し滑る

結局勢いを全て殺すことはできず、地面にぶつかる

「ぐっ・・・」

鈍い音を立てて、俺は地面にぶつかった

殺しきれていなかった衝撃の分、ゴムまりのように二回ほどはねた

「いつてえ・・・」

「ふん、まあいいだろう。次、織斑」

女子のクスクス笑いが辛い

うう・・・

「まあ、地面を抉らなかったただけましじゃないのですの？」

「・・・地面を抉ったほうがよかったかもしれない」

このクスクス笑いをハイパーセンサーで鮮明に見るよりは
つつーかアル、いちいち拡大するなっ

俺の心が死んでしまう

「あら？かなり痛いすわよ？激突って」

どうも、セシリアもやったことがあるらしい

皆、最初は初心者であるということだろうか。なんだか気分が楽に
なった

俺と同じことをやったセシリアだって代表候補生まで上り詰めるこ
とができたんだ

（なら、俺にだって・・・）

自分よりも先をいつている人が、自分と同じ道をたどった事を考え
ると、そう思えるから人間面白い

ズドーーーーー！

「うえっ!？」
「きゃっ!」

思考の海にふけつているときに大きな音がしたもんだから、変な声が出た

頭をあげてみると、土煙がもくもくと立ちあがっていた

『一夏くんがね、減速なしで突っ込んだみたいなんだよ』

白式がかわいそう・・・なんて、アルはぼやいてる

――人はそれを、墜落という

「セシリア」

「なんでして？」

「・・・前言撤回、勢いを殺せててよかったよ」

「理解していただけてます？　なら、まずは武器の運用云々よりも、機体制御をモノにしましょうか？」

「ああ、頼む。それよりも、一夏の様子を見に行こうか」

「そうですね。行きましようか」

一夏は、特に問題は無かった

IS装甲がひしゃげてる様子も、本人が怪我をした様子もない

ただ、おそらくは俺と同じでくすくす笑いに瀕死状態だろうな。心が

そのあと、武装の展開の練習をしたあと、時間が来た

「時間だな。柳瀬、織斑はグラウンドを片付けておけ」

「うっ・・・はい」

何故に俺まで!?

「お前も墜落しただろう? ならば連帯責任というやつだ」

『・・・ガンバ、マスター』

ぐすん

「ふうん。ここがそうなんだ・・・」

その日の夜、小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女が、正面ゲートに立っていた

「それで、受付ってどこよ?」

ポケットでくしゃくしゃになった紙を取り出して、確認する

「本校舎一階総合事務受付・・・って、どこよそれ?」

文句をいっても紙は返事しない

周りを見ても、地図らしきものは無い

「ふん! 自分で探せばいいんでしょ!」

そつぶー垂れながらも彼女の足は止まっていない

考えるよりも行動。それが彼女

『実践主義』であり、『よく考えない』ということでもある

「だから、そのイメージがだな・・・」

不意に男の声を聞いて、ビクッと反応する彼女

すぐくよく似た声、というか、おそらく同一人物

どぎまぎしながら見てみると、彼女の予測は当たっていた

「くいつて感じててなんだよ。くいつて感じてて」

「・・・くいつて感じだ」

「だから分からないってーおい待てって、箒！」

・・・あの子は誰？

気がつくと胸の高鳴りは、恐ろしく冷え込んだ怒りともつかない苛立ちに変わる

しかし、それは仕方のないこと

想い人が、自分の知らない子と話をしていれば、誰だってイラッと来るもの

ゆえに、苛立つのは仕方のないこと

彼女の名前はファン・リンイン鳳鈴音

一夏に思いを寄せる乙女がまた一人、蝶が花の蜜に寄せられるようにやってきた

・・・というか、どれだけこの男は色々な乙女から想われているの
だろうか

そして、それに気がつかない鈍感さは、どこから来るのか
ハッキリしたことは、誰も、知らない

THE 飛行訓練（後書き）

という訳で飛行訓練でした

IS初心者の薫君は、現時点での一夏よりはマシなものの、それでも操縦はヘタクソというレヴェルです

今はイメージ組立の最中です

クラス代表決定祝賀会？ 要はパーティータイムです

「という訳でっ！ 柳瀬君クラス代表おめでとう！」

パンッ！パパーン！

クラッカーの音が鳴り響く

そのあとしばらくしてから漂ってくる火薬のにおい

「……」

えーと、なにこれ？

たしか俺は夕食後の自由時間。ここでセシリアにISの戦術を教え
てもらったために待ち合わせてたんだよな
で、気が付いたらこの状況。何で？

『多分、待ち伏せされてたんじゃない？』

セシリアも一枚かんでんのか

壁には、『柳瀬薫 クラス代表就任パーティ』なんてでかどかど貼
られている

「いやーやっぱり祝い事っていうのはサプライズに限るねえ」

「ほんとほんと」

「クラス対抗戦も面白くなりそうだねえ」

「ほんとほんと」

というか、相槌うつてるのは二組のか？

見たことない顔だけど

「ひよっとしたら、優勝しちゃうかもねえ」

「いや、それは二組じゃないかな？」

おお、適当にうつてる訳じゃなかった

『ボクら合わせて43人・・・クラスの人数超えちゃってるね』

なんだって

「人気者だなあ。薫」

少しにやけたようにして一夏が言ってくる

「・・・一夏、いつぺん死ぬかい？」

「え、遠慮しておきます・・・」

よろしい

女子というのは、とにかく騒ぎたい生き物なのだよ

「はいはい。新聞部です。話題の新生、織斑一夏と、柳瀬薫君に特別インタビューしてきました！」

「「おおー!!」」

誰が呼んだか新聞部

いや、盛り上がるなよ

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。

はいこれ名刺」

そういつて差し出される名刺

・・・やっぱり、薰って女の名前なのか？

子供の頃はよく『薰ちゃん』なんて間違え方されたし

いや、男でも薰っているけどさ

「ではずばり柳瀬君！クラス代表に就任した感想は？」

ボイスレコーダーを俺に向けて、目を爛々と輝かせている新聞部副部長さん

『マスター、ビシッと！』

いや、ビシッとって・・・

「んー・・・と」

そんな期待を込めた目で見られても

「こうやって就任パーティまでやってもらった以上、クラス代表として恥じないよう、精一杯務めさせていただきます」

「んー・・・平凡な政治家みたいだねえ。もったこう個性をさあ」

「じゃあなんですか？『運命の人はどこですか？』とでもいったほうがいいか？」

周りがどよめく

あ、やばい・・・

「お、それいいねえ。つかわせてもらおうよ」

「やめてっ！頼むからやめてください！」

俺の心が死んでしまっっ！

「じゃあ今度学食で何か奢ってー」

にんまりした顔でそういつてくる薫子先輩
仕方ないので承諾した
ただでさえ少ない、最近の小遣いが・・・

『あんまり変なことは言うもんじゃないね』
「うう・・・」

「じゃあ次、織斑一夏くん！女の子のなかに飛び込んだ感想は？」
「え、ええっと・・・頑張ります」

「何をがんばるのかよくわかんないけど、もっといいコメントちょうだいよ」。俺に触ると火傷するぜ！的なさあ」

「・・・自分、不器用ですから」

『「「うわ、前代的！」」』

「日本の誇る名優を侮辱するなっ！」

一夏がつっこんできた

というか、お前は不器用よりも鈍感の方があってるんじゃないか？

「じゃあいいや。勝手に捏造しておくとして」

「情報を扱う者として、それでいいのかっ！」

「あっ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

スルーですかっ！

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、

仕方ないですわね」

こほん、と咳払いして、セシリアは始めた

『満更でもないみたいだね』

まあ、本当はこういうの好きそうだもんなあ

「ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかと言いますと、それはつまり―」

「あー長くなるからいいや。写真だけちょうだい。あとで勝手に作っておくから」

「さ、最後まで聞きなさいっ」

そんなセシリアの要求も華麗にスルー

・・・ひでえ

「じゃあ柳瀬君に惚れたから、ってことでいいよね？」

「「んなっ・・・」」

何でそういう方向になるんだよっ！

「彼は、経験を積みばわたくしの良き好敵手になるであろうと判断したまでで、別に惚れた訳ではありませんわ！」

グサアッ！

勝手に惚れたとかそういう話を作られるのもいやだが、真っ向から否定されるのも・・・ね
気まぐれで、面倒な十代の夜

『でもライバルだって！ボク達やっぱり認めてはもらってるみたいだよ』やったね！』

「ふーん……。じゃあ、織斑君に惚れたってことにしておこうか」
「なっ……」

セシリアが言葉に詰まる
顔は真っ赤だった

「何をバカな事を」

そんなことを言いだしたのは、一夏だった

「え、そうかなー」

「そ、そうですね！何をもってバカとしているのかしら！」

あれ？怒るところはそっちなのか？
とすると……。あれ？

「だいたいあなたはー」

「まあとりあえず写真撮ろうか。三人とも並んでね」

「「「え？」」」

「折角の専用機持ち三人なんだからさ、やっぱり写真に納めておきたいよねー。セシリアちゃんを真中^{センター}で」

「え、わ、わたくしがセンター？」

「うん、バランス的にね」

何だかセシリアは落ちつかない様子だった

まあ、男二人に囲まれるんだもんね。そら落ち着かないわなあ

「ちなみに、撮った写真は貰えるのですか？」

「もちろんだよ。あ、でも着替えてくるのは無しだよ、時間ないから」

「うっ」

「・・・着替えてくる気だったのか？
そんな会話の間も、さっさと並ぶ」

「・・・」

「なんだよ、箒」

「なんでもない」

一夏をじろじろ見る篠ノ之

「それじゃあとるよー 35×51÷24は？」

「は？」

『47・375だよ』

パシヤ

不意をついた顔を取られてしまった
写り酷いだろうなー

「んー、いい顔だねえ。はいこれ。撮れたの」

あ・・・ありのまま、いま起こったことを話そう

『3人で並んで撮った筈なのに、その写真には、1年1組全員がいた』

しかも、篠ノ之はすっかり一夏の隣を確保していた
何をいつてるのか分からねえと思うが、俺も何があったか分からない

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

「つか誰だ。俺の頭に角つけてる奴。古いぞ

「あ、あなたたちねえっ」

「セシリアだけ両手に花なんてずるいもんねー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

よく見れば、あんな瞬間的に集まったのに、ちゃんと俺たちがセクターでバランスの良い配置になっている
たてるところはたてる女子力、恐るべし

というか、この写りだと完全にセシリアが代表だな

ともあれ、この代表就任パーティは十時近くまで続いた
はつきりって、俺はもうヘトヘトだ

女子力、恐るべき

『大事なことなので・・・』

「二回言いました」

『マスター、途中でセリフをとらないでよ・・・』

「へいへーい」

『むーっ・・・』

クラス代表決定祝賀会？ 要はパーティータイムです（後書き）

という訳で、薫がクラス代表です

・・・正直、ここを変えるのはどうかと思いましたが、ぶっちゃけクラス対抗戦以外、特に使われてない設定のような気がしたので勝手に改変させていただきました

文句があれば、受け止めます

転校生はセカンド幼馴染 へBy一夏

「転校生？」

「そ。この時期に、面白いよなあ」

食堂への移動中、噂の転校生の話を一夏に振ってみる

その方面にはあまり明るくない一夏のことだ

多分詳細どころか転校生の話自体知らないと思う

「へえ。で、どんな奴なの？」

「なんでも中国の代表候補生だとか」

「よく知ってるな」

そりゃ、俺の近くで『ねえねえしってるぅー？』なんていって話してんだもん。いやでも耳に入ってくるわ

女子三人寄れば姦しいとはよく言ったもんだとおもう

「まあな。代表候補生と言えば・・・」

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

「一組に転入したわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

「「うおっ、ビックリした・・・」」

気がつけば俺たちの横にセシリアと篠ノ之がいた
本当にびっくりした

「でもさあ、どんな奴なの？そいつ」

「あら、やはり気になりました？」

「うーん・・・そりゃあな」

「一夏でも気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは・・・って、でもってなんだよ、でもって」

途端に篠ノ之はふくれっ面になった

・・・ハムスターのように膨らんだそのほっぺをつつついてみたい

『マスター？』

いや、なんでもないです

朝からグーで殴られたくは無いです

「今のあなた方に、他の女子を気にしている暇がありますの？来月にはクラス代表戦がありましてよ」

「ん、それもそうだな」

転校生も気になるが、今はそれどころじゃないな

「セシリア、そろそろ基礎的な動きからより実践的な訓練をお願いしても良いかな？」

「もちろんですわ。このセシリア・オルコットが指導したのに、負けてもらっては困ります」

そっか、俺が惨めな負け方すれば、セシリアの名前も傷つくのか

「ま、やれるだけやってみるさ」

「『やれるだけ』ではなく、優勝ですわ！それ以外は認めません」

キビシー

『それだけ期待されてるってことだよ。さ、一緒にがんばろ！』

「そうそう。柳瀬君が勝てれば皆はハッピーなんだよ」

「え？ああ、フリーパスね」

気がつけば食堂に到着してたもんだから、周りには女子がちらほらちなみにフリーパスとは、一位クラスの優勝賞品の、学食デザート半年フリーパスだ

・・・まさか、食べ物で釣るとは

「今のところ、専用機持ちが代表なのは一組と四組だけだから、余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

ふと、そんな声が聞こえる

「二組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

声の方向を見てみると、自慢げな顔をした少女がいた

・・・手に朝ごはんを持ちながら
つか、朝からラーメンってつらくねえの？

「鈴・・・お前鈴か？」

え？なに、一夏この子を知ってたの？

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告ってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす

・・・なんつーか

「何かっこつけてるんだ？すっげえ似合わないぞ」

こら、そのド直球

たしかに、かっこつけてるけど、朝食持ってるせいでどこか痛々しくなってる感じはあるけどさ

思っても言わないのが優しさじゃないのか？

『その子が恥をかく前にやめさせるのも優しさだよね』

む、それもそうだな

優しさとは人によって変わるもの。朝からいい事を学んだな。俺

「んなつ・・・！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

「おい」

「なによ！」

スッパーン！！

ああ、いつもより強く入った

「ち、千冬さん・・・」

スッパーン

「織斑先生と呼べ。そして、さつさと席について食事を摂れ。さも
なくば、授業に遅れるぞ」

そう織斑先生に言われて、時計を見る

ヤベエ！もう時間ないじゃんか！

朝の早食いはよくないって話だけど、今日は別だ

集まっていた女子も皆『おさきー』とかいって行ってしまった
そっぴや、セシリアと篠ノ之は？

もぐもぐもぐもぐ

もぐもぐもぐもぐ

あいつら、先に食ってやがる

「一夏、早くしないと出席簿アタックだけじゃ済まなくなるかもし
れないぞ！」

出席簿チョップとか飛んできそう。首に
痛いだろうなあ・・・

「お、おう」

「くそ、まにあわねえ。今日は残すか・・・」

「お残しはゆるしまへんでえ！」

食堂のおばちゃんのそんな声が聞こえて来た

嵐についても聞きたかったが、今はそれどころではない
食堂のおばちゃんを残したのを見たら小一時間説教してきそうな
空気をだしている

最速の速さで食べるしかない

そのあと、最速の動きで教室まで言ったが遅刻

スッパーン！

軽快ながら質量を感じる音によって、今日もISの訓練と学習が始まる

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みに入るなり、篠ノ之とセシリアが一夏にそういった二人とも、あんなに集中できない奴だったっけ？

山田先生に結構注意されてたし、織斑先生にはかなり叩かれていた篠ノ之はどうか知らないが、セシリアはあんなにボーっとしている

子ではなかった筈だ

それほど、凰の登場は衝撃だったという訳だろうか

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……ま、まあ、お前がそう言うのなら、いいだろう」

「ん？じゃあちょうどいいし、俺も行こうかな。セシリアも行こうよ」

「そうですね。一緒にさせていただこうかしら？」

で、その他学食組の女子も連なり、そろそろと食堂に移動した

ちなみに一夏は日替わりランチ、篠ノ之はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ

お前らそればっかだな

「待ってたわよ、一夏！」

「一夏よ、モテる男というのはつらいねえ」

「薰さん！」「柳瀬！」

「すいません……」

何でそんなに過剰反応するんだよ

「はあ……まあとりあえずそこをどいてくれ、食券が買えないし、何より通行の邪魔だ」

「わ、わかってるわよ！」

そのお盆にはラーメンが乗っかっている

「……早く食べないと伸びるんじゃないか？」

「わ、分かってるわよ！つーかあんた誰よ！」

あ、そういや名乗ってなかったっけ？

「柳瀬薫っていうモンだ。よろしくな、凰」

「よ、よろしく・・・って、アンタを待ってたのよ一夏！もっと早く来なさいよ！」

はっはっは

元気のいい子だなあ

おばちゃんに食券を渡し、しばらく会話を聞いてみる

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるが、元気だったか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ怪我病氣しなさいよ」

なんつー挨拶だ

「んんっ！」

「一夏さん、注文の品、出てきましてよ？」

「お、向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

で、一夏の見つけた席に皆で座り、食事タイム

つーかこの人数が入れるだけの席なんてよくあったな

「んで一夏よ、つもる話もあるのだろうが、俺たちに凰との関係を教えてくれないか」

「そつだぞ一夏。それとも、まさか付き合っているのか？」

他の子も興味津々の様子
俺も興味がないと言えば嘘になる

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだぞ。何でそういう話になるかな。鈴とはただの幼馴染だ」

こいつ、もう一人いたのか幼馴染

「幼馴染・・・？」

「あー、えーつとだな・・・。箒が転校したのが小四の終わりだろ？で、鈴が転入してきたのが小5の頭。で、中二の時に国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな」

・・・それって、幼馴染っていつのか？

こう、もつと小さいころの話じゃないのか？

誰か詳しい幼馴染の定義をプリーズミ

ちなみに、この学校に俺にとって幼馴染と言えるような人間は一人
もおりません
ぐすん

「で、こつちが箒。前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通
っていた剣術道場の娘」

「ふうん。そうなんだ」

しばしのにらみ合いのあと、挨拶を交わす二人
終始火花が見えた気がした

そのあと、『一夏の指導をする』なんて言いだしたり、代表候補生
であることにプライドを持っているセシリアに『誰？』とか言いだ

すもんだから、二人とも怒って帰ってしまった
結局、何がしたかったんだろうか・・・

「はぁ・・・疲れた」

今日の授業も、セシリアの指導も終わり、部屋にいく
セシリアの指導は的確だ
的確なんだが・・・言葉が難しいというか、角度の話が出てくる様
になった

『回避運動は左前方20°に移動ですわ!』

といった具合だ
理路整然としているのはいいのだが、水を吸うスポンジのように・・・
とはなかなかいかないのが現状
アルが噛み砕いて教えてくれなきゃ三分の一も理解できなかったと
思う

「まあ。文句垂れても仕方ないんだけどさあ」

『指導してもらってるだけ、ありがたい話だもんね』

「そーそー・・・ん？」

部屋の近くまで来た時、うろついている女子を見つけた
あのツインテールは間違いない、凰鈴音だろう

「えーっと、凰。何してんの？」

「あ、えーっと・・・柳瀬だったっけ？ アンタの部屋ってどこよ？」

は？俺の部屋

・・・ああ

「一夏か。俺もこれから戻るところだったから、一緒に行くか？」
「うん」

そういつて、凰は俺の後ろをついてきた

「ところでだ、凰」

「な、何よ」

「一夏のこと、どう思ってる？」
「なっ・・・」

顔を真っ赤にしてうつむく凰

『マスター、直球すぎだよ・・・』

俺は変化球の使えないド直球男児ストレートだからね

「べ、別にどうとも思っていないわよ！馬鹿じゃないの!？」
『ウソだね。思いっきり』
だなぁ・・・

ハイパーセンサー開きっぱなしの俺に、ウソは通じないのだ
声が揺らぐからな。嘘発見器ってこういう事やってるんだろうか
大方素直になれないってだけなんだろうなぁ

「そつか。お、ここだ。あけるぞ？」

俺は、自室でもある『1032室』に入る

「一夏ー。お前にお客さんだぞー」

「おー。誰だ？・・・ああ、鈴か。どうした？」

「あのねえ、『積もる話はあとで』っていったじゃない。だから、話をしに来たの」

あー・・・

「じゃあ俺は先にシャワー浴びてるから」

「おう」

部屋のシャワールームにはいる

俺はこの時が一番落ち着く

この時だけハイパーセンサーが解除されるからな

さすがにシャワーにまでカチューシャとウォレットチェーンをつけて入る人間ではない

この時だけ、俺はあの微妙な声の変化でウソが分かるとか、真上真後ろを振り向かないで知覚できるとか、そんな奇妙な状態から解放されるのだ

家に居た時は結構さつと流していたが、この状態になってからは、シャワーの時間が妙に長くなった気がする

そうそう。アルは待機形態の時ウォレットチェイン（腰につけるオサレな鎖）なんだけどさ、ISスーツを着た時とかってどうすれば

いいのかちょっと困るんだよね

腰につけられないときは腕にぐるぐるに巻きつけてるけど、左手が使えないのは不便

やはり、常に制服の下にISスーツを着込んでおいたほうがいいのか？

スーツに穴をあけて・・・

いや、それは無いな。それだったらスーツにひもかなんか付け足して、そこにくぐらせた方がいだろう

あ、首にかけてればいいのか

それするには輪が少し大きいけどしょうがない。他の方法は面倒だからな

そんな、どうでもいいことを考えながらシャワーを浴びる

シャワー
部屋着に着替えて、脱衣場の扉をあける

「最つつつ低！女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴！犬にかまれて死ねっ！」

バン！

「へぶっ！ー！」

あけた扉がものすごい勢いで返ってきて、思いっきり顔面に当たるめちやくちゃ痛いが、どうも扉を返した主はもう帰ってしまったようだった

「・・・なにがあつたんだ？」

脱衣場から出て、一夏を見れば、頬に鮮やかなもみじが

俺は鼻先がクリスマスの歌に出てくるトナカイのようになっていた

「・・・ほんと、何があつたんだ？」

一夏に事情を聞いてみると、ぶー垂れながら説明してくれた

「鳳の料理が上手くなったら、毎日酢豚を一夏におごる？お前、んな約束してたのかよ」

「ああ。すっかり覚えてたのに、『ちゃんと覚えてない』って言われて、ひっぱたかれた」

なんだよそれ・・・

全然わかんねえぞ

『マスター。それってさ、《毎日鈴ちゃん手作りの酢豚を一夏くんに食べさせてあげる》ってことだよな？』

ああ、なるほど。それをおごってもらえるって解釈した訳か・・・ん？

それって、告白じゃねえの？

さっきの怒り具合といい、おそらく間違いないだろう

かなりの勇気を要したであろうそれを、こいつは『奢ってくれる』程度にしか考えていなかったと

「・・・なるほどね。一夏、ちよつといいか？」

「なんだよ」

ゴスッ

「うがつ！薫何しやが・・・」

「そのまま、馬に蹴られて死ね」

「なんでだよ！俺が何したってんだよ！」

『マスター、なんで頭突きしたの？』

頭突きだから、俺もめっちゃ痛い

めっちゃくちゃ痛い、その分一夏も痛いはず

「『毎日手料理を作ってやる』という意味をもう一度考え直してみろ・・・」

「だから、わかんねえから・・・おい？薫？」

ああ・・・頭がくらくらしってきた・・・

ばたんきゅー

―翌日、クラス対抗戦の日程表が張り出された

一回戦の相手は、二組代表、凰鈴音

転校生はセカンド幼馴染 〈BY二夏〉（後書き）

という訳で、十話目です

作中の幼馴染への疑問は俺がふと疑問に思ったことです

私のイメージとしては小三くらいまでだと思うのですが・・・みなさんどう思います？

酢豚とクラス対抗戦

―で、そんな一件があつてしばらく

四月は終わり、五月

凰の機嫌は俺が悪くなっていくばかり

あれ以来、一夏と俺の部屋に来ることは無くなったし、一夏を見て
もそっぽを向いて、取りつく島もない
俺がフォローに回ろうとしても

「関係ないやつは引ッ込んで！」

もっともです

一夏も一夏で、未だに見当違いであろう答えばかり

それを聞いて笑つてられるほどの余裕は今の俺になく、『何故分
らないのが分からない』故の苛立ちを募らせる

そして自分が何も出来ないことにも苛立つて、ISに乗って発散し
ていた

簡単な話、俺はむしろしゃしてしょうがない

『マスター、最近思うようにいかないからって、ボクに当たらない
でよ。最近のマスター、ボクの使い方荒過ぎだよ……』

「悪い……でもさあ、なんでこうも思うようにいかないのかねえ・

・・・」

『ボクが知るわけないよ』

それもそうだ

やっぱり、時が解決してくれるのを待つしかないのかねえ
こんなモヤモヤした気分で鳳と戦いたくは無い
というか俺、間違いなく八つ当たりの対象にされる

『ボクはその分データがとれてうれしいんだけどね』

「・・・いつまでそうしてボーっとしているつもりなのかしら？」

「！？ ああ、すまん。それで・・・なんの話だっけ？」

そうだ、今はセシリアとの訓練中だ

一夏と鳳のことも気になるが、こっちに集中しないと・・・

「まったく・・・今日は昨日教えました、ゼロリアクト・ターン クロス・グリッド無反動旋回と三次元躍動
旋回、それに今までやってきたものの全部の総復習としましょう」

「おう」

「アリーナが使えるのは、対抗戦前では今日までのようですので、
みっちりやりますわよ」

「お、お手柔らかに頼む・・・」

こうして、セシリアとのIS制御の訓練も総復習という段階
クラス対抗戦への仕上げにはいつていった

「そっぴや鳳の奴、今日珍しく話しかけて来たよな」

『《今日の一夏の訓練はどのアリーナでやるの！？》だっけ？』

一夏のIS訓練はセシリアと篠ノ之が交代で行っている
故に俺の訓練も一日置きなのだが、逆にどこが分からないとかがハ

ツキリと分かっている

それよりも、鳳と一夏・・・和解は近いかな

ここは第四アリーナ

今は中央にて一夏と篠ノ之箒がISの操縦訓練をやっている

装備の関係上、二人の訓練は、薫とセシリアのような撃ち合いではなく、剣道の稽古そのもの

一夏が乗るは白式。彼の専用機である

対して、箒が載るは『打鉄』。防御能力の高い、純日本製の量産型IS。学園では、訓練機として用いられているものだ

スペック的には白式の方が圧倒的に上なのだが、試合展開は打鉄が有利に運んでいる

やはり、格闘戦はスペック云々よりも操縦者の経験や勘と言ったものの方が如実に表れてくる

あるいは、一夏の方が集中しきれていないのかもしれない

ほどなくして白式はエネルギー切れを起こし、箒に軍配が上がる

「はあ・・・はあ・・・」

「息が上がっているぞ、だらしない」

本来ならISを装備していて息が上がるなどということとは起こらない
つまりそれほど今の一夏は集中できていないのだ

「今日はこれくらいにしておこう」

「・・・ありがとうございました」

ふたりでピットに戻る

「はぁ・・・」

「一夏、集中が乱れているように見えるぞ？」

「うっ」

「まったく・・・剣の基礎にして究極たる『集中』をおろそかにするなど・・・」

そんな、ありがたい？お小言を聞きながら、ピットに戻る一夏
そこには、人影が一つ、ぽつんとたたずんでいた

「ありやぁ、鈴じゃねえか。何しに来たんだ？」

「はぁ？鈴が？」

とりあえずピットに降りる二人

待ってましたと言わんばかりに駆け寄ってくる鈴

「待ってたわよ、一夏！」

「貴様、どうやってここに！ここは今日関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

そんな筈の問いかけに、鈴は「はっ」という挑発的な笑いとともに、
自信満々に言いきる

「あたしは関係者よ。一夏関係者」

「・・・盗人猛々しいとは、まさにこのことだな」

呆れたように箒は鈴にそういうが、相手にされず

「悪いけど、今はアンタの相手している場合じゃないの」
「なっ」

鈴は矛先を変え、一夏に問う

肩すかしをくらったような箒は、黙って聞くしかなかった

「で・・・一夏。反省した？」

「へ？ 何が？」

「だから、あたしを怒らせて申し訳なかったな。とか、仲直りしたいな」とか。そういうのないの？」

「いや、避けていたのは鈴じゃん・・・」

「アンタねえ！じゃあ何？女の子が放っておいてって言ったら放っておくの？」

「おう」

さらっと、すぐに返す一夏

「ああ・・・もっつ！とにかく謝りなさいよ！」

一方的にまくしたてる鈴

一夏だって、何が悪いかも分からないのにここまで言われるのは心外だ

「んだよ！約束ならちゃんと覚えてただろ！」

「意味が違うのよ、意味が！とにかく謝りなさい！」

「薫もそんなこと言ってたけど、意味が違うつてなんだよ、説明してくれたら謝るのに・・・」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが!」

さすがに、告白文句を説明などできるわけがない

喩えとしてはどうかと思うが、自分が思いついたギャグを分かってもらえず、説明するのと同じ

滑るとかそういうのならまだしも、そもそも理解されていないのだ
すぐく恥ずかしいし、惨めな気分になることは目に見えている

一夏としては、鈴のその態度の意味がまったく分からなかったのだ
が・・・

「じゃあこうしましょう!来週のクラス対抗戦、私が柳瀬に勝ったら、私に謝りなさい!」

本当なら、一夏が戦った方がよいのだろうが、彼はクラス代表に非ず
今週中に決着をつけようにも、明日から調整のためアリーナの使用
がしばらく禁止となる

しかも今日はもうアリーナの使用時間終了間際
一番手っ取り早いのはコレだった

「薫次第なのは凄い不満だけど仕方ない。その代わり、薫が勝ったら説明してもらうからな」

「せ、説明はちよつと・・・」

「何だ?やめるならやめてやっても良いぞ?」

それは、一夏は親切心でいったのだろうが、挑発に聞こえなくもな

いそれは、鈴をあおる結果となった

「誰がやめるのよ！ 馬鹿！朴念仁！アホ！間抜け！」

立て続けに来る罵りに、ついに一夏の何かが切れた

「うるさいな、貧乳」

ドガアアアン！

一夏がやばいと思ったころには、部屋全体が揺れるほどの衝撃をと
もなった爆発音がした

《貧乳》。それは、鈴の心の琴線に触れる禁忌の言葉
彼女だつて女の子。やっぱり一番のコンプレックスなのだ

特殊合金製の壁が、三十センチほどへこんでいる

そして激しく、静かに立つ鈴は、部分展開したISの装甲もあって、
冗談抜きで鬼のようだった

「・・・ちよつとは手加減して当たってやろうと思ったけど止めよ、
全力で潰しに行く！」

そういつて、鈴は一夏が謝る隙を与えずに、出て行った

「一夏」

「・・・何だ？」

「最低」

「うつ・・・」

そこには、心が折れそうになった一夏がいた

薫は無事に生きて帰ることができるのだろうか

そして、迎えたクラス対抗戦

「はぁ……。なんつか、お前は話をこじらせることの天才だな」
「すまん……」

事情を聞いた俺は、そう言わずにはいらなかった
しかも、俺は知らない所で巻き込まれていた

「……。まあ、仕方がないか。で、『酢豚を食べさせる』事の意味
は分かったのか？」

「全然わかんねえよ。説明してくれ」

ここまでの時間、考えても分からないほど君はバカなのか？ 織斑一
夏くんよ

それとも、結局自分で考えることを放棄しちゃったのかな？ ん？

「説明しちまうのは簡単だけど、それじゃあ意味がないんだよ」

『マスター、時間だよ。いこ?』

「ん。そうだな・・・じゃあ一夏、俺に期待しないで謝る練習しておいてくれ」

「お、おう・・・」

頭を抱えて考え出す一夏

「先週、箒さんがおっしゃっていたことを聞く限り、彼女のISはおそらく一夏さんと同じ近距離格闘型。距離を取って射撃ですわよ」
「了解だ・・・セシリア」

「なんですか?」

「今日までありがとな」

「えっ・・・」

『発進するよ!』

「おう、それじゃ、行ってくるわ」

「あ、あの・・・」

ハッチが開き、ISが押し出される
すぐに視界は開け、センサーはアリーナの観客を映す

超満員のアリーナの客席
ギャラリー

中には、階段や通路に立って見ている子もいた

「はは、俺たち人気者だな」

『だねえ。恥かかないようにしないとね』

「おうっ」

少し進むと、そこには、すでに凰がいた

「準備はいい？それじゃいくよっ！」

「こいやあ！」

『敵IS《甲龍》・・・解析開始！』

こうして、前口上もなしにクラス対抗戦の火蓋は切って落とされた

酢豚とクラス対抗戦（後書き）

という訳で、次は鈴との戦いです

・・・そろそろ一巻の内容も終わりそうなんですが、閑話を挟むかどうか考えています

一夏VS薫とか、薫とセシリアの絡みとか
でも閑話挟もうとすると確実にペース崩れるしなあ・・・

どうしましょう？

招かれざる客

「やるじゃえねえか・・・」

「代表候補生をなめないでよっ!」

試合は甲龍の有利に動く

射撃しようにも衝撃砲《龍砲》による《見えない砲弾》により阻まれる

近距離戦闘は出力・技術共にあちらの方が断然上

衝撃砲の届かない間合いに行こうにも付かず離れず、衝撃砲の射程を常に保ってくる

アルが解析にかかりきりなので、ロックオンやハイパーセンサー等の自動測量以外全てマニユアル操作

つまり、今の俺にはビットトリックスターを操作しながら移動などは出来ないのがある

どうしようもないとはまさにこのことが

今は反撃を諦め、アルの解析が終わるまで粘ることにした
セシリアにならったISの基礎移動術をフルに使って避けまくる

衝撃砲の特徴はアルによって随時送られてくる

空間自体に圧力をかけ砲身を生成。余ったエネルギーでそれ自体を砲弾として打ち出す

故に砲弾は不可視なのだ

そして、その生成機は球形。ジェネレーター背中に回り込もうが、振り返ることなく撃ちこんでくる

大気の揺らぎを解析の片手間にアルに計測してもらっているが、後手に回ってる感が否めない
反撃に転じるタイミングが訪れない

「逃げてばかりじゃ、勝てないわよっ!」

「うるせっ! 秘策があるんだよ! もうちょっとしたら見せてやるから待ってな!」

完全に他力本願だな!

「へえ・・・面白いわね! じゃあ耐えきって見せなさい!」

攻撃がさらに苛烈になる
どうやってこの攻撃を・・・

ズドオオオオオオオオン!

俺の思考は、そんな爆音に遮られた
明らかに、衝撃砲の物と違う

「は?」

「っ! 柳瀬! 試合は中止! すぐにピットに戻って!」

「え?・・・え?」

『解析中断・・・! マスター! アリーナに所属不明のISが乱入! ボクからロックされてるよ!』

「はあ!?!」

解析が終わったのか、アルがそんな警戒を叫ぶ
アラート
中央からはもくもくと土煙が上がっている

「えっと・・・アリーナのシールドってたしか・・・」

『ISのシールドバリアと同じ。それを貫通するほどの出力を持った機体が、ボクらをロックしている』

「つまり、柳瀬ピーンチ！という状況か」

『バカ言ってる場合じゃないよ！』

すいません

「はやく！アンタはピットに戻ってなさい！」

『どうするの？鈴ちゃんの言うとおり、ピットに戻る？』

「・・・いや、背中見せたら狙い撃ちにされるだろ？危なっかしい」

『そうだね。それじゃ、叩くの？』

「それしか、ないんじゃないのっ!？」

土煙をかき消そうとするかのように、撃ちこまれるビーム

避けて発射先を見れば、そこにあっただのは手が以上に長い、異形の
ISだった

灰色の《全身装甲》^{フル・スキン}、足の爪先よりも長い手、複眼式のカメラアイ

ISはシールドバリアの関係上、甲冑のような、全身を覆う装甲を
必要としない

動きやすくするために、どこかしらに肌の露出があるものなのだ

つまりすべてが異形。ISは人が乗っているはずなのに、人ではない
よう

ボーっと立っている姿は、《人形》のような印象を与える

「ほら、さつさと逃げなさい！」

「・・・お前はとうすんだ？」

「あたしが時間を稼ぐ！ だからあんたは・・・」

「退避してたら狙い撃ちにされるだろ、あれ？ っつーか、女置いて逃げられつかよ！」

「弱いやつは引っ込んでなさい！」

ムカア！

「弱かろうが、尻尾巻いて逃げる気はねえよ！」

「はあ！？何それ！・・・だいたい、こんな異常事態、すぐに先生が来て收拾——」

『マスター！喋ってないで！敵の攻撃がくるよ！』

「まじか！ええい！さつさと動け！」

寄って来ていた凰のISをどつく

「きゃっ！何・・・」

瞬間、凰と俺の間を太めのビームが貫く

ちゃんと避けたのに、すごい熱だ

ひよつとしなくても、セシリアのビームよりすげえんじゃねえ？

「機体、溶けねえよな？」

『もちろん。ボクはそんなにヤワじゃないよ？』

「ならオツケーだ」

誰だか知らないが、先に手を出したのは向こうなら交渉はムダなんだろうな。戦うしかない

「柳瀬くん！鳳さん！今すぐアリーナを脱出してください！先生たちで制圧に行きます！」

「聞こえねえ。なあ？ 鳳？」

「そうね。それに、あたしたちが退いたら観客の皆が危ないわ」

「あいつも、逃がす気は無いみたいだしな」

さつきからロックオンのアラートが止まらない

「アル、アラート止めて。うっさい」

『うん』

これでよし

「そんじゃ、やりますか！」

「柳瀬！足引つ張らないでよ！」

こうして、招かれざる客との戦闘が始まった

「もしもし柳瀬くん？！鳳さんも！聞いてますーっ!？」

ISのプライベートチャンネルは声を出す必要は無い
だが、そんなことを失念するぐらい、今の真耶は焦っていた

「本人たちがやりたいと言っているのだ。やらせてやってもよかる」

「織斑先生！何をのんきな事を言ってるんですか！？」

「山田先生、糖分がたりてないからイライラするんだ。コーヒーでも飲んで落ちつけ」

そういつて千冬は、コーヒーを真耶に差し出す

「あ、ありがとうございます・・・」

真耶はちびちびと飲み始める

落ちついてきたところを見計らって、千冬は話し始めた

「・・・現状の確認だ。現在アリーナの遮断シールドはレベル4。

しかも、扉は全部ロックされている」

「は、はい。・・・おそらく、あのISの仕業ですね。今3年生の精鋭たちが必死にシステムクラックをかけています。ですが・・・それも難航しているようです」

「それが終了次第、我々が突入、制圧。・・・という手筈だったな。どちらにしろ、それまではあの二人に何とか耐えてもらうしかない訳なのだろう？」

「うつ・・・それもそうですね。でも柳瀬君は初心者ですよ？大丈夫なんですか？」

「なに、凰がいるさ。それに、オルコットが移動の基礎を教えた。闘えなくても、生き残ることは出来るだろ」

そう話しこんでいた千冬と真耶は、ふとあたりを見る

「あれ？そういえば織斑くんたちは・・・」

一緒に観戦していた、一夏、セシリア、箒の三名が、どこにもいない

「・・・あいつらは」

千冬は一瞬、頭の痛くなる思いがしたが、すぐに視線が鋭いものへと変え、カメラに映る《侵入者》に向ける

「くそがつ！」

「じれったいわね！」

フルメンで狙い、ビームを打ち出しても、侵入者は異常なほどの速度でかわす

そこに凰が見えない衝撃を放つも、巨大な腕で叩き落とす

『ここなら・・・』

アルが、『体勢上避けられない位置』からトリックスターで攻撃しても、人と思えない柔軟な動きでかわす

真正面から撃てば背中をほぼ九十度曲げてかわす。マ。ツクスか

そしてそのまま突っ込んでくる

コマのようにぶんぶん腕をでたらめに振り回し、ビームを放ってくる

距離を取るうにも、相手のスラスターの出力が異常で、それを許さない

本日二回目の、どうしようもない状態

今は引きつけて、観客席に乱射しないようにしている

どうも、この時の射程はさっきのビームよりずっと短いようだ

「・・・アル、エネルギー残量はどれくらい？」

『100くらい。もう少しいけるよ』

ボディは所々、損壊しだしている

損壊レベルBと言ったところだろうか

「凰、エネルギー残量は？」

「180くらいよ」

やっぱり俺よりも多く残っている

そして損壊箇所は俺よりも少ない

『ねえマスター。ボク、ちょっと気になったことがあるんだ』

「なんだ？言ってみろ」

『うん。それがね、あのISから生体反応を感じないんだ』

「はあ？」

生体反応がないってことは、無人機ってことだろ？

ISは人が乗り込み操作するもの。人なしでは絶対に動かない
だから、それはあり得ない訳で・・・

『でもね、何度調べてみても搭乗者の名前も、反応も出てこないんだ』

「むう・・・」

誰かいつてたな。あり得ないことはあり得ない。常識にとらわれて

いては、目の前の真実を見逃す
無人ISの作成に成功してたって、国が黙らせておけばいいんだも
んな

「なら・・・凰！」

「なによ！」

「アレ『無人機』かもしんない！」

「はあ？そんなことありえないわよ！だってISは人が乗らなきゃ・
・・・」

「俺もそう思う！でもアルが無人機だっていつてる！」

「アルって誰よ！・・・でも、そういわれてみると、妙に機械じみた動きをしていたり、私たちの会話に興味があるみたいに攻撃の手を止めてるような・・・」

しばらく考えたあと、凰は思考を止めて、こちらを向く

「分かったわ。じゃあ、アレを無人機だとして戦いましょう。あり得ないけどね。でもどうするの？」

「うーん・・・どうしよう？」

『マスター・・・アレ？』

ん？なんだ？・・・ああ

「よし、凰。とにかく、いい案思いつくまであいつの気を引くぞ」
「結局、何も変わらないんじゃないの・・・」

そして、また動きだす

「・・・アル、プライベートチャンネル開いてくれ」
『いいよ。・・・で、誰に？』

それはな・・・

ここは、アリーナの観客席

ISを纏った、一組の男女がいた

「で、本当に出来ますの？」

「ああ、『雪片式型』の特殊能力は『バリア無効化攻撃』。アリーナのシールドが、ISのシールドバリアと同じなら多分・・・」

それは一夏とセシリアだった

この二人がやろうとしていることは単純明快

道にロックが掛かっているのだったら、そこ以外の道を通ればいい
雪片式型でアリーナのシールドを破壊。そこから侵入
先程の侵入者のように、だ

そこから先は、一夏に考えがある

「準備はいいか？」

確認を取ろうとした時、急に回線が開く

『あーあー。織斑一夏に告ぐ』

「あ、薫だ。何？」

『どうせお前のことだ。プライベートチャンネル開けないだろうから、一方的に話して、一方的に切る』

「強引な」

『進入したIS、アレはおそらく無人機だ』

「はあっ!？」

『まあ、思うところもあるだろうが、少なくとも俺たちはアレを無人機と仮定して戦うつもりだ。下手な手加減いらないから、全力ぶつけちまえ』

「・・・」

『ああそうそう。こつちに策は無いから、あとはお前次第だ。俺たちのエネルギー残量は200を切ってるからな。しくじったらお前たち二人で教師が来るまでジリ貧戦闘。よろしくな』

そういつて、薫は通信を切る

「準備、よろしくてよ」

「あ、ああ。じゃ、やるぞ」

一夏はそういつて、雪片を構え、目を閉じる
イメージするのは、鋭い斬撃

『エネルギー充填率90% 零落白夜 使用可能』
雪片が、光を放つ

「アアッ!」

シールドに袈裟切りを放つ
すると、ISが一機通れそうな程の穴が出来あがる

「よし、コレでいいな、セシリア、頼むっ！」

「セシリア、頼むっ！」

「どうなっても知りませんことよ！」

一夏がセシリアを背に、あの灰色の侵入者に向く
ちなみに、完全に真後。背後を取っている

いやあ、アルがいると位置誘導とかやりやすい

『ぼつとしてないで！動かないように釘をさしておかないと』

ウナギを捌く時みたいだな

あれ、活のいいやつが逃げないように首筋あたりに釘うつんだぜ

そんなことはともかく、一夏達に侵入者が気付き、すぐに動こうとする

「させつかよ！」「させないわよ！」

射撃と、衝撃を同時に繰り出す

衝撃を叩き落とすのに、足が止まり、そこにビームが入る
受け止められはしたものの、隙を作るには充分だった

一夏の背中から、光が奔る

『イグニッションブースト・・・』

イグニッション・ブースト
《瞬時加速》

スラスタ翼よりエネルギーを放出、それをまた内部に取り込み、圧縮して放出。その時得られる慣性で、一気に加速する

それは外部からのエネルギーでもよいらしい。そして、得る慣性はエネルギーに比例する

つまり何が言いたかったというのだ

「「いつけええっ!」」

「オオオオオッ!」

セシリアのビームの一斉射撃を背中にくらった一夏が、ハイパーセンサーでもギリギリ捉えられるかどうかでかなりの速度で侵入者に急接近

『《零落白夜》。白式の単一仕様能力。全てのエネルギーによる攻撃をかき消す、一撃必殺の大技・・・』

「こないだいったやつか」

『本気で撃ちこむと、IS搭乗者ごと真つ二つにしちゃうくらいの威力があるんだって』

白式が教えてくれたよ。アルはそう続ける

背後から繰り出されたのでは、無人機だろう何だろうが対応できる訳もなく、一閃

固そうだった装甲は、胴と断面より下にあった右腕の先の方が斬り飛ばされる

「アル」

『うん、ちゃんと位置にあるよ』

「じゃあ、^{ファイヤ}射撃！」

切り飛ばされた上半身に向かって、侵入者が一夏達に気が向いた隙に、後ろに回しておいたトリックスター

その射撃は、スラスターを撃ち抜いた

侵入者は、羽をもがれた蝶のように、力なく落ちていった

「一夏。お疲れさん」

「おう、何にしてもコレで終わー」

『敵のIS再起動を確認！マスター！！』

叫ぶようにアルがそういう

周りにまた緊張が走る

最大出力モードと思わしき左腕から、閃光がほとばしる

向かった先は——白式

ビームを確認した瞬間、何を思ったのか白式はビームに突っ込んだ

侵入者のビーム照射が終わったとき、そこにあったのは、頭を潰された侵入者と、うつ伏せになって動かない白式だった

招かれざる客（後書き）

というわけで、黒い無人機との対戦でした

一応次で一卷の内容はおしまいです

・・・あまり話に変化がない気がする

エピローグ：一夏と篤 強さと笑顔

あのと、一夏は保健室へと運ばれた
一時は死んだかと思っただ、なんてことない

全身打撲だけ。命に別状なし

セシリアのビームを背中にもろに受けたのに、アリーナのシールドを壊すほどのビームに突っ込んだのに、それだけ

『白式が一夏くんを護ったのかもね』

「案外、白式も一夏に惚れてたりしてな」

『そうかもね・・・』

「ん？どうした？」

『うん。白式が惚れてても、一夏くん、鈍感だから・・・』

「なるほどね。そう考えると切ねえなあ・・・」

そんな話をしたら、つきっきりで見ていた織斑先生が出て来た

「目を覚ましたぞ。よかつたら見てやってくれ」

「ありがとうございます」

織斑先生と入れ違いで、保健室に入る
半開きだったカーテンを開ける

「よう。薫か」

「よ、体の調子はどうだ？」

「数日は地獄だったさ」

「まあ、頑張れ。つつーかお前はビームに突っ込んで死なないかしぶといな。黒光りするあれか？」

「俺はGと一緒にだよ・・・」

まあさすがに、友人を本気でG扱いすることは無いぞ

「冗談冗談。・・・ありがとな。お前があの一撃を決めてなけりや、俺も鳳もエネルギー切れで大ピンチだったろうな」

「そんな大げさな」

「大げさなもんか。・・・まあ、いま言いたいことはそれだけだ。それよりもゆつくり休めよな。それじゃあな」

「ああ」

そういつて、俺は保健室を出る

今度は、篠ノ之と入れ違いになった

『ところでマスター、黒光りするGってなに？』

「・・・世の中にはね、知らなくてもいいことだってあるんだよ」

たぶん、教えたところであの全身にぶわっと寒気が来る感じは分からないと思う

『えーっ！ボクね、世の中の全部のことが知りたいんだ！』

「おいおい、欲張りだな」

『うん！何だか知ることが楽しくなっちゃって！IS以外の、他のものもいろいろ知りたいんだ！』

「へえー・・・感心するわ」

『でしょ！えへへ・・・』

「で、ではな！」

そういつて、早足で保健室を出る

「はぁ・・・」

篠ノ之箒はブルーな気分になっていた

『戦っている時のお前は、格好よかった』

その言葉一つ言えない自分が、情けなかった

（だいたい！私だって一緒に戦いたかったのだ！なのに・・・）

なのに、戦うためのISがなかった

専用機さえあれば・・・と、最近思い始めている彼女

（専用機さえあれば、一夏と一緒になのに・・・）

イギリス代表候補生のセシリアに、最近来た一夏曰く、セカンド幼
馴染の鈴

彼女たちも専用機を持っている

それに、一夏も持っている

持っていないのは自分だけ

そのことに、彼女はちょっとした寂しさと、悔しさを感じていた

（やはり『あの人』に頼むしかないのだろうか・・・）

でもできれば、『あの人』の力は借りたくない
そうやって、いつ終わるとも分らない思考のなかに、彼女は陥っ
ていた

「あれ、篠ノ之じゃん。何してんの？」

「ん？・・・ああ、柳瀬か。お前こそ何でここに居るんだ？」

「いやね、職員室に呼び出されてさ。『ジジョーチョーシュ』だ
よ」

「ふうん・・・」

柳瀬薫

薫が彼を見るときはいつも一夏の近くに居る

「ところでさ、篠ノ之」

「なんだ？」

「・・・一夏のこと、『好き』なのか？」

少し前から、彼が気になっていた事を本人に訊いてみる

彼自身は、こうするのが一番正確で間違いがないと思っている
子供じめているとは思うが、彼だって十五歳。そういう話に興味
がない訳がない訳で

「なっ・・・べ、別にそういう訳じゃ・・・」

否定をする薫だが、その顔は赤く、説得力のないものだった

「ふーん。ならいいや。じゃ」

「お、おう」

そういつて、薫は箒とすれ違う

「・・・早いうちに一步を踏み出さないと、後悔するよ?」

すれ違いざまに、その言葉を残して

「・・・」

箒は、黙ってそれを見送る

「・・・誰もが皆、お前みたいではないのだぞ・・・」

その言葉は、箒の心に残る

急に、空が曇りだす

ここはIS学園の地下50mにある、関係者のなかでも選ばれた者しか入れない隠された空間

あの侵入者も機能停止後すぐここに運ばれて、解析がなされた
解析の結果、侵入者は《無人機》だったことが判明

ISの分野において、まだ開発されていないとされている遠隔操作
リモートコントロール
スタンドアローン
か、独立稼働の技術が、謎のISに使われていたことになる
すぐさま学園関係者にかん口令が敷かれたことを考えると、それが

どれだけの重大な事態であったのか、想像に難くない

「・・・・・・・・・・」

織斑千冬は、またここに来ていた

彼女が見ているのは、柳瀬薫と、その搭乗IS、アルカナのクラス代表決定戦の時のものだった

ただの粘土人形のようなだった装甲が、光を放ったかと思うとブルーティアーズに変化した

「織斑先生。あのISについてなのですが・・・」
「どうぞ」

山田真耶が入室する

「柳瀬君の乗る、ISなのですが、登録されていないコアが使われている可能性があるようです」

ISというのは世界に467個しかコアがない
つまり、ISは同時に467機しか存在できない
そしてその個体数は、全て所在とともに管理されている

それはIS学園にあるISのコアも例外ではない
だが実際にIS学園に存在するコアの数と、登録されているコアの総数が合わないのだ
存在するコアと、登録されているコアとの数の差は1

謎の能力も含め、真耶はアルカナがそうではないかとらんでいる

「・・・」

「まだ調査は続いていますが一、度柳瀬君に頼んでISそのものをじっくり調べてみる必要があると思います」

「そうか。引き続き頑張ってくれ。それと、そのことは口外するなよ」

「はい」

そういつて、真耶は退出する

登録されていないということは、新規に作られたコアであるということだ

そして、ISのコアを作れるのは、今のところただ一人――

「・・・まったく、お前は何かしたいんだ？」

織斑千冬は、その場に居ない友人に、そう問いかけた
その声は部屋のなかに消え、外に漏れることは無かった

ここは一夏と薫の部屋

事情聴取と保健室から解放された二人は、のんびりくつろいでいた

「そついやさあ。鳳との喧嘩はどうなったの？」

「ん？ああ・・・。なんか別にいいつて。で、酢豚の話、タダメシくわせてやるっていう話だそうだな。その方が上達するからって」

・・・じゃあ結局一体なんだったんだ？あの怒り具合は

「いやあ、起きた時に鈴の顔が間近にあった時はびっくりした・・・」

・・・？

それってひよつとしてキス・・・

まあいいや。もうあのギスギスした感じから解放されるだけでも良しでしょう

でめたしでめたし

『それを言うならめでたしめでたしだよ』
それもそうだな

結局、リーグマツチは侵入者により中止

あの侵入者については、『無人機』か『有人機』かを告げられぬまま、かん口令が敷かれた

特に戦った俺たちには、宣誓書まで書かせる始末
学園の対応だけでも、結局はどちらだったのか想像に難くない

正直どつちでもいいというか、アルがずっと『アレは絶対無人機だった・・・でもだったら、どうやって動かしてたんだろう？』とか言ってるから、無人機で間違いないと思う

お前、その構造解析してIS型のビットとか作る気なのか？

『ISは質量的に無理だけど、ビットよりも大きくて複雑なものが動かせるようになるかも・・・』
ふーん・・・

アルはともかく、俺は一夏にちょっと訊きたい事があった

「なあ一夏。お前の思う『強さ』ってなんなのよ」

「はあ？いきなり何だよ・・・」

「いやあね。いきなりこんなこと言われても、中二臭いと思うだろうけどさ。ISという、ほとんど絶対的な『強さ』を持ってしまった以上、そういうのをハッキリさせておくことは重要だと、俺は思う訳だ」

自分を見失ったまま、力に使われるような関係だけは避けたいそれはとても苦しいだろうし、何よりアルに申し訳ない
そう思う

「そうだな・・・『強さ』つつーのは心の在り処。己の拠所。ってところかな？」

「ふむ・・・どうして？」

「だってそうだろう？自分がどうしたいかもわかんねー奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないだろ」

「で、早い話が？」

「やりたいことはやったもん勝ち。やりたいようにやらなきゃ、それは自分の人生じゃないだろ？」

・・・なかなか、大人びたことを言うもんだな
なにか強烈な経験でもあったのか？

『強烈な経験は早熟をうながす』なんて、どこかで聞いたことある
気がしなくもないぞ

ちなみに俺はそういうの一切皆無

普通の中学生だったんだから、そういうのは期待しないでほしい

「つまるところ、『強さ』っつーのは自分がやりたいことをやるための『手段』ってことか？『目的』ではなく？」

「まあ、そんな感じじゃないかな？」

「なるほどね。で、お前が強くなってやりたいことって？」

「・・・俺は、俺に関わる人を皆を『守る』ことかな？ただ誰かのために戦ってみたいっていうか・・・」

「結構ハードル高いな。それ」

「あはは」

だつてよ、アル

『強さは目的じゃない、か・・・なら、ボクは何のための手段にしようかな？』

もう、お前は答えあるじゃん

『え？』

《叡智の園への道》を切り拓くために強くなる、コレでいいじゃん
『なるほど・・・』

「・・・それで、薫にとつての『強さ』ってのは？」

「それが思いつかないから、こうやってお前に聞いたんじゃないか」

「あ、なるほど」

ほんと、変に抜けている

「そつだな・・・強さの答えはまだだけど、一夏の案に乗っ取った、『強くなつてやりたいこと』なら出来た気がする」

「へえ・・・なに？」

「『助ける』こと。こう、誰かが傷ついてさ、挫けそうなときに黙って支えてやれたらさ、男としてかっこいいじゃん。で、そのままそいつを『守る』みたいな・・・」

「俺と一緒にじゃん」

「あ、あくまでもやりたいことの一つさ」

思いつかなかった訳じゃないんだからな！

「一つってことは、他にもやりたいことあんの？」

んー・・・そうだなあ

ふと、ベットの近くに置いてある写真立てを見る

それは、一年の夏に母の実家で撮った家族写真

親父とお袋にみさと

ばあちゃんとじいちゃん

それに、俺

みんな幸せそうに笑っている

「・・・『笑う』ため。自分が強けりゃ、自信が生まれる。自信がありゃ、いつでも笑ってられる。俺が笑っていいりゃ、きっと周りも一緒になって笑いだす。で、その笑顔を『守る』みたいな・・・」

「やっぱり俺と一緒にじゃん」

「うるさいなあ。とにかく、『自分より弱い人のためにありたい』ってことだよ」

「それが、薫の『強さ』じゃないのか？」

「あ・・・」

結局、言葉をいくら変えても、あるのは一夏と同じ、『守る』ということらしい

何も知らないただの学生の俺の誓いは、こいつとちがってどれだけ脆く、崩れやすいのかは知らない

或いは、一夏のもろく、中身の伴わないものなのかもしれないけど、せめて家族の笑っていられる場所になってやるぐらいにはなりたいと思う

コンコン

ちやうど考えがまとまったところに、ノックが響く

「お、一夏。お客さんだぞ」

「・・・何で俺？」

「バーカ。この学園でこの部屋にノックするのは、お前に用がある奴だけだよ。悲しいことにな」

「ふーん・・・」

ドンドン！

「お、おい、拳に変わったぞ。ドアが壊れる前にいつてこい」

「お、おう」

そんな話をしてから、一夏は扉をあける

「あ、箒？」

ハッキリ言って、この部屋の扉を叩くのは、今のところ凰が篠ノ之、それにセシリアの三人に一人

理由はお察してください

「……………」

篠ノ之は黙ったままだ

「どうかしたのか？　まあ、とりあえず部屋に入れよ」

「いや、ここでいい」

「そうか」

「そうだ」

「……………」

「……………」

「……………何しに来たんだ？

「……………箒、用がないなら、俺たちはもう寝るぞ」

「用ならある！」

ビックリした…………鬼寮長おりむらせんせいに怒られてもしらねえぞ
思いだしたら、出席簿で叩かれたところが痛くなってきた

「ら、来月のトーナメントだが……………」

篠ノ之は、言葉を切りながら、ゆっくり喋り始める

「わ、私が優勝したら——」

そこで一回切るそして…………

「っ、付き合ってもらっ！」

誰にかは分らない、宣戦布告のようなそのセリフ
聞いた時、俺は思わず笑みをこぼしていた

少年の誓いと、少女が踏み出した一歩

それは、とてもちっぽけな、小さなものかもしれないが、それが《
種》となり、いつか大輪の花を咲かせることを願って・・・

エピローグ：一夏と幕 強さと笑顔（後書き）

というわけで、一巻の内容はこれにて終了です

・・・なんて言うか、頑張って綺麗にまとめようと思ったたら撃沈しました。。。

二巻の内容はグダグダですが一応暴走のあたりまでは出来てます。
グダグダですが

ちよっと間を開けてから投稿をしようかと考えています。三日くらい

ブログ：憩いの時間（前書き）

という訳で、早速第二部に入ります！

それと、つらつらと自分の書きたいように書いているだけのこれですが、気がつけば2万PVを超えていました。

まだまだ稚拙で、所々意味不明、一貫しない点などが出てくるかもしれませんが、これからも宜しく願います

では、本編をどうぞ

ブログ：憩いの時間

六月頭の日曜日

俺は一度家に帰って来ていた
というかいままで忙しくて、やっと帰ってこれたと言った方がいい
かも知れない
まあ、家でくつろぎたいなっていうのが本音だ

「それで、学園生活の方はどうなんだ？」
「んー・・・ぼちぼちなあ」
「うう・・・」

さすがに、いきなりIS戦で負けたとかは言いたくない
凰との試合はかん口令だし、思えば話せるようなモノがない

「つーか今話しかけてくんなよ。この映画今いいところじゃないか」
「つれねえこというなよ」

今見ている映画は『死神の断罪4』。死神が悪行を行った人間を断罪してゆくという内容で、タイトルからも極めて分かりやすい、シリーズ第4作目

分かりやすいことはとてもいいことだと、お兄さんは思う

映画自体は、死神が迫っているという《対象》^{ターゲット}が感じる恐怖や、逃げられないと悟った時の対象の絶望などがすごくリアルに描写され

ていて面白い

逃げる対象。^{ターゲット}死神は対象^{それ}の足を瘦せこけた手に持ったクロスボウで射抜き、痛みに絶叫を上げている対象^{えもの}に、ゆっくり近づいてゆく必死に逃げようとするが、足を射抜かれた痛みで動けない

ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる死神

必死に叫びをあげ、来ない助けを求める対象

そして、死神の鎌で断頭。断罪終了

その時に移される死神の、紅く光る瞳のアップ（次はお前だ、的なドヤ顔）は何度見ても恐怖を感じるほどだ

ほら、今も

バアアン！

「『みぎやあああつ！――！』」
「うおっ」

女の子の悲鳴が聞こえる……っておかしいな。今回のターゲットは40過ぎの男だったはず……

ああ、みさとか

親父の影に隠れて死神に震えている

・・・ちよつとかわいそうだ

「・・・みさとをほうつておいていいの？」

「いいんじゃないの？ 本人が『大丈夫だよ！』っていったからな」

でも小学生にはきついんじゃないのかな？ これ

『うう・・・マスター。止めてよお』

いやだ、止めない。コレも学びの一環だよ

『こんなの知らなくたって・・・』

そういや、IS学園にいつてから変わったことが一つあったわけ？

『アル』。俺のISであるアルカナの《コアの意識》だそうだ

ISの意識というものは通常コアの深層にいるらしい

だがこういう原理かは知らないが、こいつはそれが人格を伴って顕在化しているらしい

知識欲豊富な知りたがりで、この世のすべてを知りたいとか

彼（彼女？）の声は俺にしか聞こえないため、その存在を他者に証明する術は今のところ無い

ちなみに織斑先生に話してみたが、にわかには信じがたいと言ったので、親父たちにはいっていない

戦闘ではデユ。メスやケ。ディムのハ。のように、機体の姿勢調節やビット操作など、俺のいたらない部分を補ってくれている

「それよりもさ、IS学園への招待券ってないのか？」

「ねえよバカ親父。それに、もしあってもお前にはやらん」

「ケチくさいこというんじゃないや。俺の銃器コレクション持って飛びこんじまうぞ」

「不審者とみなされて逮捕、そのまま独房入りなんてパターンだけはやめてくれよ」

「というか、そのケースしか思い浮かばないぞ

「それにISを使わなくても、武術とかそんなん習ってたりするのが多いからあつという間にやられるぞ。多分」

「ちえっ・・・」

「そうそう。さっき学園について聞いて来たよな」

「おう、で、どうだ？彼女イナイ歴〓年齢に終止符はうてそうかい？」

「そこはほっとけ。・・・まあ、女子三人寄れば姦しいと言ったもんだ。ついていくのがやっとなつていうか」

「爺みたいな事を言うんじゃないやねえよ」

うるさい

「まああれだ、彼女ができるかどうかなんざ、環境による。環境は、自分で動かなければ変わらないぞ？」

「なんで彼女作りが前提なんだよ」

「だつてほしいだろ？」

「そりゃ、まあ・・・」

「じゃあ頑張んな」

そのあとの部屋のなかには、不安の渦のなかに誘うような死神のテーマと、みさと（とアル）の悲鳴が聞こえるだけになった

「お、もう昼時か。みさと、薫、出るぞー」

「「はい」」

親父は料理ができない

だから俺やみさとが休みの日の昼飯はほとんどが外食
あとは、時々お袋が作るくらいだ

『お前らに食わせるにはまだ早い』とか何とか言っていたから、練習はしているんだろうな

で、移動中

「親父、いいとこ知ってんのか？」

俺たち柳瀬家は、俺のIS学園編入とお袋の転勤によってこの町に引っ越してきたため、この辺の地理はあまり詳しくない
親父もしかりだと思っていたが、どうも昼間から色々回っているように迷うことなく進んでいく

「ん？もちろんだとも。ここだよ」

そこには、看板に『五反田食堂』と書かている食堂だった

「《早い！》《安い！》《うまい！》の三拍子が揃っているよ、《近い》という、まさに四拍子揃った食堂なのだよ」

見つけて以来、ちよくちよくお世話になっているとのこと

「あ、看板娘が《可愛い》で五拍子だな。うんうん」

どうも評価ははなまる１００点のようだ
店に入り、空いている席につく

「で、何食べる？」

「じゃあ、俺は焼き魚定食」

「みさとはカボチャ煮定食ー」

「じゃあ俺は業火野菜炒め定食一つで。すいませーん」

そう、親父が呼ぶと、お店の人であろう女の人が、注文を取りに来た

「焼き魚定食と、カボチャ煮定食。それに業火野菜炒め定食を一つ
ずつで」

「はい。いつもありがとうございます」

にしても・・・

「看板・・・娘？」

いや、綺麗だけどさ。綺麗だけど娘というのは少し無理がある
どっちかっていうと、美人女将とかそういう感じじゃん、あの人は

「いや、あの人じゃないよ。真の看板娘は・・・」

そういつて、親父はあたりを見回す

すぐに目標のものが見つかったのか、動きをやめる

「あの子だよ。蘭ちゃんっていうらしいよ」

そう言った方向を見てみると、中学生だろうか。女の子が昼ごはんと一緒に座っていた

六月に入ってから急に暑くなったためか、白い半袖のワンピースを着ている

頭に巻いたバンダナ？はトレードマークということなのだろう。普通に似合う

「へえ。可愛いじゃん」

「だろう？常連のなかにはファンクラブ同盟を作ろうなんて動きもあるらしいぞ」

「ふーん・・・」

「おまちどうさまです」

「お、来たな。じゃあ作ってもらったことに感謝しながら、ゆっくり食べよう」

「「はい。「いただきます」」」

もぐもぐ

もきゅもきゅ

むしゃむしゃ

「この焼き魚いいな。ご飯が進むな」

「このかぼちゃ、甘くておいしー！」

「この味はしょうゆか。ほかには・・・シヨウガか？」

三者三様、色々な食べ方をする俺たち

家族といえど、さすがに食べ方まで同じなどということは無い

ガタン！

「お、お前、何言ってるー」

急に、椅子の倒れる音がしたため、反射的に俺たちはそっちを向く

スコーン！

振り向いたときには、すでに声の主は倒れていた

近くにオタマが落ちていて、頭を押さえているところから察するに、オタマがドタマにクリーンヒットしたのだろう

俺達はとりあえず見なかったことにして、食事に戻る
こついうところの意思疎通はさすが家族と言っべきか

もぐもぐ

もきゅもきゅ

むしゃむしゃ

「・・・一夏！お前すぐに彼女作れ！今月以内に！」

ん・・・一夏？何故ここで奴の名が？

そう思つてまた声の主の方をしてみる
そこには、一夏がいた

「あら、一夏？おー・・・」

「お兄」

さつき親父が教えてくれた看板娘、蘭ちゃんがそんなことを言つて、
さつき倒れていた奴に近づく
なるほど、お兄さんだったのか。兄妹して頭のバンダナ？が目印つ
てことか

ぐわしっ！

そのまま、お兄さんが振りむいた瞬間に蘭ちゃんはアイアンクロー
をかます

口封じだろうか。というか、なんか妙に空気が冷えた感じがするん
だが、俺だけ？

お兄と呼ばれた男は、ただただ必死にうなずいているだけだった

・・・粹がつて夫婦喧嘩してみたけど、まったく頭の上がらなかった
時の親父にそっくりだ

「ごちそうさまーっ！」

「ごちになりました」

『食べ終わってないの、マスターただだよ？』

「げえっ！？さっさと食わないと・・・」

がつかつかつかつかつかつか

結局、一夏にコンタクトをとることは出来なかった
というか、入る余地がなかった

『あー・・・怖かった・・・』
「ったく、ビビり過ぎだつての」

学園への帰り道、震えたような声でアルが話しかけて来る
アルがビビっているのは、午前中に見た『死神の断罪』だろう
時間が結構たつているというのに、頭から離れないようだ

『マスターは怖くなかったの？』
「いやね、実を言うと死神のアップがちょっと怖かった」
『だよねー。アレを怖がらない人はいないと思うよ。・・・みさと
ちゃん、今日眠れるのかな？』
「あれだ、死神は悪い人のところにしか出ないんだから、みさとの
ところに出る訳がないだろ？親父がそういうふうに安心させるって」
『そつえばお母さんは？』
「仕事」

今は親父が《主夫》をやっていて、母が働き手なのだ
何をしているのかはよく分からないが、日曜出勤があったり、教師
というものは忙しいようだった

ちなみにみさとが生まれるまで共働き。どっちが世話するかちよつと話した結果、くじ引で今の役割へと落ちついたのだ

最初は忙しかったようだが、みさとも次第に手がかからなくなり、俺も手伝いするようになったりで、次第に親父は時間にゆとりができてきていた

『というかお父さん、銃器コレクションとか言ってたけど、なんなの？』

「エアガンさ。本物じゃないよ」

ほんで、その暇な時間を使っただのが《銃》。

種類はもとより、射撃の腕前の方もピカ一で、標的がどんなに動いていようが必ず当ててしまう

余談だが祭りの時に、射的屋の店主と、景品を欲しがってた子供を泣かしていた

おとなげねえの

『じゃあ今度、銃について教えてもらったら？博物館の時も色々語ってたし、詳しいんでしょ？』

たしかに、気持ち悪いくらい詳しい

親父の持つてる銃系統の武器に関しての知識を訊いたら、それこそ日が暮れるまで語りだしそうなほどに

「悪くは無いと思うけど、実銃とエアガンは違うだろ？」

『それもそっか。はあ・・・コーチを見つけるのって大変だね』

結局、セシリアの講義は《クラス対抗戦まで》という期限付きだったため、対抗戦直前に総仕上げして以降、一夏の方にかかりきりになっていた

「ホイホイとコーチの集まってくる一夏が羨ましい・・・」

それこそ、渾名をコーチホイホイとでもしたいような・・・いや《唐変木オブ唐変木ズ》でいいか

『だよねえ・・・』

「『はあ・・・』」

どちらからもなく溜息が出てくる俺たち

「・・・よし。一夏にちょっとしたイタズラをしてやろう」

『え？何するの』

「簡単だ。夜、あいつが寝ようとしたときにさりげなくさっきのホラー映画の続編を流す。それで一夏は眠れなくなる」

『・・・陰湿すぎない？』というか、持ってきてたの？』

「おう。またゆっくり見ようと思ってな。それに俺が眠れば、俺に実害は無い」

『いや、そういう問題じゃないと・・・』

「大丈夫だ。問題ない」

『・・・すでに失敗しそうなんだけど』

で、その夜

9：02PM

「おい、一夏。コレ見ようぜ」

「ん？なにこれ？『死神の断罪』……すげえやな予感しかしな
いんだけど」

「とてもハートフルで胸の中が暖かくなる物語だよ」

「ウソだっ！」

「まあまあいいから、ピッ」

・
・
・
・
・
・

バアアアン！

『「「うわあああつ！」」「」』

1：32AM

「ね、眠れねえよ……どうしてくれんだよ薰」

「知るか……俺も眠れねえ」

「あの部屋の隅、《何か》がいる気がして仕方な……」

「やめろ！余計眠れなくなるだろ！ただでさえ目を閉じれば死神が
浮かんでくるというのに……」

『こわいようこわいようこわいよう。□…………』

「ああ……幻聴が聞こえてくるようだ……」

『ひどいよ・・・』

結局、俺たちは二人（＋一機）揃って寝坊。初夏の青空の下、出席簿の音が鳴り響くのだった

スッパーン

プロローグ：憩いの時間（後書き）

という訳で、第二部始動のお話でした

久々に登場した兵器オタのお父さんと妹のみさとちゃんでした

ちなみに、『死神の断罪』はフィクションであり、実在の人物、名称、その他のあらゆるものとは関係ありません。一応言っておきます

ボーイ ミーツ ボーイズ

「まったく・・・今日から本格的な操縦訓練を始めるというのに、お前らは二人そろって何をやってるんだ」

「薫が!」「俺が!」

スッパーン!

「「つてえ・・・!」「」

またか・・・しかも、さつきよりも強くはいった・・・
眠気もばっちり覚めるってもんだよ。まったく・・・

「言い訳無用。とつとと席につけ」

言われた通り、席につく

「さて、さつきも言った通り今日から本格的な操縦訓練を開始する。
訓練機ではあるがISを使用しての授業になるため、各人気を引き
締めるように」

はい。と返事が返る

返事を確認してから、織斑先生は続ける

「また、各人のISスーツが届くまでは、学校指定の物を使うので
忘れないように。忘れたものは水着で出てもらう。それならない
ものは・・・まあ、下着でかまわんだらう」

「いや、さすがにそこは構いましょうよ・・・」

声を出したのは俺だけだったが、きつとクラス皆が思った事だと思う男が二人もいるのに、下着はまずいだろ。下着は

ちなみにIS学園の水着は何を思ったのかスクール水着。紺色のやつアレって何がいいんだ？誰か教えてくれ

目のやり場に困らない・・・ってことでいいのか？いや、逆に困るか

「では山田先生。ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項が終わり、織斑先生は山田先生にバトンタッチする慌ててメガネをかけ直し、ホームルームを始める山田先生

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！しかも二名です！」

「は？」

「えええええっ！？」

うわさ好きの十代の女子だが、どうもこの情報は把握していなかったらしい

他に噂になることでもあったのだろうか。しかも、とびきりでつかいの

つかこういうのって普通分散させるもんだよね？

というか、凰といい、転校生多いな。IS学園

『まあ、施設の関係上しようがないんじゃない？ISの技術を開示しないで試験できる唯一の場所だっていうし』

おお。物知り

『自分の周りの事から、少しずつ知っていかないかね』

そんな掛け合いをアルとしていたら、ドアがひらく

「失礼します」

「・・・・・・」

クラスに二人が入ると、ざわめきがピタリとやむ

それは仕方がないかもしれない。だって、転校生の一人が

男子だったんだから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

シャルル・デュノアと名乗った転校生は、そうにこやかやな笑顔で礼をする

呆気にとられているクラスのメンバー

「お、男・・・」

誰かがそうつぶやく

「はい。こちらにボクと同じ境遇の人が二人もいると聞いて本国より転入を―」

輝くような金髪を、後ろで束ねている

碧眼というんだったか、青い瞳が広い大空を連想させる

まぶしい笑顔は、彼という人間の印象をよりよいものとしている

礼儀の良さは、紳士ジェントルマンの精神だろうか

纏う空気は暖かく柔らかい、太陽のよう

《貴公子》と言う印象を受けるデュノアは、

「きゃ・・・」

「はい？」

「「きゃああああっ！！！」」

「うえっ！？」

あっという間にクラスの女子の心をつかんだ

あまりの大歓声に思わず耳をふさぐ

織斑先生と顔合わせした時よりもずっと大きい

どっから声出してるんだよ。

ああ喉か

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！護ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった」

(・・・立場が薄くなってゆく予感)

うちのクラスの女子は、皆元気だなあ
ちなみに最後のは俺

「あー。騒ぐな、静かにしろ」

心底めんどくさそうに、織斑先生が制する
ひよっとして、女子のこういうテンションは苦手なんだろうか。俺
も得意ってわけではないが

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんからー！」

もう一人の方を忘れていた訳ではない。ただ、デュノアのインパクトが強すぎるのだ

『ISは女性しか動かせない』というルールの、三人目の例外者。
なんでこんなに例外があるんだよ

実は男でも動かるんじゃないか？コアが好き嫌いしているだけで
で、もう一人を見てみると、見ためからして異端というか・・・

輝くように綺麗な銀髪を、腰近くまでおろしている

だけど、それは整えているというよりはただ伸ばしているだけ

左目には眼帯。戦争映画の大佐とかが使っていそうな黒眼帯

右目にはきれいな紅い瞳。だけどそれは、宝石ルビーのようにただ冷たい
光を放っただけだ

纏う空気は、冷たく鋭い氷のよう

《軍人》という印象を受けるその子は、腕組みしたまま周囲の女子をくだらなそうに見ている

「えーと、名前は・・・」

このどこかピリッとした空気は嫌いだ
ひよっとしたらこの子はシャイガールなのか？
口を開かないなら、こっちから訊くべき・・・

ギン！

「っ・・・」

視線で人を殺せるんじゃないかってぐらいの、鋭い睨み
へびに睨まれたカエルとはこのことが
結局、俺は黙ってしまう
何事もなかったかのようにクラス全体を見渡したあと、その子は教室のある一点を見つめる

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

やっぱり、織斑先生は織斑教官だったのか
きちつと居住まいをなおして、異国のものではあるう敬礼をする彼女は、《軍人》という印象をさらに強くさせる

それに対し、織斑先生はさっきとは違っためんどくささを感じているようだった

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではないし、ここではお前も

ただの生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」

また、ぴつと姿勢をただし、敬礼をする
間違いなく軍人。もしくは軍事施設関係者

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」
「……………」

自分の名前をいって、また口を閉ざすボーデヴィツヒ
もつとないのかよ、出身国とかさ。アピールポイントとかさ

「質問いいか？」
「……………なんだ？」

空気がアレだったので、もうちょっと話させようと思ったら、やっぱり睨まれる
すくんでしまうのは俺がヘタレだからじゃない。あいつが睨みきかせすぎなんだ

「しゅ、出身国は？」
「ドイツだ。それが、どうかしたか？」
「いや…………別に何もありません…………はい」

時間を取らせてしまって申し訳ないという気持ちになってくるから
不思議だ

「……………」
「……………」
「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

ああ、山田先生がボーデヴィツヒの即答に泣きそうだ。先生をいじめてやるなよ。硝子のハートなんだから

『マスター』

ん？

『あの子、もしかしくなくても軍事関係の人でしょ？』
多分な。しかも、ドイツの

『ドイツって確かさ、織斑先生が教官として赴任してたなんて話があるよね』

え、そうなの？

『うん。ちよつと調べたら出て来た。それでさ・・・』

・・・なるほど、言いたいことは分かった。お前がどんな調べをしたのかは気になるが、そうだな。頼むだけ頼んでみるか

『うん。そうしてみー』

パシンッ！

急に乾いた音が響く

クラスを見渡せば、頬を抑えた一夏の前にボーデヴィツヒが手を振り切った形で立っていた

「私は認めない。お前があの子の弟であるなど、認めるものか」

そんな事を言われて怒らない人間はいない
だけど、混乱したのであるう。一夏が怒るまでには少し間があった

「いきなり何しやがる！」

「ふん・・・」

その激昂を無視して、ボーデヴィツヒは空いている席に座る
つか、隣だった

「よ、よろしく・・・」

「・・・」

うわ、ガン無視

ボーイ ミーツ ボーイズ（後書き）

というわけで、二人の転校生でした

ちなみに、アルに答える薫ですが、「」があつたりなかったりする
のは仕様です

見づらいかと思いますが、こうしないと、薫が独り言ぶつぶつ言っ
てる危ない人ですから（笑）

IS非展開時は脳内での会話ですので、「」はつきません

IS展開時はプライベート通信のようなものを使うので、「」がつ
きます。あと一人きりの時も

別につっこみはなかったのですが、いつか突っ込まれると思ったの
で、予防線として張っておきます

シャルル・デュノア

「あー・・・ゴホンゴホン。これにてHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドへ集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて織斑先生が移動を促す

「・・・なんで俺は殴られたんだ？」

やっぱり殴られていたらしい。一夏が頬をさすりながらこっちにくる

「俺が知るか。今年は女難の相でも出てんだろ」

「・・・なんで今年の相でなんだ？」

「自分の胸に手を当てて、ゆっくり考えてみる。・・・さて、気に入らない事だろうと思うが、さっさと行こうぜ。時間がない」

「お、おう」

早くいかないと、女子と一緒に着替えることになる

それはいくら朴念仁の一夏だろうと非常に困るだろうから、とりあえずさっさと動くように促す

「織斑、柳瀬。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ？」

「あ、それもそうですね。ほれ、デュノアも行くぞ」

そういつて、さっきの金髪の方に話しかける

「君達が織斑君と柳瀬君？はじめまして、僕は」

「はいはい、積もる話は後な」

「とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるからな」

説明と同時に、一夏はデュノアの手を取って教室を出る
おお、ナイス行動力

「とりあえず男子はアリーナの空いている更衣室で着替え。実習の度にこの移動だから、早めに慣れておいてくれ」

「う、うん・・・」

さつきから、シャルルは落ちつかないのか、妙にそわそわしている

「トイレか？」

「トイ・・・っち、違うよ！」

「はいはい。転校早々からデュノアを困らせるなよ。・・・つか、早くいかないと来るぞ」

「何が？」

・・・デュノアさん。《ISを動かせる男子》という特異点である
自覚はあるのかい？

一夏はさつきと階段を降ってゆく。それに引っ張られるように、デュノアが続く

「あのなあ、ISを動かせる男子っていうのはな・・・」

『マスター、前方より熱っぽい何か。その数いっぱい。接触までたぶんあと少し』

・・・アバウトで無気力な警告どうも
アラート

「ああっ！転校生発見！」

「織斑君も一緒！」

「ついでに柳瀬君も！」

そんな女子の声が聞こえたかと思うと、ぞろぞろと集まってくる女子集団

・・・何故だ？某ゲームの援軍無き籠城戦、倒せども敵がわらわら出てくるシーンが頭のなかをよぎる
ハンドガン縛りでも結構つらいのに、アレをナイフ縛りでやれるとかどんな神だよ

って、俺はついでかコラ！

「いたっ！こっちよ！」

「ものども、出会え出会え！」

「・・・御覧のように、淑女の皆様の注目の的なんだよ」

間にあわず、すでに包囲網が敷かれている
やっぱり俺たちの入学のときのように、《動物園の》新しいオトモ
ダチを見るような視線でデュノアを見る

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪もいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きやあっ！二人、手をつないでる！」

「一夏×転校生・・・いえ、一夏×転校生×柳瀬のドロドロとした・
・・・」

だから最後、俺を巻き込むなっつての！

何度も言うけど俺はノンケだ！

おまえは昼ドラ録画して見てろ！

「な、なに、みんな、何騒いでるの？」

「ほら。足止めるとすぐに捕まるぞ」

「あ、うん」

デュノアの足が止まっているのを、背中を押して歩かせる

『最短ルートは、そこを右。その先には誰もいないよ』

お、サンキュ

「そら、男子が俺たちしかないからだろ」

マイノリティ
「少数派はつらいねえ」

「……?」

いや、そこで「意味が分からないよ」みたいな顔をされても……

「男子は俺たちしかないんだから……」

「あつ！——うん、そうだね」

一瞬驚いた顔をして、無理矢理話を合わせようとするデュノア
その動作に、ちよつとした《違和感》を感じる。何だ？

『今はそんなこと言ってる場合じゃないって！また出席簿アタック
が飛んでくるよ』

おお、そうだったな。アレは痛い。一週間に一回くらえば充分だ。
月曜に気合入れるための一発だけで充分だ
今週はすでに二発くらったけど

「さて、じゃあ一夏を人身御供にして逃げるか」

「そういうことをさらつと言うな！薫が人身御供になればいいじゃないか！」

「いやだ。それに、俺を人身御供にしたところで効果は無いぞ。後ろの群衆の空気を肌で感じてみる。明らかに《織斑くーん！》とか

《転校生くーん!》っていう空気。《柳瀬くーん!》のやの字も感じないだろ?」

「・・・色々とすまん」

「大丈夫。問題ない・・・」

くっ・・・

「とにかくススめ!足を止めるな!」

「お、おう」「う、うん・・・」

そのご、何とか女子の猛追を振り切り、無事第二アリーナの更衣室にたどり着いた

「しかしまあ助かったよ。男子二人だけじゃ心細いもんな」

「たしかに、こういうところに飛び込んでみると、むさい男友達のありがたみが分かるってもんだよ」

「「うんうん」」

「そうなの?」

「・・・」

二人揃ってなんて言っていないか分からなくなった

人とは、こうも価値観が変わるものだったのか

なるほど、環境一つでこんなにも価値観とは違ってくるんだ。宗教戦争とかがいままであったても無くならない訳と多分一緒なんだろうな

皆が皆同じ価値観だったら、どんなに平和だったことか・・・

『それは違うと思うよ、ボクは。皆違うから、それぞれの意見をぶつけられるんでしょ？』

なるほど。価値観の相違があるからこそ、新たな価値観を生み出し、人類という輪をさらなる高みへと導くのだということか

つまるところ、価値観が違うからといって、その人を分かつとしないのは間違いだ・・・と思う

以上、アニメとかに影響された俺の訴え終わり

にしてもこの環境の辛さが分からないということは、フランスには共学のISに関する学校があるのだろうか？

操縦できるのは原則女性だけだが、整備は男がやっても問題ないはずだからな

そついう意味では共学のところもあるのかもしれない

「まあなんにしろ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。で、こっちは柳瀬薫。特徴は・・・特にないな」

「平凡結構。お前みたいに変に目立つよりずっといい。・・・柳瀬薫だ。おれも薫でいいぞ」

「うん。よろしく二人とも。僕もシャルルでいいよ」

とりあえず、友好の証に握手をする
シェイクハンス

「・・・って、げえっ！？もうこんな時間！さっさと着替えないと・・・」

一夏が時計を見て、そうさけぶ

時間は結構おしている。というか、もう始まる寸前

「さっさと着替えないと！」

そういつて一夏は着替え始める

ちなみに、ISは専用のISスーツに着替える

山田先生曰く、ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、より速くISへ使用者の意思を伝達するためにあるとのこと

ちなみに耐久性にも優れ、銃弾ですら穴をあけることは出来ない・
・着弾の衝撃はモロに来るらしいが

「薰、見てないでお前も着替え・・・」

「ふふふ・・・甘いな、一夏」

バツ！

「なっ・・・お前」

「俺はもうすでに着替えているのだ！それじゃあさらば！」

「あ、ちょ・・・待ちやがれ！」

ダッシュで駆け出す俺

自分のミスで遅れるのは仕方ないが、一夏のミスで出席簿アタックだけは勘弁だ！

ムレて熱くなかったかだつて？

ISスーツは吸汗性も抜群なのだ。多少ムレたところで問題ない

「ほれ、シャルルも行くぞ！織斑先生の出席簿アタックは痛いぞ」
「え？」

もう着替え終わっているシャルル
速いなあ。こいつも着こんでるのか？

「え？でも一夏は・・・」

ちよつと困つたように顔を曇らせるシャルル

「放っておけ。何の準備もしていない自分の愚かさを呪わせろ」
「でも・・・」

そういつて、シャルルは子犬のような眼で見てくる
・・・何だか凄く悪い事をしている気分
いやしかし出席簿は・・・

「・・・」

無言の瞳で物語ってくるシャルル
・・・負けた

「遅い！」
結局遅くなつた一夏に巻き込まれ、俺たちは三人まとめて出席簿ア
タックをくらっていた

スッパーン スッパーン スッパーン

「い、いたいよ・・・」

「だからほっとけって言ったのに・・・」

「二人とも、すまん・・・」

シャルル・デュノア（後書き）

という訳で第二部三話目、全体で十六話目でした

途中の価値観や宗教観がどうのつていうのは、あまり深く考えないでください

高校上がっても中二から抜けられない、たわけの妄言です

ちなみに、第二部の話は結構出来ています

・・・ですが、読み返してみても大多数がラウラとの絡みです
流れ上、一夏含めて他の原作キャラとの絡みは、かなり少なめにな
ってしまっています

宣言しておきます。第二部はずっとラウラのターンです
あと、そのラウラでさえ性格保てるか自信ありません

それでもいいよ、駄文でもいいよという方は、期待しないで待つて
いてください

THE 戦闘訓練

「あら、ずいぶんゆっくりでしたわね。スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「色々あるんだよ。オトコノコにはな」

そういつて、セシリアとの会話を打ち切る

訓練をもらった恩はあるが、それとこれとは話が違う

一夏のように剣道云々の経験はない

代表候補生の様なIS稼働時間のアドバンテージもない

アルという補佐があってもギリギリくいついていけるかどうか程度の技能しかない

ないないづくしの俺は、少しでも吸収しないとあつという間に後れを取ってしまう

セシリアに手ほどきをしてもらったと言っても、IS全体でみれば基本的な操作が身につきだした程度

未だ初心者域を出ないのは俺自身分かっていることだ

「・・・」

セシリアは分かってくれたのか、それ以上はつつかかってこなかった

「では、本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を始める」

「はいつ！！」

一、二組合同なため、いつもの倍の人数がいる

そして、その声はいつも空返事のようなあれではなく、気合のはいったものだっただ

「今日は戦闘を実践してもらおう。凰！オルコット！」

「ええっ!?」「な、何故わたくしまで!?」

「専用機持ちはすぐに始められるからな。あの馬鹿者二人よりはましだろう?」

「だからって、どうしてわたくしが・・・」

ぶーたれているセシリアと凰に歩み寄り、織斑先生は話しかける

「お前ら少しはやる気を出せ。――。」

距離があつて何を言ったかは分からなかったが、何かを耳打ちしたようだった

「まあここはイギリスの代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

さつきと打って変わってやる気を出す二人

「二人とも、何を言われたんだ?」

「ま、だいたい予想はつくよな。な、一夏」

「え?」

『一夏くんにいいとこ見せられるぞ。とか、そんな感じかな』

だろうなー

「・・・あ!勝ったらデザートでもおごってもらえるとかか!?女

子は甘いもん好きだから、やる気も出るよな」
「『はあ?』」

・・・まあいいや。今に始まったことじゃない。セシリア、凰。南無

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。それはこっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は―」

キイイイン

空を割く音が聞こえる

『マスター!! 後方よりISが急速接近中! このままだとボクらぶつかっちゃうよ!』
「ハア! ?」

「あああーっ! ど、どいてくださいっ!」

『とにかく回避!』

「一夏! 横つとび!」

「は?」

「早くしろ!」

「お、おう」

俺らは同じくらいのタイミングで、それぞれ横に飛ぶ

刹那、俺たちが立っていたところはあとかたもなく吹き飛んでいた

「お、おっかねえ・・・」

アルのアラートがなければ吹き飛んでたのか、俺たち
ISと正面衝突とか、死ぬほど痛いんだろうなあ・・・

「いたたた・・・」

土煙が晴れた先に居たのは、山田先生だった

「あの、怪我ないですか？」

「だ、大丈夫です・・・。うう・・・」

山田先生が呻くが、多分痛みよりも恥ずかしさから来るものだと思う。
顔が赤い

「・・・山田先生」

「はいっ！」

織斑先生が山田先生を呼び、そのまま自然な流れで左手を挙げる
するとどこからともなく的が飛んでくる

「はあっ！」

ドン！ドン！ドン！

銃撃の音と、発射の閃光
着弾先を見てみれば、全部的に命中

『しかも、全部ど真ん中だったよ。・・・あの姿勢から』

山田先生は地面にぶつかった時ときの姿勢から、わずかに上体を起こした姿勢で射撃したのだ

ISの補助があっても、どれくらい難しいか分からない

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。あれくらいの射撃は造作もない」

「む、昔の事です。それに候補生止まりでしたし・・・」

代表候補生止まり。じゃあ代表はもつとすごいのか・・・
そう思つて織斑先生を見る

やはり、国家代表の名は伊達じゃないということだろう

『すごいね・・・』

「さて子娘ども。いつまで惚けている？さつさと始めるぞ」

「え、ですが二対一では・・・」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉にカチンと来たのか、セシリアと凰は飛翔し、戦闘形態へと入る

それを見て山田先生も飛翔する

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

戦闘開始

セシリアが後衛。牽制、補助を担当

凰が前衛。衝撃砲と双天牙月を駆使して切り込んでいる

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をして見せろ」

「あつ、はい。・・・山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後期の機体です——」

ラファール・リヴァイヴというISは第二世代最後期に開発された機体である

対応している後付装備の種類も豊富で、試作段階の第三世代よりも安定した活躍が見込める良機

操縦も簡易で、乗る人を問わない汎用性の高さもウリの一つ

シャルルの説明はそんなところだろうか

ずっと山田先生の戦闘を見ていたため、あまりよくは覚えていない

セシリアがビットのブルーティアーズを使っても、足の止まっていたところに射撃を浴びる

『あれは、相手を誘導する射撃だね。当てる気は無いみたい』

それを避けるために動くが、ビットの動きは止まる。回避先にはまた弾丸が飛んできていて、すぐに回避に手いっぱいになるセシリア。当然ビットを動かす余裕はない

そこへ、凰が山田先生の背後をとった斬撃を——かわされる

反転し、もう一度アタックを仕掛けるために凰が衝撃砲を撃ちまくりながら距離をとる

視線は完全に山田先生の方だ。後ろを気にしている気配は無いで、鳳の移動先に居たのは、回避に手いっぱい周囲の見ていないセシリア

お互いがお互いの位置を把握していないのだ。ぶつかり、動きが止まる

その隙を山田先生が逃すはずがなく、すかさずグレネードを投げつける

爆発が起き、地面に二つの影が落ちた

落ちたセシリアと鳳は何か言いあっているようだったが、織斑先生は構わず続ける

「さて、これで諸君にもIS学園職員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

パンパンと手を叩き、皆の意識を切り替えさせる

「専用機持ちは、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、柳瀬、鳳だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。柳瀬はボーデヴィツヒの補佐をやれ。では、分かれる」

一夏の班かシャルルの班になるかで、十五の乙女たちがもたついたのは言うまでもない話だった

「この馬鹿者共が……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

結局、一夏の班がシャルルの班になるかで騒ぐもんだから、織斑先生の鶴の一声で、綺麗に名簿順で並ばされる女子たち

「最初からそうしろ。馬鹿者ども」

で、各々がグループリーダーについて感想を言っている中で

「……………」

「……………」

「……………」

ラウラと俺の班は、他に比べておしゃべりが少ない

うん。真面目に受けようとするその心構えは大事だと思う

『ラウラちゃんの前で萎縮してるんじゃないのかな？』

……言ってやるな

「自己紹介がまだだったかな？柳瀬薫だ。よろしく頼むな」

「……………」

差し出した手への応答は無かった

相変わらずの沈黙

冷たい氷は、溶けるということを知らないようだった

手を引き、咳払いをして班の女子に向き合う

「さて、とりあえず『リヴァイヴ』をもらって来た訳なんだが……

「

ボーデヴィツヒを横目で見る。目が逢う瞬間に、その意図を察した
《お前がやれ》

目は口ほどに物を言うんだぞ

その懨然とした態度に一言いつてやりたくなっただが、ここでもたつ
いて授業が進まないのでは本末転倒

何も言わずに、もらって来たリヴァイヴで実習を始めることにした

「それじゃ、とりあえず出席番号順にリヴァイヴに搭乗。起動して、
歩行までやろうか。えーと・・・」

またボーデヴィツヒをみる。やっぱり動く気は無いみたいだ

あまりじろじろ見たからだろうか。冷たい光を宿した瞳で睨まれる

はい。すいません。やらせていただきます

『弱い』

ほっとけ

・・・しばらくして

「そうそう。そんな感じだ。で、解除するときにはしゃがんでだな・・・

」

結局、俺の指示と、それへの返事以外誰一人としてしゃべることな
く、全員の搭乗及び歩行の訓練は終わった

ボーデヴィツヒは、終始腕組をして、その様子をくだらなそうに見
ていた

リーダー、しっかり仕事してくれ・・・頼むから

THE 戦闘訓練（後書き）

という訳で十七話目でした

戦闘描写が淡々としている気がします。とにかく難しいです
IS 戦闘のスピード感を出すには一体どうしたら・・・

ルームメイトはプラチナ軍人へソルジャー

「引越しですか？」

一日の授業が終わり、寮でくつろいでいるところに、山田先生がやってきて《引越し》の話をされる

「はい。その、デュノア君を織斑君に任せることが決まりましたので」

なるほど、俺への退去命令か
たしかに俺に任せるよりは一夏に任せた方がいいのかもしれない
こいつはシャルルの面倒見るの好きそうだからな

「じゃあ荷物まとめますね。部屋のカギを渡してもらえば、あとは自分で行きます」

「はい。じゃ、じゃあ、よろしく願いしますね」
「ういっす」

ほどなくして準備が終わり、俺はしばらく使っていた部屋を出て行った

「んじやな。一夏、あまりシャルルに迷惑かけんなよ」

「おう。薫もあまりルームメイトに迷惑かけんなよ」

「おう」

「おじゃましてーす」

ノックをしてから、部屋に入る

中は真っ暗だった

とりあえず電気をつけると、そこに居たのは

銀色の輝く髪

軍服のようなカスタムを施した制服（IS学園の制服は、カスタム自由なのだ。カスタムした時点でもう制服じゃないよな。ちなみに俺は年の中袖長ズボン）
それに、左目の黒眼帯

ラウラ・ボーデヴィツヒだった

「・・・何故だ？」

「は？」

「何故お前がこの部屋に来るんだ？」

一夏とデュノア、俺とボーデヴィツヒの組み合わせか

一夏にデュノアの面倒を見させるだけじゃないようだな

「シャルルの為の寮の組み合わせだってさ。・・・それとも、一夏の方がよかった？」

ギン！

名前を出ただけで睨まれた
本人が来たら殺しかねないな

「とにかく、俺がルームメイトだ。よろしく頼むわ」
「・・・フン。勝手にしろ」

許可が出たという事でいいのだろうか？
いや、許可も何もないけど

『マスター』

うん。分かってる。分かってるが、とりあえず荷物の整理だけさせて
『ビビってやらないのだけはだめだからね』
分かってるって

整理と言っても、音楽プレイヤーと制服を取り出すだけだな
^{ジャージ}
部屋着も今着てるし、他に出すものといってもなあ・・・

そんな、整理とも言えない整理のあと、俺はボーデヴィツヒに体を
向ける

「ボーデヴィツヒ。お前に頼みたい事がある」
「・・・」

相変わらず黙ったままだが、構わずに続ける

「俺のIS訓練に付き合ってくれな」断る「・・・即答ですか」

図々しいのは百も承知だったが、即答か・・・

だが、俺だって引き下がるわけにはいかない

セシリアたちは一夏の指導をやりたがっているようだったし、俺のために時間を割かせる訳にもいかない

だからって、ボーデヴィツヒの時間を割いていいのかと聞かれると、どう答えていいものやら・・・

『あなたはもう機動の基礎は十分でしてよ？それよりも一夏さんの・・・』

『はあ！？なんであたしがあんたの指導しなくちゃいけないのよ！？それよりも、問題は一夏よ！』

『・・・（無言の圧力）』

・・・人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られるんだよ。齡十五で死にたくは無いんだよ！俺は！

そしておそらくはシャルルも一夏につく。ルームメイトのよしみとか言いだして、一夏の方から頼むだろ。多分

『回避時は右前方二十度に移動ですわ！』

『なんでわかんないの？感覚よ。感覚』

『くいつて感じた』

コーチ三人がこれだ

セシリア以外は、アルでもよくわからないらしい

アルのような補助のない一夏が、シャルルに泣きつくのは目に見えるている

つまり、俺はボーデヴィツヒに頼るしかないのだ

「・・・何故？」

「お前のIS訓練を私が行う必要性を感じないからだ。代表候補生は私のほかにもいるだろう？そいつらを当たれ」

「だって皆、一夏。一夏！一夏！！俺を構ってくれる奴なんていないんだよ」

「ならばアレと一緒に受けていればいいだろ！」

「俺はまだ馬に蹴られて死にたかないんだよ！」

というか、俺が混じった時に篠ノ之と凰が発する空気が辛いんだよ！
凰なんかは本当に空気を発射してくるし

「はあ？馬などどこにもいないだろう」

「《人の恋路を邪魔するやつは》っていうじゃないか！」

「・・・」

「あ」

さらっと言ってしまったが、まあ気がついてないのは一夏ぐらいなもんだからいいか

それよりも、その一言はボーデヴィツヒの気分を害したようだった

あの、心底くだらないなという目をして、ボーデヴィツヒは話しだす

「・・・とにかく、お前への指導はやらない。そんな上ついた、危機意識の足りない者たちとつるんでいる奴などに指導をしても、時間の無駄だ」

「えーっ！そんなこと言うなよ！な、頼むから！」

学年別トーナメントで醜態をさらしたくは無いんだよ
俺だって、男のプライドを一応は持つてるさ

「・・・」

そしてそのままこちらに背中を見せ、ベッドへ向かう

背中、『黙れ』と語っている

男は背中で語るとは言うが、女も背中で語るんだな。主に凍りつく様な空気で

ボーデヴィツヒに向かって、ちっぽけなプライドをかなぐり捨てた
土下座

反応してくれたこの機会を逃せば、多分次は無い。話題になる度に
貝のように口を閉ざすだけだろう

ならなりふり構わず、ごり押ししかない。というか、それ以外知らん

「お願いします！俺の指導をしてください！先生！師匠！《教官》
！」

今まで微動だにせずに聞いていたボーデヴィツヒが、ピクリと動く
そして、こっちの方に体を向ける

「・・・今なんといった」

「え、俺の指導をしてください！って・・・」

「そのあとだ」

「えっと・・・先生！師匠！《教官》！」

ボーデヴィツヒは、しばらく考え込んだ後

「・・・良いだろう。お前の指導をしてやる」

「・・・え？」

「二度も言わせるな、指導してやると言ったのだ。一か月であの男
や、その周りの奴らよりも強くしてやろう。なにせ、私が教えるの
だからな。心配無用だ」

・・・

『やったね！マスター！』
あ、ああ・・・

あんなにいやそうに断っていたのに、一体なにがあったんだ？
妙に呆気なく決まった気がしなくもないが、とにかくよかった

「但し条件がある」

「な、なに？」

「私の教えには忠実に従え。それと、――夏（あの男）と、一切か
かわるな。いいな」

「！！」

・・・なんとというか、悪魔との契約みたいだな。《お前の命の次に
大切な物と引き換えに》的な。俺の一番大切なものは、今のところ
家族だけだ

「さて、どうする？」

「むう・・・」

一夏との縁を切って強さを望むか・・・

今必要なのはISの指導者

だけど折角出来た一夏との関係を、壊したくは無い

だけど今必要なのは・・・

いやしかし・・・

そんな思考をいったん打ち切り、仕方がないので損得の視点に立つ
て天秤にかけてみる

決断を迷った時は、こうするのが一番いいらしい。父曰く、一番客
観的に判断できるそうだ

結果は、おのずと見えて来た

「・・・わかった。その条件を飲み込む」

「よろしい。では土曜日より訓練を開始する」

「はい！」

こうして俺は、妙な感じはあったものの、無事に指導者となってくれる人間を見つけられたのだった

「さて、以上だ。あとは寝るなり好きにしている」

「ういっす。さて、それじゃあシャワーでも・・・」

しゅるり

「は？」

しゅるり

衣擦れの音がして、気になったもんだから振り向く

そこには、全裸になろうとしているボーデヴィツヒがいた

その肌は白く綺麗で、ひかえめな双丘が静かに・・・って、そうじやなくて！

「な、何やってんだよっ！」

「はぁ？寝るにきまつているだろう？」

「そうじやなくて、なんで脱いでるんだよ！パジャマとかないのかよ！？」

「そんなものは無い」

「じゃあせめて俺に一言いつてから・・・」
「・・・？」

・・・なんで「わけがわからないよ」なんて目をしているんだ？
異性が目の前に居るといふ認識がないのか！？

「とにかく、俺は一回部屋出るからっ！布団にもぐりこんだら呼べ
っ！」

「あ、おい・・・」

ボーデヴィツヒの返事はきかず、すぐに部屋を出る

「あー・・・ビックリした」

まさか、いきなり脱ぎだすとは・・・
まあ、たしかに《ごわごわするのがいやだ》とか言って下着だけで
寝る人とかいるけどさ

まさか、いきなり脱ぎだすとは・・・

『こういうのなんて言っただっけ？・・・眼福？』

眼福とか言ってる余裕なんてなかったよ。吃驚しかなかったよ

はあー。今日も眠れないなあ・・・

『でもマスター、本当によかったの？あんな条件で』

「・・・仕方ないだろ？あれが、ボーデヴィツヒの最大譲歩なんだろうから。下手に文句言つて、『じゃあコーチしない』なんて事になつたら、それこそ本末転倒だろ？」

『でもさあ・・・』

「まあそれでも指導者は得んだ。動きを盗めるだけ盗もうじゃないか。それに、一夏に関わらないでいいのは指導期間中だけだろうからな」

『・・・うん』

納得いつてないみたいだなあ・・・

実際、俺も納得いかない

他者との拒むメリツトってなんだ？

『王者とは常に孤独なもの』なんて言っている某芸能プロの唯我独尊社長もいたからな・・・そういうのか？

「約束しちまつた以上、今はちゃんと従うしか・・・」

ドン！

急に、頭頂部に衝撃が走る

「つてえ！いきなり何す・・・」

すぐに背後を向く

「騒がしいぞ馬鹿者」「すいませんでした」

いたのは織斑先生。即土下座余裕でした

というか、チョップか

出席簿ほどではなかったものの、それでも結構痛い

「独り言は、トイレにでも入ってやれ。・・・ところで、ラウラはどうだ？」

「ボーデヴィツヒですか？うーん・・・一応、コーチの話をこじつけることに成功したぐらいですかね」

「ほう。アイツにそんな話をこじつけるとはな。・・・どんな魔法の言葉を使ったんだ？」

「べつに。日本人らしく、馬鹿正直に頼みこんただけですよ」

心なしか、織斑先生は面白がっているようだった
笑いをこらえているのか、口元がひきつっている

そうか。ドイツの時のアイツは、引き受けないような奴だったのか
そういえば、前カードにあったな。アイツ、ソイツ、コイツ、ドイツ。今は別にどうでもいいけど

「それで、出た条件は何なんだ？」

「は？」

「あいつの事だ。どうせ交換条件をつけての譲歩だろ？で、それは何だ？」

むう・・・さすが元教官。よく分かってらっしゃる

「教えに忠実に従うこと。それと・・・」

「それと？」

「・・・一夏と一切関わらないこと、です」

今まで口元の笑いを必死に抑えていた先生が、急に表情を変える

「・・・そうか。まったく、あいつは・・・」

頭を押さえる織斑先生

「・・・まあ仕方がない。とにかく、ルームメイトになったのも何かの縁だ。アイツの事を気にかけてやってくれ」

「はい」

「ではな。ゆつくり休め」

そういつて、織斑先生は去っていった

・・・前途は洋々とは行かないようだな
とりあえず、部屋に入ろうか。そろそろアイツも布団に入ったところ
だろうし・・・

ルームメイトはプラチナ軍人へソルジャー》（後書き）

という訳で、ラウラとルームメイトになる話でした
どうして教官役をラウラが受けたのかは、また後で

とまあ、そんなことはさておき、次回にはあの子が登場予定です
モブなんて言葉で終わらせられないほどの人気赤丸急上昇中のあの子です

・・・幕のあだ名ってなんでしたっけ？

ルームメイトはブロード貴公子へジェントル

薫が必死の土下座でラウラからの指導（条件付き）を勝ちつつあったところ

一夏&シャルルの部屋では

「じゃあ、改めてよろしくな」

「う、うん・・・よろしく、一夏」

シャルルは何だか気まずそうにしているが、どうかしたのだろうか

ああ。そっか

「薫の事が気になるのか？」

「えっ？」

人のいいシャルルのことだ。多分自分のせいで薫が追い出されたのだとでも考えているんだろう

「アイツは誰とでも気兼ねなく話せる奴だからな。誰と相部屋になっても上手くやっていくさ」

「う、うん・・・」

「それに、これはシャルルの我儘とか、そういうんじゃないんだろう？ だったら気する必要なんてないだろ？」

薫も納得してたみたいだし。とつなげる

「僕が気にすることじゃない、か……。うん、それもそうかも」
「だろう？ ずっと薫の事気にしながら使ってたちゃ、気持ちも休まらないだろ？」

休むための寮なのに、それでは本末転倒というものだ

「……。うん、そうだね」

「という訳でコレをどうぞ」

そういつて、俺は日本茶を差し出す
シャルルの気持ち落ち着けると、食後の休憩をかねたものだ
ちなみにセシリアは飲めない。曰く、『色が……。』だそうだ
緑ってそんなに変か？

「ふう……。紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に言ってもらえてよかったよ。あ、そうだ、今度抹茶を飲みに行こう。駅前に抹茶カフェなんてのもあるし」

「抹茶カフェ？」

「うん。抹茶をコーヒーみたいな感覚で飲めるんだ。それに、特別な技能とかも必要ないから、気軽に飲めるのもウリだな」

「ふうん。そうなんだ。じゃあ今度誘ってよ。一度飲んでみたかったんだ」

「おう。ついでに色々案内するぜ。折角だし今度の日曜にでも出かけるか」

「本当？ 嬉しいなあ。ありがとう、一夏」

柔らかな笑顔を浮かべるシャルルに、男と分かっているけどドキッとしてしまう

彼のもつ中性的な雰囲気がそうさせるのだろうか。素直な笑顔というものを向けられると、何故か戸惑ってしまう俺がいた

「ま、まあ、俺も久しぶりに抹茶飲みたかったし、ついだよついで。ああそうだ。折角だから薫も呼ぶか。男三人、親睦を深めるって意味でも」

それに、二人で行くよりも三人で回ったほうが楽しいだろうし

「うん！それいいね！」

「お、おう。じゃあ俺が誘っておくわ」

心底うれしそうなシャルルの笑顔に、男と分かっている以下同文千冬姉と二人で暮らしていると分らないが、シャルルの笑顔はいわゆる『家庭的な笑み』というやつなんだろうか
そういや、薫の家族も写真のなかで笑っていたな

「そういえば一夏はいつも放課後にIS特訓してるって聞いたけど、本当なの？」

「ああ。俺は他の皆よりも遅れているから、人一倍訓練時間を重ねるしかないからな」

今日はシャルルと薫の引越（し）と言っても二人とも全然荷物がなかった）があつたので、放課後の特訓は休みにしたのだけれど明日からまた再開しないといけない。何せ今月には学年別トーナメントがあるのだから

「僕も加わって良いかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「うん。任せて。あと薫も特訓とかしてるの?」

「いや、アイツはやってないみたいだ。なんでも教えてくれる人がいないからだとか」

俺が誘っても《馬に蹴られるのはいやだ》とか言ってやらない
どうしてそこで馬が出てくるんだよ。訳わかんねえ

今は一人でセシリアに教えてもらっていた基礎的な移動訓練を一人
で復習しているようだった

「ふうん。じゃあ薫の特訓も手伝ってあげたほうがいいのかな?」

「おう。アイツきつと喜ぶぞ」

「そうかな?ふふっ」

なんだか嬉しそうな顔をするシャルル

「・・・って、これ、薫の忘れものか?」

テレビの前には、『死神の断罪5』が置かれていた

翌日

「あゝ・・・」

眠い。超絶眠い

一夏と今後どう接したらいいのか。同い年の女の子が同じ部屋で寝ている。しかも全裸で

それ考えると悶々としてしまって、眠れなかったのだ

「・・・」

どうもボーデヴィツヒは先に行ったようだった

そんなことはともかく、俺も支度をし、学食へと向かう

食堂につくと、ある人に出会った

「あ、ヤナツキー。おはよー」

「おお、のほとけ布仏か・・・」

のほとけ ほんね布仏本音。いつでもダボダボの袖口と、人懐っこいスマイルが特徴
こっちに袖を振りながら近づいてくる

「ヤナツキー。どうしたのー？」

「いやね・・・もう眠くて眠くて・・・いまはそのあだ名に対して
つつこむ気力も起きないんだ」

「ふーん・・・あ。さてはヤナツキー、エッチな事考えてて眠れな
かったんだねー？」

「ばっ・・・なんなんじゃ・・・」

凶星ですが、何か？

眠れぬ訳 一夏20% 全裸80%

・・・男なんだから、仕方ないよな

「えー。でもヤナツキーは女の子に興味津々だって、みんな言うてるよ?」

「興味はあっても津々ではないな。うん。あとヤナツキーの『きー』はどこから来たんだ?」

ようやく頭が回りだしてきた

それに伴って眠気も次第に消えてゆき、ヤナツキーのあだ名について突っ込む余裕が出てきた

「えー、だって『やなつせー』じゃ語感が悪いからー、ヤナツキー」

「・・・薫のほうで考えないのか?」

「んーそれは先客がいるからだめなんだよねー」

・・・ああ、薫子さんか

「じゃあさ、《たかし》なんてどお?」

「アンパ。マンはかけないから、それはダメだな。はあ、ヤナツキーでいいや。もう」

人生諦めも肝心。親父が言ってたな

布仏とそんな話をしながら、朝食をもらい席につく

というか、そんなダボダボした袖口で箸使いににくいのか?

「そつえばヤナツキーって、引越したんだよね?」

「ああ。そうだけど？」

「同じ部屋の人って、誰？」

「ボーデヴィツヒだ。ほら、転校してきた……」

「ああ、ボーちゃんかー」

それもマズくないか？

アイツは鼻水飛ばしたりはしないぞ。というか、そんなところ想像したくない

「びつくりしたよねー。いきなりオリムー叩いちゃうんだもん」

「ああ……」

織斑先生は気にかけてやってってくれって言うていた
でも、俺って何か出来るのか？

うーん？

「ヤナツキー？どーしたの？変な顔して」

「ん？ああ悪い。それよりもさっさと食っちゃおうぜ。遅刻しちゃう」

「それは大変だねー。オリムーやヤナツキーみたいに叩かれちゃう」

「アレは結構痛いぞ」

布仏は袖口のせいで食べ辛そうにしながらも完食。とりあえず朝会
ったのも縁なので一緒に教室に向かう

……っーか、袖まくれよ。いろいろ面倒じゃないのか？

訊いてみたら「ずり落ちて来たのを直すほうがめんどくさい」だって

「じゃあ制服の袖口のサイズを小さくするのは？」

「・・・！その発想は無かったね！。でもやらない」

はぁ・・・

「あ、薫。おはよう」

「おーシャルル。おはようさん。寮の部屋はどうだ？」

「うん。すごく快適だよ」

「それはなにより」

「それで、一夏から聞いたんだけどね。薫って今ISの指導してくれる人を探してるんでしょ？」

「あ、ああ・・・」

「それでね、よかったら僕が教えてあげようかって・・・」

「まじで？ぜひ頼む！」

俺はまだまだ初心者。知識吸収のチャンスは積極的につかんでいくべきだと思う訳だ

ボーデヴィツヒの事を教官と呼ぶようになった訳だが、別に流派に所属したとかそういうのじゃない

なら、他の誰からの教えも請けてもいいはず

「本当？じゃあ土曜日に一夏と一緒に・・・」

《あの男と一切かわるな》

ボーデヴィツヒのIS指導を仰いだ時の、《例の条件》が頭をよぎる

「・・・ちよつと待ってくれないか？」

「え？う、うん・・・」

シャルルはどうだ？

あの三人みたいに俺への指導をないがしろにすることは無いか？

『別に頼んだ訳じゃないんだから、ないがしろも何もないじゃん』

そりゃあそうだが、結局土曜に一回やったきり一夏にかかりきりになる事は無いのかな？って話だよ

『・・・どうだろ？ボクはシャルルの事はよく知らないし・・・』

じゃあボーデヴィツヒは？

『うーん・・・。多分真面目な子だと思うから、条件さえ守っていれば打ち切ることは無いんじゃないかな？』

ボーデヴィツヒの条件は厳しいものだが、逆を言えばその条件さえクリアしていればずっとIS指導をしてやるという事なのだろう
ここで《一夏とともに》指導を受けるという事で関わりを持てば、
初日でアイツを殴ったボーデヴィツヒのことだ。間違いなく約束を反故にしたとして教えてくれなくなる

なら答えは決まった

「・・・わりい。俺、その日先約があるんだ」

「え？そうなの？・・・残念だよ」

シャルルの口調が明らかに暗くなる

キンコーンカーンコーン

「じゃあさ、また今度操縦で分からない所とかあったら、その時教

えてくれないか？」

「うん、いいよ」

ちよつとした申し訳なさを感じつつも、予鈴が鳴ったため、自分の席へと進む

隣には、教官がいた
ボーデヴィツヒ

「薰ー。今度の日曜だけどさー。駅前の抹茶喫茶に・・・」

「悪いー夏。その日は予定が・・・」

「ヤナツキー。日曜日に手伝ってもらいたい事があるんだけどね・・・」

「」

「ああいいぜ。で、何やればいいんだ？」

「んとねー・・・」

「・・・」

「・・・なあ筈。俺、なんか薰にやっただけ？」

「私を知る訳がないだろう。それよりも、放課後は第三アリーナだぞ」

「あ、ああ・・・」

ルームメイトはブロード貴公子へジェントル（後書き）

という訳で、19話目でした

かまってもらえるという意味で一夏がうらやましいです

それと、チヨイ役ですが本音さんを出してみました

・・・ヤナツキーは、大丈夫ですよね？というかこれぐらいしか思いつきませんでした

物語全体の感想やダメ出しをもらえると、より一層励みになります
『こうしたほうが読みやすくて良いよ!』といったアドバイスも大歓迎です

よろしくお願いします

ラウラの訓練 シャルルの指導

「それでは、これよりISの実技訓練を開始する」
「はいっ！」

土曜日。この日は半日で授業が終わる

また、今月には学年別トーナメントもあるため、午後のアリーナは訓練する生徒でいっぱいだった

その中の一角で、ボーデヴィツヒから操作を学ぶのだ

何故か知らないが今日は人口密度の高いアリーナだが、ここら一体はがらんとしていた

「さて、これからIS訓練を始めるが、その前に一つ聞きたい。おまえ、ISの操作はどれくらいできる？」

「えーと……。移動や回避の基礎を習っただけです。操作自体は、復習ながら、毎日やってきました」

ボーデヴィツヒの凛々しく、堂々とした態度に、思わず背筋が伸び、自然と『ですます調』になる

「なるほど。攻めるにしろ撤退するにしろ、足取りが軽いに越したことはないからな。で、武器の扱いについてはどうなんだ？」

「ほとんど行っていないせん」

「ふむ……。なら、まずはISの移動がどれくらい身についたかをテストする」

「はい！」

「テストは簡単だ。私と戦え。五分もつたら及第点をくれてやろう」
「分かりやすくして良いですね」

「だろう？それでは始める」
「おす！」

そう言つて、戦闘態勢に入る俺たち
ボーデヴィッツ
教官のISは《シユバルツェア・レーゲン》という、ドイツの第三
世代型ISで・・・

「開始の合図を出したというのに、動かないとはな」

ドオン！

「うおっ！？」

い、いきなり撃つて来たよ・・・

ISの解説をする暇もくれないんですか？

「無論だ。戦場でそのような事をしている暇があるか？」

「・・・ありません」

「だったら足を止めるな」

そう言つて、ラウラは六基あるワイヤーブレードを操り、攻撃してくる

「手加減なしですかっ！？」

「当たり前だ。手加減をしては、訓練の意味がないだろう」

ワイヤーブレードの攻撃

さすがに六基同時攻撃は無いにしろ、引っ込んで別のが飛んでき
て、また引っ込んで・・・と、止めどなく降り続く《黒い雨》を
想起するような連続攻撃が襲ってくる

回避 払い 払い 回避 受けながし 回避・・・

ワイヤーの処理に手いっぱい、反撃する余裕がない

「注意がワイヤーの方ばかりに向き過ぎだ」

ドオン！

また砲撃をくらう。しかも直撃

「ぐっ……」

『トリックスター展開！シュバルツェア・レーゲンを攻撃！』

アルの掛け声とともに、トリックスターが展開される
ビットによる二方向からの攻撃

『捉え……』

「甘いな」

「！？」

ボーデヴィツヒが手をかざすと、トリックスターは指示も出していないのに、空間に静止する

ドオン！

『！？ なんて……』

そのまま、プラズマ手刀とイヤーカッターにより撃ち落とされてしまふ

しかも、その間も他のワイヤーは動きを止めることなく、俺を攻め立てる

結局、ギリギリ五分持ったかどうかというところだった
その間、ラウラは一步も動かず

「なんだあのビットの動かし方は？直線的すぎて、撃ち落としてくださいと言っているようなものだぞ」

「はい……」

「まあいい。次はお前の射撃を見る。エネルギーを補充してこい」
「はいっす」

そういつて、柳瀬薫はビットへと戻っていった

《教官！》

ふと、あいつが言った事を思い出す
教官。私にとつての憧れであり、目標とする人

（私は、あの人のようになりたいのだ）

正直、柳瀬の動きには、無駄が多すぎる
しかし、強さを渴望しているその姿は『出来損ない』と呼ばれた暗黒時代の自分に重なる

私は、あの人のおかげで『出来損ない』から『部隊最強』の名を取り戻す事が出来たのだ
ならば、『取るに足らない有象無象』である柳瀬を『一年最強（無

論私を除いて）』に仕立て上げること、よりあの人に近づけると
いうものだ

『うーん・・・ちょっとした火薬庫みたいだなあ』

あの男の声が聞こえる

見てみれば、女子に囲まれて、それはいた

柳瀬は今補給にいつている。十分程度は帰ってこないだろう

十分もあれば事足りる

完膚なきまでに叩きのめす。私の手で・・・

「おい」

オープンチャンネルで、私はそれに声をかけた

「アル、補給は？」

『オーケだよ！エネルギー満タン！ビットも修復完了！』

アルカナのIS装甲は、全てアルの手作りである

つまり、予備パーツ云々は存在せず、全てアルが勝手に修復して
いるのだという

・・・原料はどっから調達してるんだ？

『トレース用の素材としてストックしてあるから、それを使ってる

んだよ』

「へえ……。まあいいか、じゃあ行くぞ」
『うん』

俺がアリーナに戻ると、何だか騒がしかった

何事かと思い、輪の中心をハイパーセンサーで見ている

そこにいたのは、砲撃姿勢のボーデヴィツヒ

おそらくは一夏が標的ターゲットだろう

そして、そのまま火を噴いた

ドオン！

「！」

ゴガギンッ！

金属音が甲高く響く

どうやら、シャルルが間に入って砲弾を防いだようだ

なんだ？小柄のシャルルがやけにでかく見えるぞ……

『俗にいう威圧感ってやつ？』

「かもな」

《そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！》

騒ぎを聞きつけたらしい。先生のアナウンスが聞こえる

そして氣勢をそがれたのか、ラウラはISを解除してゲートへと戻って……って

「アル、プライベートチャンネル。ラウラ・ボーデヴィツヒ。開い

て」

『うん』

すぐに回線がつながる

「ボーデヴィツヒ？俺の訓練は？」

「今日は一旦中止。実践の続きは明後日の放課後からだ」

「・・・ええ」

「・・・何か文句あるか？」

ドスの利いた、不機嫌そうな声で言われれば、答えは一つしかない

「なんでもないです。サー」

「よろしい。特訓の続きは明後日の放課後。忘れるなよ」

「サー、イエス、サー」

回線が切れる

「・・・ふう」

『ねえマスター。どーすんの？』

「どうしようもねえな・・・。もう休むか？」

「あ、薰だ！」

シャルルがこつちに気付いたのか、声をかけてくる
とりあえず、そっちに行く

「どうしたの？」

さっきまでの威圧感はなく、そこに居たのはいつもの紳士的な、人
懐っこいシャルルだった

「いやあ・・・指導を願った人が帰っちゃってな・・・」

「ふうん。・・・じゃあ僕が指導してあげようか？」

「え？でも、俺いつかい・・・」

一回断ってる以上、なかなか頼みづらい

「いいのいいの。ね？」

「お、おう・・・」

なかなかこのスマイルで振り向かれると、断りにくい
なんというか、なんだろう？どこかで感じたこの感覚。・・・なん
だ？

「では、一夏さんの指導はわたくしが行いますわ！」

「ええっ!？」

「当たり前でしょ!？私たちの言ってたことほとんど分かってなか
ったじゃない！」

「い、いや、俺は・・・」

「もういちど、基礎からみっちりたたきこんでやろう」

そういつて、向こうに連れて行かれてしまった

「さすがはコーチ三人組。頼もしいな」

『人ごとみたいに言ってる良いの?』

「実際人ごとだもん」

シャルルに向き直る

「ところでシャルル。銃撃戦についてだな・・・」

「うん。いいよ。じゃあちよつと戦ってみようか？」
「おう、頼むわ」

で、戦闘終了

「・・・えつとね、薫。センサーリンクできてる？」

高機動状態による射撃のため、ハイパーセンサーとの連携は必須となる

それを行うのがセンサーリンク

ターゲットサイト他、射撃を行うのに必要な情報を送るために、武器とハイパーセンサーを接続するのだ

「おう。もちろんだ。だが当たらないんだ」

「狙いがすごく甘いからだよ。銃弾は外しても牽制にはなるけど、無駄撃ちとはまた違うからね」

「むう・・・」

動きながらの射撃は、セシリアとの間をつめるために乱射していたつきり

侵入者騒動の時も、足を止めて撃ってたし

なるほど、経験が圧倒的に不足している

「じゃあ止まって撃つ練習からしてみようか。落ちついて、しっかり狙いを定めて・・・」

「おう」

遠めに出た的に、フルメンを構える
しっかりと照準と的とを重ね、引き金を引く

放たれた光は、真っ直ぐに的に飛んでいき、貫く

「うん。いい感じ。じゃあ今度は連続で撃ってみようか」

現れる複数の的
そういえば俺ってこんな感じの早撃ちはしたことなかったな

「けどさあ、戦ってるときに足止めて撃ってたら格好の的だろ？」

狙いをつけながら、シャルルに問う

「それはそうなんだけど、動きながら撃つにはまず足を止めて、しっかり狙いをつけられるようにならないとね」

「それもそうか。・・・よし」

狙いをつけ、照準を合わせ、五回連続で引き金を引く
発射された五つの光は、それぞれの標的に向かって真っ直ぐ飛んでいき、的を貫く

「お疲れ様。ビット戦術に関しては僕は分からないから、今度セシリアに聞いてね」

「おう。でもセシリアかあ。最近は一夏にお熱だからなあ・・・」
「あはは・・・」

ボーデヴィツヒの指導は的確だがスパルタン。シャルルの指導は的確でやさしい

なるほど、シャルルがいれば一夏は大丈夫だな

あとは、俺がボーデヴィツヒの指導についていけるかだけだな

ラウラの訓練 シャルルの指導（後書き）

という訳で、20話でした

気がつけばPVが5万超えていました
ユニークは7千超えてでした

高いのかどうかはよく分かりませんが、多くの人に読んでもらっているようで、私の中では感激と、ちょっとした緊張が同居しています
拙速であること以外特徴のないこの物語ですが、これからよろしくお願いします

違和感

しばらく、シャルルから射撃指南を受けたあと、時間も時間だったので今日は終了することにした

「お疲れ」

「お疲れ様。・・・それじゃ、先に着替えて戻ってて」

そういえばシャルルって俺たちと着替えをしたがらないよな

ISスーツに着替える時も、着込んでいるか知らぬ間に俺たちよりも先に行って着替えてたりとか

「なあシャルル。たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれない事言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏はボクと着替えたいの？」

「というかどうしてシャルルは俺たちと着替えたがらないんだ？」

・・・質問を質問で返すのはマナー違反だろ。一夏

「どうしてって・・・その・・・恥ずかしいから」

「大丈夫。慣れるって。さあ、一緒に着替えようぜ」

「・・・なるほど。お前は嫌がる男子の裸を見ていたい、とんだ変態だったのか」

「い、いや、そうじゃなくてだな・・・」

「そうじゃない？だったら、他人に見せたくないなにかを無理矢理、見て愉悦に浸る変態か！」

「!!--」

「あ——」

むんずっ

「はいはい、アンタはさつさと着替えに行きなさい。引き際を知らないやつは友達なくすわよ」

「鈴、やめて。鈴。・・・シャルル、無理強いしてゴメン」

「あ・・・うん」

鈴に首根っこ掴まれて、更衣室の方に運ばれる

小学校の担任がウサギに同じ事やってたな・・・

「こ、コホン！・・・どうしても誰かと着替えたいのでしたら、仕方ありません。私がいつしよに——」

「篠ノ之。その淑女をへんたいをさつさと連れていってくれないか？」

「分かっている。ほらセシリア、こっちも着替えに行くぞ」

「ちょ、わたくしはまだ何も——」

むんずっ

「ほ、箒さん！首根っこをつかむのはやめ——わ、わかりました！すぐ行きましょう！ええ、ちゃんと女子更衣室に行きますから！放してください！」

・・・幼馴染、強いな

ISスーツからの着替えが終わり、軽くシャワーを浴びてから、寮に戻る

待っていたのは

「遅い！」

何だか不機嫌なルームメイト、ラウラだった

「いや、遅いって言われても・・・」

「まあこちらとしては好都合だったんだがな」

えー・・・じゃあなんでなったんだよ

「さて、お前がゆっくりしている間に、今日の戦闘を振り返っていた。で、これがお前の動きだ」

「おお。凄いな」

そう言っつて、部屋のテレビに出てきたのは、今日の訓練中のものだった

一通り見たあと、再びラウラが口を開く

「一番最初の砲撃の時点で、お前は私に主導権を取られていた。・・・分かるな？」

「おう」

「ただ、私の動きの中にも、いくらか形勢を変えられるだけの隙があった」

「ここや、ここだ」

そういつて戦闘の映像をシーンごとに分ける

二度目の砲撃のとき、トリックスターの処理に回った時

いずれも、ワイヤーによる攻撃の手が若干緩んでいるタイミングだ

「このタイミングの射撃であれば、私のワイヤー攻撃を中断させ、ある程度ながら形勢逆転が図れただろう。では、何故この時射撃ができなかった？」

「・・・射撃ができる姿勢じゃなかったから」

「何故だ？」

その時点でワイヤーを回避している自分を見ている
砲撃の時なんて、直撃してるぞ・・・

「・・・動きの無駄が多いから？」

「そうだ。お前の動きは大袈裟すぎるのだ。回避で必要以上に姿勢を崩しているから、ほんの一瞬の隙を逃してしまう」

「・・・」

なるほどなあ・・・

「その隙を無くすのはどうしたらいいんだ？」

・・・ふいつ

「雛鳥のように答えを待つだけでなく、自分で考えることも大切だ」

「なんで目をそらす！？ まさか、お前もわからないのか？」

「私は分かっている。私が教えるのは簡単だが、それではお前の力とはならないだろ」

キッとこちらを睨みつけるボーデヴィツヒ

あー・・・なるほど、そういうことか

たしかに、考えるからこそ確実な力となる訳だもんな

「うーん・・・じゃあここの回避は・・・」

コンコン

「柳瀬君はいますかー？いま、入っていいですか？」

「はい・・・あ、山田先生」

ドアを開けると、いたのは山田先生だった

「えーと、そんなに大したことじゃないんですけど・・・大浴場が今月下旬から使えます」

「了解です。忘れないようにしておきます」

俺たちが大浴場を使える時間を作るのは結構前・・・というか、入学当初から計画されていたのだ

だがまあ、案の定というか、女子からの反発がすごかったために今の今まで決まらずにいたのだ

俺たちの時間を女子の後にしたもんなら、『男子が後に入る風呂をどう使えばいいんですか！？』という反対意見

で、女子の前に俺たちを入れたら、倍近い数で『男子が入った風呂をどう使えばいいんですか！？』という猛反対

たしかにちぎれた毛とかが浮いてる風呂に入るのって嫌だろうな
少なくとも、そういうのが浮いていると俺はどう対処していいか困るが・・・

「あ、そういえば織斑君が渡したいものがあるって言ってましたよ？急ぎではないようですが、なるべく早めに言ってあげてくださいね」

「ういっす。ではでは」

ボタンと言つて、ドアが閉まる

「・・・」

「んじゃあ、取り合えず取りに・・・」

「ダメだ」

「え」

「『織斑一夏と一切かわるな』という条件を忘れたのか？」

むう・・・

一夏の名前を聞いただけで、ラウラの放つ空気がさらに冷たいものになる

・・・あ

「じゃあ、ちよつと出るわ」

「・・・どこへ行く」

「シャルルんどこ。メシついでに《無駄のない動き》のヒントを聞きにな」

「・・・なら仕方ない。但し、それ以上のことはするな」

ボタン

薫がシャルルと夕食に行く為、部屋を出る

それにラウラは安堵の息つく

（・・・教官となった手前、安易に分からないなど言えないからなだが、どうせなら・・・）

どうせなら、一緒に夕食を食べながら考えるでもよかったか？

（まあいい。とりあえず、もう食事を摂って寝てしまおう。さて、今日は何を食べようか・・・）

学食は、今のところルームメイトであり弟子である薫以外、誰とも絡まないラウラのささやかな楽しみとなっている

正直最初はどうでもいいと思っていたのだが、これがなかなかにうまい

最近のラウラがハマっているのは日本食。朝食は、白いご飯に味噌汁に海苔にたまご、時々焼き鮭という具合だ

（・・・では、行くか）

ボタン

『・・・マスターも変なことするよね』

「なにがだ？ 実際俺はシャルルにヒントをもらいに行くだけだぞ？ 一夏からものをもらうのはついでだ。ついで」

『ボク、一夏君についてなんて一言も言っていないよ？ それにラウラちゃんにはいってなかったよね？』

「おっと、伝えるのを忘れてしまった。いやあ、これは失敗失敗」
「・・・ラウラちゃんが見抜けてなかった訳ないと思うけどなあ。
ボクは」

まあ、そんなときはそんな時だ。俺としては何を渡されるか分からなければ夜も眠れん

「ところでよ、アル」

「なに？」

「お前さ、シャルルになんかミヨーな《違和感》感じないか？」

「違和感って何？」

「いや、男なのに男じゃないっていうか、なんつーのかな、なんか変な違いを感じるんだ」

「カルチャーショックとかいうやつじゃないの？・・・それよりも、ボクはラウラちゃんのシユバルツェア・レーゲンのほうに違和感を感じたな」

は？

「具体的はどういう？」

「なんていうかさ、何かを隠してる気がするんだよ。とてつもない力の《何か》を」

「・・・まじ？」

「うん、最初見た時、ISを二機待機させているんじゃないかって思ったぐらいだから、相当デカイ《何か》だよ」

そんなにデカイのかよ

あいつは、そんな力持つてるなんて素振りも見せなかったが・・・

そんな話をしているうちに、シャルルの部屋につく

鍵は空いていた

「シャルルルー。メシ行こうぜー」

ガチャッ

ルームメイトの一夏含め、全員男子なのだ。別に見られて困るような・・・

「・・・あ」

「・・・え？」

俺は、その自分の迂闊な行動を悔むことになる
・・・だって、一夏が・・・あの一夏が・・・

《女》を連れ込んでたんだから

違和感（後書き）

という訳で、次回はシャルのカミングアウトなお話です

シャルル・デュノアの秘密

「・・・え？」

ドアを開けたまま、呆然と立ち尽くしてしまう
あの・・・一夏が・・・鈍感な一夏が・・・

「と、とりあえず上げれ。見られると色々まずいから」
「お、おう・・・」

取り合えず、どう表現していいかわからない場違い感を感じつつ、
シャルルの部屋に上がる

「え・・・で、でもさ・・・ルームメイトが女子ならともかく、自分から女連れ込むのってまずいんじゃないのか・・・？」
「いや、非常に言いにくいんだが・・・」

そこで一度切り、その女子の方を見る
その子とアイコンタクトを取り、結局は話すことにしたようだった

「・・・シャルルだよ。この子は」
「・・・は？」

ウソだろ？
だって・・・シャルルは女っぱいけど、男だったし
目の前の人物を見ている

シャルルの特徴たる金髪碧眼。その女子も金髪碧眼

だが、体のラインが男でないことを訴えている

いや・・・似てるけど。たしかに似てるけどシャルルは・・・

『・・・虹彩データ一致。間違いなくあの子はシャルルくんだよ。・

・・・いや、シャルルちゃん？』

・・・おまえ、そんな記録まで取ってたのかよ

「でもなんで・・・」

「・・・それを、今から話そうと思ってたんだよ。よかつたら、薫も聞いてくれないかな？」

酷く弱々しい声でそう喋りだすシャルル

その声には、いつもの紳士的な気品は無く、虚脱感っていうんだろ
うか。とにかく諦めの色しか感じなかった

一夏のベットを椅子代わりに、シャルルの話を聞く

「じゃあ改めて訊くが・・・なんで男のフリなんてしていたんだ？」

一夏が訊く。俺は、じっとシャルルを見る

「それは、その・・・実家にそうしろって言われて」

「実家？シャルルの実家って何かやってんのか？」

「うん。デュノア社の社長。それで、その人直接の命令で・・・」

・・・親の話をしだしてから急にシャルルの顔が曇りだした

どうも、ただの社長令嬢ってワケじゃないらしい。

「命令って・・・親だろう？　なんでそんなー」

「僕はね、一夏、薫。愛人の子なんだよ」

「――」

一夏は絶句してしまっている

愛人の子。その意味が分からないほど、俺は純情でも世間に疎くもないつもりだ

『それって、何か問題あるの？』

・・・アルはそうではないらしい

まずキミは愛人という言葉の意味を理解しよう。問題説明はそれからだ

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんがなくなった時にね、父の部下がやってきたの。それで色々検査していくうちに、ＩＳ適性が高いことが分かって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルの顔がどんどん曇っていく。そして、乾いてゆく

俺と一夏は目配せし、話をしっかり聞くことに専念することにした

「父にあったのは二回くらい。会話は数回かな？　普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは酷かったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘がつ！』てね・・・」

あははと愛想笑いをするシャルルだったが、その声は乾いていて全然笑っていなかったし、何より俺が愛想笑いを返す気にもならな

った

話を聞きたびに、心が冷えてゆく腕を組んで、また話を聞く

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥った」

「え？だってデュノア社って量産機ISの世界シェア3位だろ？」

「・・・一夏。リヴァイヴは最後発の第二世代だぞ。第三世代の開発が始まっている今の状況じゃ買い手なんざつかんだろっ」

公式な(・・・)ISは、コアの絶対数の関係上、世界に467機しか存在できない。

つまり新型ISを作ろうと思ったら、既存のISのフレームを破棄するしかない

第三世代の開発が始まっている現状で、第二世代の量産機に超貴重なコアを割く国があるとは思えない。ラファールではもう頭打ちなのだ

「薫のいうとおり。それにISはね、開発に凄くお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国の支援によって何とか成り立っているところばかりだよ。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画、『イグニッションプラン』からも除名されているからね」

「第三世代の開発は急務、ってか？」

「そうだよ。資本金で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨な事になるんだよ」

・・・アル、イグニッションプランについて詳しく知ってるか？

『もちろんだよ。簡単にいうと、ヨーロッパの国々が共同で、プラン内の国の防衛にあたらうってものだね。今は次期主力の選定中らしいよ？イギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型がトライアル中で、イギリスが実用化で一歩リ

ドしてる』

・・・お前の勤勉さには脱帽だよ

『伊達にコアネットワークとインターネット使ってないよ。便利だよね』

いつ接続してるのかはこの際置いておいて。イギリス、ドイツっていうことは、セシリアとボーデヴィツヒが来たのはその辺の事情だろうな。今はどうでもいいが

「話を戻すね。それでデユノア社も第三世代型の開発をしていたんだけど、もともと遅れに遅れての第二世代開発だからね。データも時間も圧倒的に足りなくて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府から予算をカットされて、次のトライアルに選ばれなければ援助は打ち切り。ＩＳ開発許可も剥奪っていう流れになったんだよ」

「何となく話は分かったが、それがどうして男装につながるんだ？」
「簡単だよ。注目を集めるための広告塔。それに――」

苛立ちを孕んだその声で、シャルルはつづけた

「――それに、同じ男子なら日本で発生した特異ケースとの接触もしやすい。可能であれば、本人たちのデータもとれるだろう・・・ってね」

「それってつまり――」

「白式とアルカナのデータを盗ってこい。って言われている訳だな。・・・お前の親父さんに」

黙ってうなずくシャルル

やっぱり、全てのことを諦めたような顔しかしていなかった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ISの適性があるなら、使おう。それぐらいにしか考えてないなんて、親父なのに随分希薄だと思う

スパイを送るにしたって女で送ったほうが、発覚した時にも色々と波風も立たないだろうに、男装での強行作戦

それだけ経営が切羽詰まっていたのか。それともシャルルなんてどうなってもいいとも思っているのか

そこは社長のみぞ知るところだが、聞いてて俺は悲しくなった

『家族の愛情』

当たり前のものだと思っていた

そういう当たり前のものも与えられないものなのか

意味を分かっているつもりだった、『愛人の子』という意味を、家族とは当たり前のものではないということを、思い知らされた気がした

「ああ、何だか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、ウソついててごめんね」

「お前はどうなるんだよ？フランスに帰ったとしてもタダじゃすまないだろ？」

「・・・たぶん独房の中じゃないかな？デュノア社もこのままの体系で経営していけるとは思わないけど、僕にとってはどうでもいいことかな？」

一夏は相当怒っている

うまく隠しているつもりなのかもしれないが、シャルルに見えない位置でにぎりしめた拳が震えている

「・・・なるほど。で、お前はどうしたかったんだ？」
「え？」

「お前が今やっていることは『言われた事だから仕方なくやっている』ってだけだろ？俺が聞きたいのは、お前自身はどうしたいんだってこと」

言われたからやる。それが楽しいなら結構だろう
だが、どうして楽しくもない事をやれるんだ？

「どうするって言われたって、僕に選ぶ権利なんて・・・」
「あるに――」

「あるに決まってるだろ！親がなんだ！親が子供の自由を奪う権利があるか？そんなのおかしいだろ！」

「い、一夏？」

シャルルは怯えたような、戸惑っているような表情をしている
しかし、心の堰を壊して流れ出る感情は止まらない

「たしかに親がいなけりゃ子は生まれない。だけど、だからって、親が子供に何しても良いなんて、そんなバカな事があるか！生き方を選ぶ権利は誰にでもあるはずだ！親に指図されるもんじゃない！」

「・・・気は済んだか？」

「い、一夏。なんか変だよ？どうしたの」

「あ、ああ悪い。・・・つい熱くなって」

「いいけど・・・ホントにどうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は、親に捨てられたから」

「あ・・・」

・・・よくある当たり前の親子関係を持っていない奴らばかりなの

か？一年の専用機持ちって

ふと、そんなツツコミが生まれるが、心にしまう

あれだろう。世界を変えてしまったほどの強い力を得たことによる代償なんだろうな。アニメ的に考えれば

「その、ゴメン」

「別にいいさ。今更会いたいとも思わないし」

ホントにそう思っているようだな

さっきのシャルルみたいに、実の親を他人としか思っていないような、淡々としたものだった

「まあ、一夏の身の上はともかく「ともかくってなんだ」、シャルルの今後だ」

「・・・多分、時間の問題だね。発覚すればフランス政府だって黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて・・・」

「そうじゃなくてだな。スパイ活動していたとなれば、学園生活での風当たりも悪いだろう」

「え？」

「いや、だから学園生活が・・・」

「僕はまだここに居るの？」

・・・あれ？

「・・・一夏、特記事項覚えてる？」

「！！　そうか！特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は許可されない！　これ使えるんじゃないか！？シャルルはここに居ていいんだよ！」

早い話IS学園は、多国籍学園ではなく、無国籍学園でした。そういうこと

だからこそ完全に各国の法とは無縁な無法地帯・・・という又何だかモラルのない場所のようだが、法は校則という形でちゃんとあるし、条約でも決まってる

「つまりこの学園に居る三年間は大丈夫。問題は三年のうちに、たった三人で問題解決の糸口を見つけられるかどうかということ。それに、学園内におけるシャルルの風評だな」

「一夏、薰」

「ん？」

「よく覚えられたね、特記事項って五十五個もあるのに」

「・・・勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね、ふふっ」

やっと、この部屋に来てからシャルルが笑った

屈託のない笑顔は、相変わらずまぶしい

『でもさ、三年は大丈夫っていても、結局はただの先送りでしょ？ たった三人で、フランス国家を相手にして大丈夫なのかな？』

三年という期間は長いようで短いからな。・・・結局、どうにもならないまま頭を抱えることになるかもな

『・・・根本的な解決になってないよね？』

少なくとも、今はシャルルに笑顔が戻ったことでこの場を善しとするしかないな

『・・・なんだかなあ。あ！ デュノア社を潰しちゃうっていうのは？ そうすればシャルル・デュノアという人間は・・・』

・・・代表候補生になってんだから、そこだけじゃ無理だろ。代表候補生のデータは、政府だって記録してる。改ざんしようとしてもどうやってアクセスするんだ？

『・・・むーん。難しい』

そういうもんだよ

「時に一夏、俺に渡したいものがあるって聞いていたのだが」

「ん？ああ・・・コレ」

「《死神の断罪5》・・・ああ、忘れてたやつね。サンキユ。じゃあな」

「おう」

さて、ちょっと遅くなっちまったが部屋に・・・

ぐ

・・・うん、学食によってからだな

シャルル・デュノアの秘密（後書き）

という訳で、シャルルは男の子ではなかった。という回でした

今更ながら、中古でバイハ4を買いました

ひよっとしたらソレをネタ元になったりするかもしれません

値段にガッツの入ったアレとか、盾になったり刃になったりするアレとか、鉄骨だろうとお構いなしに刺さる便利なアレとか・・・

アレとかソレとか、ボケが始まってるもかも（汗）

相変わらず駄文ですが、皆様方の感想やご要望、ご指摘などでよりよいものに出ればと考えております

ブルーデイズ

さて、先の件より少し経った頃

一夏は学食での食事を終え、シャルルに食事を持ってくる

「え、えつとね、一夏が食べさせて・・・」

「え？」

「甘えても良いって言ったから・・・」

上目遣いの涙目でそう懇願するシャルル

こうかはばつぐんだ！！

「よし・・・男に二言は無い。はいあーん」

「あーん・・・」

・・・この光景をある三人組が見たら、一夏はトマトケチャップだ
つただろう。或いは潰れたザクロか、トマト

「・・・次は和え物がいいな」

「はいあーん」

「あーん・・・」

シャルルと一夏がそんな時間を過ごしていた頃
暗い闇の中に、それはいた

「・・・」

いつごろかこうなのかは知らない。ただ、生まれたころから彼女は闇の暗さを知っていた

人は、生まれた時に光を見るというが、この少女は違う。影より生まれ、闇の中で育まれた

ラウラ・ボーデヴィツヒ

それが自分の名前だと知っているが、その名前に意味がないことも知っている

ただ、例外がある。教官——織斑千冬だ
彼女に呼ばれるときだけは、その響が特別な意味を持っている気がする、心にわずかな高揚を覚える

彼女のとの出会いは一条の光のようだった
出会ったその時、その強さに恐怖し、感動し、そして——歓喜した
それと同時に強く願ったことが、一つだけある

これになりたい
この人のようにありたい

唯一自分を重ねてみたいと思った存在
だからこそ、その存在に汚点を残した弟、織斑一夏が許せない

（私の手で、完膚なきまでに叩きのめしてやる・・・）

紅の瞳が鈍く、暗い輝きを放つ
心には、真っ黒な雨が降っていた

ガチャ

「怖っ。何があっただよ」

「・・・別に、なんでもない」

「そういう顔ばかりしていると、老けるぞ？」

「うるさい」

・・・どうしてこうなったのだろうか

篠ノ之箒は一人、剣道場で頭を抱えていた

《学年別トーナメントの優勝者は、織斑一夏と交際できる。》

最近、一年女子の間でそんな噂がまことしやかにささやかれていた

―本当は、私と一夏だけの約束だったはずなのに・・・どうして、
どうしてこうなったのだろうか

一夏が言いふらす訳がないので、どこからか情報が漏れたのだと思う。
たしかにあのときは声も大きかったし・・・

ただどあくまで箒と一夏だけの約束だったはずだし、二人の秘密と
いうことで安心していた

―あ・・・あの時はたしか柳瀬の奴が・・・

いや、あれは言いふらすたちではない・・・よな？

―いや、人を疑っていても仕方がない。とにかく優勝すればいいの

だ！

雄たけびを上げ気合を入れ、箒は木刀を振るう

―とにかく優勝！優勝すれば・・・

そこで、箒は過去の事を思い出す

前にも一夏とこの約束をしたことがあるのだ

その時は剣道の全国大会。小学生の部というくりだったため、上級生も参加していた

ただその中でも優勝候補と呼ばれたぐらい、箒は強かったのだ
だけど、箒がその大会に出ることは無かった。当日に引越、不戦敗となったのは、実姉である束のせいである

その性能の高さゆえに発表段階から兵器への転用が危ぶまれたIS政府の要人保護プログラムにより、篠ノ一家は住居移転を余儀なくされたのだ

しかも、一夏からの手紙にも『第三者に居場所が割れるのは困る』
といわれ返せない始末

そうして気がつけば一家離散。束は消息不明で、残された箒は毎日
のように束の居場所を尋問される

そんな拘束された日々が続けば人間荒んでいくもの

―誰かを叩きのめしたい

その時の箒の頭の中にはそれしかなかった

一夏とのただ一つのつながりに思えて、続けていた剣道。やはりと

いうか、必然だろう。中学に上がっても全国大会で優勝できるほどのレベルだった

しかし、その優勝は他の者がどう思おうと、箒自身にとってあまり喜ばしいものでは無かった

太刀筋とは己を映す鏡といわれている

そしてその鏡に映った、醜悪な自分をつきつけられた。自己嫌悪に陥り、惨めな気持ちにしかなかった

さらにそれに拍車をかけたのは、自分に負けて涙する決勝の相手だった

強さとは暴力に非ず。強さとは、そういう力を指すのではない
箒はそれを分かっていた。分かっていたつもりだった

—もう一度、私は強さを見誤らずに勝てるのだろうか・・・

気がつけば、木刀を振るう腕は止まっていた

次の日の日の休み時間

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ・・・。私には、私の役目があるのだ」

「このような極東の地でなんの役割があるというのですか！」

私は、教官に訊く

いや、訊くというよりは自分の考えを、不満を、思いの丈をぶつけ

ているだけなのかもしれない

「お願いします。教官。再び我がドイツでのご指導を。ここは、あなたの能力は半分も生かされません」

―私に、その力を見せて欲しい

「ほう？」

「だいたい、この学園の生徒など、教官が教えるに値する人間ではありません」

―もっと、もっと

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。そのような者たちに、教官が時間を割かれるなど・・・」

その力だけが、私の求める―

「――そこまでしておけよ、小娘」

「・・・っ！」

私の中を、何かが駆け巡る

恐ろしく冷たい、何か

それが恐怖だと分かるには、なぜか少しだけ時間がかかった

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

動揺が、口に出る

言葉をつなぎたいのに、何も言葉が出てこない
教官との繋がりを切らないために、何を言えいいのか、まるで分らないのだ

「・・・さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ」
「・・・」

いつもの教官に戻ったようだが、私には締め付けられたような感覚が残った

「そういえば」

思い出したかのように、教官が言葉を紡ぐ

「おまえ、柳瀬を弟子に取ったそうだな」

「・・・何故、それを知っているのですか？」

「どうでもいいだろう？そんなことは。私のマネ事するのは結構。だが、今のお前に人を導くことができるのか？」

「・・・導いてみせます。必ず！」

そういつて、私は教室へと戻った

やりとげてみせる。そうすれば、教官はきっと私を――

「・・・さて、その男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」
「な、なんでそうなるんだよ！千冬姉――」

スッパーン

「ここでは織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

やはり、今のところ織斑千冬に敵う者はいないのだろう
一旅を始めたばかりの勇者（Lv1）の目の前に、魔王がいきなり
現れて寄って斬ってくるような、そんな感じなのだろう

「それよりも、薫がラウラの弟子って・・・」

「なんだ？本人から聞いてないのか？奴の転校初日にはすでに条件
付きながら指導の依頼に成功したと言ってたが？」

「・・・最近の薫、俺とあまり話さないから」

抹茶カフェの話もさることながら最近の薫は

『薫、ここわかんないんだけど・・・』

『わりい。俺これから特訓。セシリアにでも聞いてみれば？』

『薫、今度の日曜さ、シャルルと・・・』

『わりい。その日予定がある』

『かお・・・』

『わりい。俺もう帰るわ』

とまあこんな感じで、あからさまに一夏との会話を避けているので
ある

最近薫から話しかけて来たのは、シャルルの性別がバレたとき、部
屋に入ったついでにDVDを返した時ぐらいなものだ

「・・・なるほど。師に忠実か」

小さな声、誰も聞きとれなさそうな声で、千冬はつぶやいた

「ん？なんか言った？」

「こつちの話だ。そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のト
ーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかつてるって・・・」

「そうか、ならいい」

今の千冬は、学園の先生ではなく、一夏の姉として戒めたようだった

「それと、織斑」

「なんですか？」

「廊下を走るなどと言わん。せめてバレないように走れ。薫のよう
にな」

ちなみに薫は用を足しいに行くときは忍者走りだ。速度があるのに
足音が立たない

足音が立たないから、先生は誰かが走っている事すら気がつかない

「了解」

そのまま一夏は、廊下をバレないようにダッシュした

レッドスイッチ

「「あ」」

二人揃って間の抜けた声を出す

時間は放課後、場所は第三アリーナ。人物は、鈴とセシリアだった

「奇遇ね。あたしはこれから月末のトーナメントに向けて特訓するの」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

先に話した、『優勝したら以下略』の話

当然ながらこの二人も耳に挟んでいるのだ

狙うはどちらも優勝。火花が見える

「ちょうどいい機会だし、前の実習の時のことも含めてどちらが上かはつきりさせようじゃない」

「あら、珍しく意見がありましたね。この場でどちらの方がより強く、より優雅であるか、この場ではつきりさせましょうではありませんか」

お互いにメインウェポンを取り出し、戦闘態勢に入る

「では――」

そこでISの警告が鳴り響く
アラート

声を遮り、音速の砲弾が飛来する

「「!?!」」

緊急回避の後、セシリアと鈴は砲弾が飛んできた方を見る
そこには、あの漆黒のISがたたずんでいた

機体名『シュバルツエア・レーゲン』登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの顔には、欧州連合のISトライアルの相手以上のものが
含まれていた

「どういづつも、いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルーティーズ』か。……ふん、データでみた時の方がまだ強そうではあったな」

その言葉に、セシリアと鈴はカチンとくる

「何？ やるの？ わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぶりね。それともジャガイモの農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方は言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですね。犬だってワンと鳴きますのに」

ラウラの見下したような目つきに並々ならぬ怒りを覚えた二人は、
そのはけ口を何とか探そうとする

しかし、それも無駄だった

「はっ……。二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。余程の人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけを取り柄の国はな」

ブチっ―

何かが切れる音がして、二人とも装備の最終安全装置を外す

「分かったわよ。スクラップがお望みなのね―セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですね。わたくしはどちらでもいいのですが―」

そこでラウラにプライベート通信が入る

『えーと、ボーデヴィツヒさん……。何事？』

ラウラがピットの方を見れば、そこには薫がいた
そう、今日は第三アリーナでの特訓だったのだ

「……。ちょうどいいな。柳瀬、今日は二対二の模擬戦だ」

『はいっ？』

「私の邪魔はするなよ」

『え、ちょ……。』

回線を一方的に切り、ラウラは二人に向けてさらに挑発する

「ちょうどツレが来たから、二人でかかってきたらどうだ？くだらん種馬を取り合うメスに、私が負けるものか」

薫はただの数合わせ。いてもいなくても同じらしい

「——今何て言った？私には『どうぞ好きなだけ殴ってください』
としか聞こえなかったんだけど」

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生
として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けないようにし
てあげましょう」

獲物を持ち、完全に戦闘態勢に入った二人を見て、ラウラは手を広
げ自分の方に向けて振る

「とつととこい」

「「上等！」「」

「えーと、ド—ユー状況？」

『どうみても、セシリアちゃんと鈴ちゃんと戦えってことみたいだ
ね』

・・・あ！セシリアたちは特訓のお手伝いか！？

「薫さん！？じゃあツレって・・・」

「柳瀬！？邪魔するならアンタもろともに吹き飛ばすわよ！！」

・・・そんな空気じゃ—

ドオン！

「って、ちょ、いきなり撃ってくんない？」

緊急回避でギリギリかわす。うわ、ちよつかすったぞ

「もろともに吹き飛ばすって言ったでしょ！」

ひでえ・・・

プライベートチャンネルを開く

「ちょ、ボーデヴィツヒ！？何事！？」

『アイツらは模擬戦闘の敵だ。敵は排除。以上』

「はあ！？」

『何度も言わせるな。これは、二対二での模擬戦闘だ。とりあえず、お前は私の邪魔をしなければいい』

そこで回線が切れる

・・・それは二対二ではなく、一対一が二つってことか？

『或いは、二対一と他一じゃないかな？』

なんてこった

そんな、状況判断に時間を割いている間も、凰からの砲撃

『どうするの？向こうは完全にやる気だよ？』

「ええい！やるっきゃないだろ！アル、トリックスターで凰を牽制
！」

『分かったよ！』

トリックスターが飛んでいき、凰を側面から攻撃する

「邪魔くさいわね!」

凰は砲撃でトリックスターを潰そうとする
あ、まずい。絶対潰される

「やっぱ俺が指揮する!」

『うん!』

(かく乱させるだけ・・・攻撃は、最小限に)

チェス盤のイメージ。チェスの駒を適当に動かす
クイーンはどうか、そういうのは完全無視だ

凰は龍砲で潰そうとするも、小さい上に不規則に動いているトリックスターにあてられずにいた

「ああもう!うざったい!ハエみたいね!」

「ちようどいい!対抗戦の時のリベンジだ!」

トリックスターの操作を再びアルに任せ、俺は凰にフルメンの照準を合わせる

(しっかり狙って・・・)

ターゲットサイトが、甲龍と重なる

(いまだ!)

ドン！

「くうっ！やってくれるじゃない！」

右肩のアーマーに命中し、右の衝撃砲を使えなくする

『そういえばマスター、ボクね、試してみたい武器があるんだ』

「とりあえず出してみろ」

『うん。じゃあ・・・《カテナ》！！』

左手の形状が変わり、袖口のようなものが生まれる

「な、なによそれ！」

「さあな。とにかく使ってみるぞ！」

凰に向け、発射のイメージを浮かべる

パン！

小さな炸裂音と一緒に、小さな碇がついた鎖が打ち出される

「ああ、ワイヤーカッターのイメージか」

『うん。まだ実験段階だけどね。腕の振りに合わせて動くよ』

「それなら・・・よいしょっ！」

凰に叩きつけるように、横薙ぎに振る

甲龍の装甲を支点に、ぐるぐると巻きついてゆく

「なによ、こんなもん・・・！」

甲龍のフルパワーで鎖を引きちぎろうとするが、碇がひっかかり、まったく動かない

むしろ無理に力を加えたもんだから、甲龍の装甲がひしゃげていた

「なにこれ！？全然ちぎれない・・・」

「そんじゃもう一発！」

「っ！！」

すぐに凰は砲撃姿勢に入るも、ウェイトの差でビームの着弾の方が早かった

残っていた左肩のアーマーを撃ち抜き、完全に衝撃砲を使えなくする

「あらよっ！」

そのまま、ボーデヴィツヒと戦っていたセシリアに向かって投げつける

「きゃっ！」「なんですの!？」

どうも、ミサイルビットによる攻撃をしようとしていたらしい射線に凰が割り込む形で、セシリアもともに吹き飛んだ

『案外むごいことするね、マスター』

「いや、龍砲^{アレ}には酷い目にあわされたからな・・・」

そこで、プライベートチャンネルが開く

『・・・私の邪魔をするなと言った筈だが?』

「そんなつれない事言つなよ。それより、コレで決着でいいんじゃない

ないか？」

『いや、まだだ、まだ足りない』

「はあ？」

『そこを動くな。いいな』

そういうと、ボーデヴィツヒは吹き飛んだセシリアたちを追撃しにいった

一方で、一夏、シャルル、箒の三名は、特訓のために第三アリーナに向かっている

近づくたびに、何やらあわただしい様子が伝わってくる
さつきから、廊下を走っている生徒も多いようだった

「なんだ？」

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。それにしても様子が・・・」

ドゴオン！

「「「！？」」「」」

いきなりの爆音に、三人そろって視線を向けると、その煙を割くように二つの影が飛び出してくる

「鈴！セシリア！」

二人は苦い顔のまま、爆発の中心へと目を向ける

後を追うようにその煙を切り裂いて、漆黒のIS、シュバルツエア・レーゲンが飛び出してくる

セシリアと鈴は、よく見るとかなりのダメージを受けている

鈴に至っては、肩のアーマが砕けているし、何かを巻かっていたように装甲がひしゃげている

「もう！何すんのよ！」

「あなたが急に――」

声を遮るラウラの猛追

ケンカをしている余裕は無く、鈴は力なく蹴り飛ばされ、セシリアは砲弾の餌食となった

そしてそのまま、ワイヤーブレードで手繰り寄せる
そこから始まるのは、ただただ一方的な《暴虐》

「ああああっ！」

腕に、足に、体に、ラウラの拳がたたきこまれる

ISのシールドエネルギーはあつという間に無くなり、機体維持警
告域を超え、操縦者生命危険域へ到達する
レッドゾーン

これ以上の攻撃でISが強制解除されるようなことがあれば、冗談
抜きで二人の生命にかかわってくる

だが、ラウラは攻撃の手を緩めない。淡々と、ただ殴り続ける

無表情が、たしかな愉悦に口元を歪めた
それを見た時、動いたものが二人いた

「おおおっ！」

「いい加減にしろ」

一夏と、薫だった

アイツの表情が、ゆがんだ物に変わったのが見えた時、俺はその光景を見ていられなくなつた

「いい加減にしろ」

俺はセシリアと凰を縛るワイヤーを、手に出したグラディウスで切り裂く

「なっ！？柳瀬！？ 貴様も・・・その手を離せええっ！」くっ！

激昂した一夏がエネルギー消費を無視してラウラへと突っ込んでゆく
なぜか一瞬だけ動揺したボーデヴィツヒだったが、一夏の突撃には
冷静だった

「感情的で直線的！絵にかいたような愚図だな！」

手が差し出される

そしてそのまま、一夏は動きを止める。いや、止められたのだろう

『あの時、トリックスターを止めたのと同じもの……？』

「だろうな」

「な、なんだ！？くそっ……体がっ……」

そのまま、小さくなってゆく零落白夜

ここまでの距離を、瞬時加速と零落白夜使いながら突っ切ってきたんだ

エネルギーなんてもう残ってないだろう

「やはり敵ではないな。私とこのシュバルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。——消える」

肩の大型カノンが、一夏へと向く

「……だから、いい加減にしろっていつてるだろうが」

さつき風にやった要領で、カテナをレーゲンの砲身に絡みつけ、無理矢理引き上げる

砲台そのものは動かなかったものの、砲身がひしゃげ、爆発するたぶん、すぐに砲撃するのは無理だろう

そこに入るシャルルからのアサルトライフルによる弾丸の雨

「ちっ……」

さつきの力で受け止められるアサルトライフルの銃弾

その隙に、俺は鎖でボーデヴィツヒの動きを止める

すぐに瞬時加速で間合いから逃れる一夏

……あんまり白式に無茶させんなよ。お前は

「「一夏、二人は？」」

足を止め、三つの銃口でボーデヴィツヒを狙う連射速度は到底シャルルに及ばない。というか、効果あるのかも微妙で、シールドに完全に止められていた

「う・・・、一夏・・・」

「無様なところを・・・お見せしましたわね」

「喋るな。シャルル、薫・・・大丈夫みたいだ。二人とも意識がある」

「そうか。ならいい」「よかった」

射撃の手は止めない

ボーデヴィツヒの頭は冷えないだろうが、とりあえずあの二人を何とかしないと・・・

「面白い！世代差というものを見せつけてやる！」

今まで見えない力で防がれていたシャルルの弾丸

それが届くようになったと思えば、鎖がプラズマ手刀でいともたやすく焼き斬られる

「！？ さっきはあんなに頑丈だったのに・・・」

『・・・衝撃みたいな力には強いけど、熱に弱いみたいだね』

なんだそれ！？

ボーデヴィツヒは姿勢を低くし、突っ込む体制をつくる

「行くぞ・・・」

「くっ！」

「シャルルっ！」

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

そんな声が聞こえたと思ったら、シャルルとボーデヴィツヒの間に何か飛び込んだ

ガギン！

「・・・織斑先生か」「千冬姉！？」

なら納得だ

というか、ISの部分展開一つなしに、IS用の近接ブレード（150センチ超）を軽々と扱ってあの横槍だ

・・・失礼ながら、人かどうかを疑ってしまうレベルの離れ業だと思う

「模擬戦をやるのは構わん。だが、アリーナのバリアーまで破壊するような事態は、教師として黙認しかねる。この戦いは、学年別トーナメントで決着をつけてもらおう」

「教官がそうおっしゃるなら」

「了解ですよ・・・ふう」

ボーデヴィツヒと俺は素直に答え、ISを解く

「織斑、デユノアもそれでいいな？」

「あ、ああ・・・」

「教師の問いには『はい』と答えろ」

「は、はいっ！」

「僕もそれで構いません」

そして、織斑先生はアリーナに居た全生徒に向けていった

「では、学年別トーナメントまでの私闘を一切禁止する！解散！」

ケジメと錯乱（前書き）

この辺から、作者の下手さが如実に表れてきている気がします
気にいらないうでしたら、ブラウザの『戻る』を押してください

ケジメと錯乱

「・・・・・・」

「・・・・・・」

場所は保健室。第三アリーナでの騒ぎから小一時間が経過しているベツトの上では包帯を巻かれたセシリアと凰がむすーっとしてる

まあ、仕方ないか

あんなボロ負けしてたところを一夏にみられてるんだからな

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま戦っていれば、駆っていましたわ」

「・・・それだけ強がり可言えれば、大丈夫だな」

「強がりじゃありません！！（ないわよ！！）」

怒られてしまった

「大体、なんでアンタはアイツの味方だったのよ！」

「そうですね！なんであんな人なんかと・・・」

「あー・・・黙ってたんだっけ？そういえば。俺はボーデヴィツヒから指導してもらってたんだ。ISの」

「えっ！？」「なっ！？」

そんなに驚くことかなあ

「な、なんであんな人の指導を・・・」

「だってお前ら一夏に掛かりきりだったからな。邪魔しない方がいいと思つて。色々な意味で」

「・・・・・・」
「・・・・・・」

何故黙る。そして目をそらすな

「ま、まあ、二人とも怪我が大したこと無くて安心したぜ」

一夏が間を繋ぐように話しかける

「こんなの怪我のうちに入らな―いたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味―いたたっ！」

「ほらほら。大人しくしてねえと長引くぞ」

一夏の表情がちょっとだけ変わる。あれはバカにしてる表情だ

「バカって何よ！バカって！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

「お前って、本当に顔に出る奴だな」

それとも、この二人が敏感なのか
さすがは恋する乙女

「好きな人にかっこ悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」
「ん？」

そついいながらシャルルが入ってきた
手にはウーロン茶と紅茶を持っている
こういう気配りができる辺り、やはり紳士だ。いや、女だから淑女
か？うーん？

「ななな何を言ってるのか全っ然わからないわね！こここれだからヨーロッパ人って困るのよね！」

「べべっ別にわたくしはっ！そういう邪推をされるのはいささか気分を害しますわね！」

・・・素直じゃねえの。まあしょうがないか

今のやり取りでも、一夏は気づいていない。というか、シャルルの言葉が聞き取れていなかったのか、怪訝な表情をしている

「どんだけ都合のいい耳してんだよお前は・・・」

「ん？ 何がだ？」

ウーロン茶と紅茶をひったくるようにして、二人とも受け取っていたそして、ペットボトルを開け、ごくごくと一気に飲みだす

「・・・それより。ごめんな、二人とも」

「ぶはっ。・・・何がですか？」

「ボーデヴィツヒだよ。俺も、もう少し早く止められてたら・・・」

「ぶはっ。・・・別に、アンタが謝るようなことでもないわよね」

「師の暴走は、弟子にも責任はあるさ。・・・それに、この事で恨みとか残してほしくないんだよ」

アイツは今一人だ。多分、今までも

どれぐらい寂しいものなのかは、ただの学生の俺は知らない

だけど、このことで周囲とさらに距離が開いたら、それはアイツのプラスにはなりえない

全てを水に流すのは無理な話かもしれない

『悪いと思ったら素直に謝れ。謝られたら、何があっても赦せ』ウチの家訓だ

別にウチの考えを押し付けたい訳じゃない。だけど、どうか寛容な心を持って赦してほしい

ただのお節介なのは承知の上。俺の自己満足でしかないことも、承知している

だけど、一つのけじめをつけるべきだと思う

頭を下げながら、俺は言葉を続ける

「気が済まないなら、後で俺に怒りをぶつけたって構わない。だから・・・」

「頭を上げてください・・・仕方ありませんね。薫さんに免じて、今日のことは不問にしてさしあげますわ」

「本当か？」

「ええ。相手を赦す心を持つことも、貴族の務めですもの。鈴さんも、それで構いませんわよね？」

「・・・そう言われて、ゆるさないのも子供よね」

「・・・ありがとう」

当然ですわと言いたげな表情のセシリア

そして、それが起こったのは同時ぐらいだった

バアアアン！

保健室のドアが飛ぶ。比喩表現なしで、飛ぶ

そして、綺麗な放物線を描いてドアは床へ軟着陸。窓ガラスが砕けることなし。位置は元あった場所の真正面。距離よし。俺が審査員なら10点だ

なんの競技かは分からないが

「織斑君!!」

「デュノア君!」

なだれ込んでくる女子の群れ

集団は、シャルルと一夏を見つけるとバーゲンセールよろしくわらわらと集まってくる

近くに居た俺も一緒に囲まれる

伸びてくる手手手手手手手

・・・バーゲン品ってこんな恐怖を感じながら売られてゆくのだろうか

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの?皆、ちょ、ちょっと落ちついて・・・」

「コレ!」

女子ズは息巻きながら何かの用紙を見せる

「な、なになに・・・」

「『今月末に行われる学年別トーナメントは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士でくむものとする。締め切りは――』」

「ああ、そこまでいいから!とにかくっ!」

バツ!

規則ただしく、いっせいに一夏とシャルルに伸びてゆく手

アレだな。なんでか少し前のカードであつたよな。手がわらわらで出来て墓地に引きずり込むようなの

Sトリガーなのに、肝心なところで発動しないことが多かったな。ちなみに、俺のところにはなぜか一本もこない。ちよつとホツとしたような、何だか悲しいような、そんな気分の俺がいる

「私と組もう！織斑君！」「私と組んで！デュノア君！」

んー・・・なあ、アル。どう見ても全員一年生だよな

『うん。リボンの色が青いもん。ボクが見た限り、この場に居るのは全員一年生。・・・先手必勝？』

だろうなあ・・・一度、俺の評判を聞いてみたいもんだよ。まったく・・・

『こないだのときと言い、全然いないもんね。柳瀬派』

まあ、ここまで積極的になれるのも怖いけどさ・・・

「え、えつと・・・」

まあ、非常にまずいわな

シャルルは実は女だから、誰かと組む訳にはいかないな

シャルルは困り果てた顔をしているのが見えた

一夏の方を向くが、すぐに目があつて視線をもどす

「・・・悪い、俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

うん。ナイス判断

「じゃあ一夏、後任した」

「え？」

「俺は行くところあるからね。そんじゃ、お邪魔」

はいはい道開けて。ほら、山田先生も入りにくそうに・・・って、
なんでいるんだろう？

彼女は一人だった

一人で食事を摂り、そのまま一人で部屋に戻っていた

(・・・今日は、やりすぎたか)

彼女、ラウラは一人部屋の中で物思いにふけている

(いや。自分の身の程も知らずに私と戦う、弱いアイツらが悪い。
そうだ、弱いのは罪だ)

そう自分に言い聞かせ、正当化。そこで思考の先を変える

(それよりも！なんで、なんであいつが・・・)

ラウラが今日一番驚いたこと

それは、薫が師である自分に銃を向けたこと

(やはりアイツも！アイツもそうなのか！？)

一夏を叩きのめすこと。それは、ラウラにとっては今一番の願い
それを邪魔した薫は、ラウラにとっては裏切りに等しい事をしたのだ

驚いたし、そして——そして、悲しくなった

（アイツだけは！アイツだけは・・・）

自分を裏切ったりしない。そう思っていた
師と弟子という関係ではあったが、ラウラは少なからず薫に気を許
していた

だからこそ、銃を向けられた事に動揺を隠せない

ガッ

そこでドアが開くも、途中で遮られる
チェーンロックが掛けられている

「・・・あの、入れないから、ロック外してくれないか？」
「いやだ。今日は外で寝る」
「・・・そうですか」

そういつて、ルームメイトは扉を閉めた

一夏を倒すことを邪魔したことを怒ればいいのか
だんまりを決めればいいのか

何事もなかったかのように今日の戦闘を振り返ればいいのか

どうすればいいかも、わからなかった

「・・・ふう」

部屋の窓を開ける

初夏の夜の空気は涼しかった

「・・・どんな顔をして、アイツにあえばいいんだ？」

今アイツの顔を見ると、今日の自分が見えてくる

（その瞳には、今日の私はどんなふうに映ったのだろうか・・・）

今まで逆らった事がなかった、距離の近くなっていた薫だからこそ、それを聞くのが一番怖かった

「こんな顔して逢えばいいんじゃないか？」

そういつて、ぬつと上から何かが出てくる

「きゃあっ!」

思わず腰を抜き、その場にへたり込んでしまう

「わざわざ、着地点を開けてくれてどうも。よっと・・・」

ニシシと笑って、それは部屋に飛び込んでくる

・・・薫だった

「キミ、大丈夫ーっ!？」

「大丈夫ですーありがとうございましたー」

そんなやり取りを、上の住人とかわしている
そのやり取りが終わった後、ラウラの口から一言

「お、お前は何をしているんだ!？」

「んー?だって、扉が使えないんじゃない窓から飛びこむしかないだろ?」

「どうしてそんなことが・・・」

「いやあ。アルカナは万能だねえ。待機状態なのに、伸びたり縮んだり。しかも三十人くらいなら問題ない強度と来た」

しゅるんと、薫は鎖を上からおろしてくる

その鎖はそのまま縮み、いつも通り、腰にくつつくウォレットチェーンとなる

「輪のサイズも変わればいいのにねえ。そうすりゃリストバンドみたいにな・・・」

「・・・どうして」

「ん?」

「どうして、私を一人にしない!」

ダン!

気がつけば、ラウラは薫を組み伏していた

「うわっ!?!なに!?!なんですか!?!」

「どうして、どうしてお前はそうなんだ!」

どうして私を一人にしてくれない!

「はあ!?!」

「お前が!お前さえいなければ!」

自分を見失うようなことは無かった!

「どうして！お前はっ！私の価値を！こんなにも！」

憎悪のこもった瞳で、ラウラは薫を睨む

手は次第に首の方にいき、気道と頸動脈をふさぐ

「うつ・・・がはっ・・・お、落ちつけ、と、とにかく俺の上から・・・」

「どうして！何故！お前はっ！」

ラウラは、完全に薫の話を聞いていない

目の前が酸欠と貧血でちかちかしてくる

（そろそろ、やばい・・・）

そう思った時、薫の中の何かがまたはじけた

「い、いい加減に、しろっ・・・」

極力女に暴力をふるいたくは無い薫も、さすがに我慢の限界だ

ドン！

「うつ・・・」

ラウラの腹に膝を入れ、以外にも怯んだ隙に姿勢を逆転させる
そして、待機状態の鎖^{アル}で縛りつける

「このっ！このっ！」

「はぁ．．．。はぁ．．．。暫く大人しくしてろ．．．話が
できる位までは、な」

そう、深呼吸をして脳に空気を送りながら、薫は言った

ケジメと錯乱（後書き）

錯乱している上に、力任せになっている人は、意識外からの攻撃に怯む・・・

素人の薫が、ラウラをひっくり返せたのは、生存本能とか、そういうのも働いたおかげでしょう

現実ではどうなるかわかりませんが、今回はそついうことにしておいてください

以上、醜いイイワケでした

ps .

諸事情により、今回は10月6日分の先行投稿となります
次回は10月8日です

相棒（前書き）

えーと、オリジナル要素を盛り込んだ結果、大変見苦しいものとなっているかと思われます。どうか、ご容赦を

相棒

—ラウラ side—

私は、縛られたまま暴れていたようだっ

どれくらいたつた分らないが、しだいに無駄ということ分かり、
頭の中が冷えてくる

「まあ、これでも飲んで落ちつけ」

その様子を見た薫が拘束を解き、暖かいココアを差し出される
ちびちびと飲みながら、『はあああ・・・』と、ゆっくり息をはく

やはり、ホットココアはいい。身体力が抜ける。程よい甘さ。心
にしみわたるかのような、心地よい暖かさ
よし、今度ココアが飲みたくなったら柳瀬に頼もう

「・・・落ちついたか？」

「ああ。取り乱したりしてすまなかった・・・」

「いいってことよ。どう吐き出したらいいかわからない感情つての
は、誰にでもあるもんな」

俺も親父にそういうの、グーにしてぶつけたなあと、笑いながら返
してくる

首には生々しい手のあとが残っている
それを見ると、後ろめたい気持ちになるが、本人がいいと言ってる
からいいのだと、無理矢理納得させる

「・・・で、どうして私の価値を揺るがすのか？だったか？」

柳瀬が聞いてきた

「・・・柳瀬。少し昔話に付き合ってくれないか？」

「・・・」

返ってきたのは、沈黙

「・・・そうか。なら、私の独り言だと思って流してもらっても構わない」

それを肯定ととらえ、私は喋ることにした
なぜか、喋りたくなったのだ
理由なんてない。あるとすれば、知ってほしい・・・だからだろうか

「私はな、薫。鉄の子宮で、遺伝子強化実験体として生まれ、そのときから軍人だった。戦うためだけに生を授けられ、育まれ、鍛えられていたのだ」

「・・・」

「知っているのは、いかにして人体を攻撃するかの知識。分かっているのは、どうすれば相手に有効な打撃を与えられるかの戦略。それだけだった」

知っている、分かっているというよりは、それしか知らされていない、教えられてこなかった。と言った方が真実だ

「格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得していった。私は、優秀だったのだよ。性能面において、最高のレベルを記録し続けた」

「・・・」

柳瀬はこつちを向かないが、しっかり聞いているのだろう

「それがある時、世界最強の兵器、ISが出たことで一変した。IS適正向上のための処置、『ヴォーダン・オージェ』によってな」
「ヴォーダン・・・？」

ヴォーダン・オージェ

「越境の瞳。擬似ハイパーセンサーとでも呼べるようなものだ。ノマシンの移植により、脳への視覚信号の伝達速度を爆発的な速度向上。それに、超高速戦闘下における動体反射の強化を目的としたものだ。それを施した瞳についてもいえるな」

「・・・なるほど」

いつしか、私の独り言は、会話へと発展していった

「危険性も、不適合も全くなかった——はずだった」

「はずだった？」

「これを見る」

そういつて、私は眼帯を外す

そこから除く瞳は、黄金の輝きを放っている

「・・・金色か。月並みなことばかもしれないが、綺麗な色だな」
「そうか？・・・話を戻すぞ。なぜかは知らないが、私の左目は金色に変色し、常に稼働状態のまま、カットできない制御不能となったのだ」

「・・・ようは、ハイパーセンサーが開きっぱなしと同じか？」
「あくまでも擬似だがな。似たようなものだろう」

思うところがあるのだろうか？少し苦い顔をしている気がする
そして、『大変だよな』とでもいいいたい様な、劳いの目が変わった
だが、構わず続ける

「そして、この事故によって私は、部隊からも、IS訓練において
も、後れをとることになった。そして、トップから落ちた私を待つ
ていたのは、部隊員からの侮蔑、嘲笑。それに、『出来損ない』の
烙印だった」

「・・・」

「ただでさえ、暗い闇の中にいた私は、さらに深いところへと落ち
て行った・・・」

「・・・そこに現れたのが、織斑先生だった、ってか？」

「そうだ。教官は、一筋の光のように現れた。そして、私はその指
導を聞いて、実践してただけで、IS専門へと変化した部隊の中
で、最強の座を取り戻すことができた。それに個別特訓などは一切
なしに、だ」

「・・・お前の勤勉さの勝ちだろうよ」

そういつてもらえると、何だかこそばゆい感じがしてきた

「そして私は、あの人の強さに、恐怖し、感動し、強烈に憧れた。
だからこそ、私もあの人のようになりたいと思っている」

「なるほど。俺への指導も、その一環だったわけか」

「頭がいい弟子は話し易くて良いな。その通りだ。やり方は私のオ
リジナルだがな」

なるほど、どうりでスパルタなわけだ

そう、柳瀬は返してきたが、これからもそのスパルタは続くだろう。
いや、続ける

「だからこそ、織斑一夏が許せない。私にとっての光となった教官
を、不戦敗という汚名で汚した張本人を・・・」

「・・・矛盾、してるなあ・・・」

頭を掻いている柳瀬

小言で何か言ったようだったが、私は何か変な事を言っただろうか？

「その織斑一夏を完膚無きまでに叩き潰すためにも、力がほしかった。
完全に叩きのめせるほどの、強大な力が」

「・・・それで、求めた力は手に入ったのか？」

「手に入りそうだった。だが・・・どうしていいか分からなくなっ
てしまった」

「・・・？」

訊くのが怖い、訊くしかないだろう

「今日の私の戦う姿、お前にはどう映った？」

「・・・見ていられなくなったな、俺は。折角強い力を持つのに、
弱い者いじめのような事にしか使えないお前を、な」

教官の様な、恐怖、歓喜、感動ではなく、憐憫の対象。そういうこ
とだろう

「だろうな。割って入った時のお前の顔は、みていて辛そうだった」

力だけが、私のすべて。力だけが存在意義
なのに、それを持つことに戸惑いを覚えているのだ

これほどおかしいことはないだろう。自分でも、そう思う

打ちのめされた悔しい顔、痛みと恐怖に震える顔を見るのに、優越感と悦楽を感じている自分がいる事は、結構前から知っている
だが、今までで一度も、憎々しい様な視線を飛ばされたことはあっても、今日の様な顔をされたことはなかった

「・・・お前は、それでいいのか？」

「何がだ？」

「一敬愛する教官（織斑先生）から学んだその力、下衆がやるようなことに使って。それでいいのか？」

それを聞いて、さらに靄がかかる

今の私は、自分でもよく分からない・・・

「だからこそ私は、このままでいいのかが分からない・・・」

少しの間の沈黙

だんだん気まずくなってきたところに、柳瀬が喋り出す

「・・・悩むぐらいなら、いつそ進んじまうのはどうだ？」

「え？」

「足を止めてしまえば、思考も腐ってくる。悩んでも仕方ない時だつてあるさ。俺個人としては賛同しがたい目標だけど、『一夏を潰す』っていうのがあるんだろ？」

「ああ。それだけは、お前の賛同など得られなくとも、私の手でやらなければいけないのだ」

そう、私の手でやるからこそ、意味があるのだ

「なら今はそれに向かつて進んでいくしかないんじゃないか？」

「だが、お前は今日のようなことが起これば止めるだろ？」

「もちろん、俺が止める。殴られようが、腕を斬られようが、砲弾喰らおうが止める」

「・・・何がしたい？」

「つまりはだ、弱い者いじめにならない程度であれば、一夏と戦っても良い。そういうこと」

一夏をそれ以上潰すこと自体には、賛同しかねるが、それぐらいならいいだろ？

柳瀬は、そう続けた

「・・・織斑一夏は、お前の友人ではないのか？なぜ、それを潰すのに肯定的になれるんだ？」

「友人だからこそ言える。アイツはただでは負けない」

「何を世迷言を・・・」

「そう聞こえるか？強さの先のものとか、アイツは知ってるよ」

「ふん。・・・強さとは力ではないだろ？」

「うーん。お前にとつてはそうなんだろうけどさ。アイツの言葉を借りるのも癪なんだけど、力っていうのは《目的》でなく《手段》。そういうこつた」

訳が分からないぞ

「いつか分かるって。ああ。それよりさ・・・コレ」

そういつて、ピツと紙を取り出した

どうやら、トーナメントのペア申請書のようなやつだ

「これに、俺と出て欲しいんだ。お前の条件はなんでも飲むから。」

な？」

「フン……。いいだろう。トーナメントで特訓の総仕上げとしよう。……但し、条件がある」

「……なんでしょう？」

師を敬うかのような態度

余裕だな

「本日付で、お前を破門にする」

「えっ」

ピシリと、A I Cを使った訳でもないのに、薫は凍りつく面喰った様だ

「そんな！酷い！総仕上げとか……」

「そのかわり、私の『相棒』となれ……。いいか？」

「！」

今度は鳩が豆鉄砲をくらったように驚いた

「……ああ！もちろん！これからよろしくなっ！ラウラ！」

そういつて、奴は嬉しそうに笑った

「次から次へと……。本当に表情豊かな奴だな」

「？」

今度は、キョトンとした顔をする
つい、笑ってしまう

「ひどいなあ」

そついいながらも、薫は笑っていた

ちよつとした騒動、と言っても生きるか死ぬかの瀬戸際―の後、ラウラが寝たから（布団に入るまでは目をつぶっていた。何度開きそうになったかは知らんが）、俺も寝ようかと思ったその時
もう一人の相棒が話しかけて来た

『よかつたの？あれで？』

「いいんじゃないの？抑えつけ続けて大爆発させるよりはさ」

『・・・一夏くんは、自分の知らない所で巻き込まれてるね』

「対抗戦こないだのツケだと思ってもらうほかないな・・・。それにさ」

『それに？』

「男の友情的であれなんだけど、思いっきり戦ってみて分かることもあるんじゃないかな？」

『ふーん・・・』

相棒（後書き）

という訳で、見事に相棒の座を勝ち取った薰でした

次の更新を予定している、10月10日は、おまけでアイマス短編を一本あげたいと思っています

なんせ、10月10日ですから。トクベツな日ですから・・・

学年別タッグマッチ 第一回戦

「いい加減にしろ!」

「アンタこそ!調子乗ってんじゃないわよ!」

少し古ぼけた広い家

そこにいたのは、中年の男と中年の女

「ふざけんな!調子乗ってんのはおめえだろうが!」

「何よ!」

何をいがみ合っているのか、すごい剣幕で怒鳴りあっている

近くで保育園児くらの小さな女の子が、怒気にあてられたのか、その顔をくしゃくしゃにして泣いている

「けんかはやめてよお・・・」

その近くで俺は、その子をなだめながら、ただ見ているだけだった

「ー起きろ」

「うーん・・・」

「薫、起きろと言っているだろう」

ゴスッ

「ゲフツ……。な、殴ることは無いだろ！殴ることは……」

「もう何度も呼びかけたんだがな。まったく、よく寝ていられるな」
「最近、大分疲れがたまってるからなあ……」

やはり、弟子から相棒に変わったところで、今までと扱いが変わる訳もなく、俺はラウラから指導を受けていた

まあ、やはり軍隊調というか、とにかくスパルタだった。その分的確で、力がついたのが実感できるものだったけど、とにかくスパルタだった

「軟弱者め。もう少し、走りこむなりして体力をつけたらどうだ？」

「……そうすっかなあ。うん、そうするわ」

どれくらい走ればお前に追いつくかはわかんないがな

『一生無理だと思うよ』
ほっとけ

さて、ここはアリーナのピット

俺たちの一回戦は、Aブロックの第一試合

開幕戦だ。どうせなら、景気よく、ドンといきたいよな

モニターを見れば、あふれん間ばかりの大観衆

衆人環視の場で決闘って、何だかコロッセオみたいだな

『コロッセオ？』

たしか、剣奴っていう特別な戦闘教育を施した人を、猛獣や、他の剣奴と戦わせるのを見て楽しむんだよ

『……趣味悪い』

まあ、そういうなって。大衆に見られてる中で争うって意味じゃあ、

スポーツだって似たようなもんだろうし

「それにしても、妙な顔をして寝ていたな」

「どんな顔？」

「ムスツとした顔だった」

そっぴいやどうして、このタイミングで昔の夢を見たんだろう？

『悪いと思ったら素直に謝れ。謝られたら、赦せ』

ウチにそんな家訓ができたのも、そのケンカからだっただと思う

きっかけは覚えてないけど、終わり方は確か・・・

「おい。対戦表がでてきたぞ」

普通なら、前日までには出来あがっているはずの対戦表

しかし、急なペア戦闘への変更のためか、本来の振り分けシステムが機能しなかったらしい

結局、今の今まで生徒が頑張って手作りでくじを作っていた

ちなみに凰とセシリアは、この間のラウラとの一件でISダメージレベルが『C』になっていたらしい

ISは戦闘データやその他のデータを蓄積し、より自らを進化した形態へと移行させる

そして、そのデータは故障時のものも含まれる

何が言いたいかというのだ。その故障時のデータを使った場合、不完全なエネルギーバイパスを作ってしまった、逆に平常時の稼働効率が落ちてしまうのだ

骨折したのを無理に動かすと、筋肉を痛める。それと同じなんだろう

「お、えーと・・・俺らの相手は・・・」

対戦表を見るに、俺たちの対戦相手は・・・

織斑一夏

シャルル・デュノア

「まじか？・・・ラウ「織斑一夏は私がやる。お前は、デュノアの方をやれ」・・・そうですか」

即答だった。早口だった。一秒でも早く叩き潰してやりたいらしい

「作戦は？」

「そんなものはない。あるとすれば、私の邪魔をしないという事だ」

・・・やっぱりか

一夏が絡むと途端にコレだ

まあ、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないが・・・

なら、せめてラウラが戦いやすいように動いてやるしかないな・・・
できのの？俺に

『そついや、ボクたちコンビネーションプレーって深くは習ってないよね』

そついやそつだなあ・・・

ここは女子更衣室

やはり男子三人（正確には二人）がほぼ貸し切り状態で使っているため、自然とここは人口密度が高まる

その中で、篠ノ之箒は一人、眼を閉じてじっとしていた

（・・・むう。初戦で一夏とアイツがぶつかるとは）

精神統一をしているようだったが、心中は穏やかではなかった
ラウラ・ボーデヴィツヒは、転校初日から一夏の頬をひっぱたいているのである

その後もケンカをふっかけてきたりと、何かと一夏を敵視している
しかも、先日鈴とセシリアを半殺しにしたらしい

（殺されはしないだろうか・・・いや、一夏なら問題ない。私が指導したのだ。負けてもらっては困る・・・それよりも）

篠ノ之箒は、もちろん一夏を誘いに行った

だが、その時にはすでにシャルルと組んでいた一夏
当然返答はノー。アテがなくなってしまった箒は、どうするか考えていた

そこに今のパートナーを連れて現れたのが薫だった

その時薫がつれていたのが・・・

「あれー？箒ちゃん？ねちゃだめだよー？」

「・・・」

・・・布仏本音だった

別に不満がない訳ではない、本音はなぜかISの操縦が上手かったのだ

ただ、リズムが合わない。それこそ、生活のリズムが違うような、そんな根本的なレベルで合わない

「箒ちゃん？」

「……」

「……モッピー？」

「その名を言うな！」

「おお。寝ちゃったのかと思ったよー。よかったー」

（はあ……それよりも、柳瀬はあいつに影響されていないだろうか）

箒がラウラ・ボーデヴィツヒに対して感じているもの。それは、近親憎悪

力だけを全てと考えているラウラは、過去の自分の姿を見せつけられているようで気にいらぬ

風の噂によると、柳瀬はそのラウラを師匠にとしたとのこと

そして、箒は友人が多くはない

その中の一人である彼が、昔の自分のように力に溺れてしまうのは、出来れば見たくない

（いや、今はあいつらについて考えないでおこう）

こんなところで一人心配してても仕方ない

一夏とペアになれなかったのであれば、せめて試合を見届けよう
そう思って、箒はモニターを見ているのであった

「一発で当たるって、何の因果かねえ・・・俺ら」

「さあね？でも・・・」

「待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあ何より、こっちも同じ気持ちだ」

「・・・やる気満々だなお前ら」

「当然だ」「当たり前だ」

「・・・」

試合開始まで。あと一五秒。四、三、二、一、——開始

「叩きのめす」「」

奇しくも、一夏とラウラが放った言葉は同じだった

学年別タッグマッチ 第一回戦（後書き）

次から、戦闘シーンです

上達した気がしねえ・・・

アイマスの短編をこそつと上げてみました
とりあえず、告知しておきます

響お誕生日おめでとう

V S 一夏&シャルル

「おおおっ！」

一夏の先制攻撃。真っ直ぐラウラを攻撃

「ふん・・・」

ラウラはゆつくりと右手を出す。もうAICか

《アクティブ・イシャーナル・キャンセラー》英文頭文字をとってAICとは、相手のISの動きを止める《慣性停止能力》の事だ原理を話すと長くなるから端折る（知らない訳ではない、断じてだ！）が、AICのエネルギー波を当てることによって作用しているこんなチャチな解説の間にも、ラウラのAICの波は一夏の腕、胴、足と絡めとっていく

「開幕直後の先制攻撃か・・・私が予想していなかったとでも？」

「・・・以心伝心で何よりだな」

「ならば、次に私がすることも分かっているだろう」

ガキン！ と音を立ててリボルバーが回転、砲弾を装填する早くも一夏に終わりが来そうだった

「・・・っと、ラウラと一夏はすっかり見ててもいられないよなっ！」

カテナを伸ばし、一夏を飛び越えて射撃しようとしていたシャルル

を狙う

ちなみにカテナの鎖は、輪が連結するように拡張領域から一つ一つ展開しているため、長さに限度はない

ただし、引っ込むように収納されるため、伸ばしすぎると戻すのに時間がかかり、面倒くさい

「くっ……！でも、させないよ！」

シャルルは器用なことに、回避しながらラウラに向けてアサルトカノン^{バースト}の爆破弾を発射する

「チツ……」

爆発により肩のカノンをずらされ、一夏に放たれた砲弾は空を切るそこに入るシャルルからのマシンガンからの銃弾の雨……って、いつの間にシャルルは武器変えてたんだよ

たたみかける様なシャルルの攻撃に、ラウラはいったん下がる

「俺を、忘れんなよなっ！」

回り込んでいたシャルルの真下から切り込む

やっぱり自分から切り込むには心許ない得物だったが、それでもシャルルの射撃を止めるには十分だった

そのまま、アル管制のトリックスターも駆り、ラッシュを仕掛ける

『マスターって、意外と、接近戦多いよね！ボク、一応射撃型だよ！？』

「細かいことは気にするな。それに、今はそれどころじゃないぞ」

「じゃあ俺も忘れられないようにしないとな！」

仕掛けようとした矢先、シャルルはくるりと回転
そこから出て来たのは、瞬時加速で突進してくる一夏

キイイイン！

得物と得物がぶつかるが、小振りの片手剣の俺の方が、リーチでも
力でも不利

金属をこする音を立てながら、一夏の剣戟を受け流す
そのまま左手に展開したフルメンを構え引き金を――

「シャルル！」

「うん！」

引き金を引くが、そこに一夏はいなかった
フルメンの光条が過ぎた後、真正面には両手にショットガンを構え
たシャルルがいた

「しまっ――」

そこで急に、強烈な引力を感じる

ショットガンの銃弾を回避できたものの、このままでは振り回され
てしまう

とっさにカテナを展開して、シャルルの腕にからめる

「！？」

「邪魔だ」

そういつて、ラウラは俺をシャルルごと引っ張り、壁の方へと投げ
つける

・・・多分シャルルの腕を反射でつかめたのは、アルの制御とラウラの訓練の賜物だな

「らあああっ！」

ワイヤーに牽引された勢いを回転に変え、半ばヤケクソで、シャルルを壁の方に投げつける

カテナは展開方法上、根本から外すことが可能なのだ。鎖に直接触れないと戻せなくなるけど

ドゴオン！ と凄い音がして、壁がめり込み、土煙が上がる

「うう・・・今のは効いたなあ」

土煙が消えて来た頃、よろよろと起き上がってくるシャルル
どうやら出来る限りの最大限の受け身で、ダメージを最小限に抑えたいらしい

致命的なダメージとはいかなかった。いや、壁ドンぐらいでいくほ
うがおかしいか

「いきなりやるなよ！せめて一報ぐらい入れろっての！」

とりあえず、プライベートチャンネルを開き、ラウラに一言

「アレで受け身をとれないほど、私の相棒は弱くないさ」

「・・・そうですか」

そういつたら言葉を返せないわな
ずるいの

「薫はそのままデュノアを叩け。私は、織斑一夏を叩く！」
「了解だよ、相棒！」

もともと、『一夏はラウラが叩く』って約束もあったしな
今の一撃で、味方との距離は離れた。俺も、相手も
二対二ではなく、一対一が二つの状況ができている

「手加減はしないよ？」

「そんなのはこっちから願ひ下げだ！」

「じゃあ、いくよっ！」

「こいやあ！」

そついうと、シャルルが剣を持って突撃してくる
俺もそれに剣をもって応える

キィーン！

シャルルのソードが、俺のグラディウスの刃を削る
剣戟を流し、こちらから再び切り結ばうと距離を詰めるが

バン！

ショットガンによる攻撃をモロにくらい、エネルギーを結構削られる

「やば・・・」

距離を置き、フルメンによる射撃を行おうとすれば、今度は銃弾の雨
一応射撃は出来たものの、動体への射撃は未だ難しい。命中率は芳
しくなかった

「クソっ・・・次から次にコロコロと・・・！」

『ざっと解析してみたけど、武器が急に変わるの、カスタムされたりヴァイヴの能力じゃないみたい』

「そうなのか？」

『うん。それで、拡張領域の方には二十個以上も武器を確認したよ』

・・・ヤツはヨーロッパの火薬庫か。大戦前のバルカン半島か！

「それってつまりー」

『うん。それだけの武器を、シャルルは扱えるってことだね』

「まじかよ」

武器や攻撃方法がころころ変わるの、シャルルの特技ってか？

そんな話をアルとしている間も、シャルルの銃撃は止まらない止まらないどころかそのまま突っ込んできて、気がつけば近接格闘に持ち込まれていた

「ったく！器用だな！」

「それはどうも！」

剣戟を捌き、トリックスターで多角攻撃を試みるがあっさりとかわされ、さっきのように近距離ショットガン半分程度被弾しながらも避ける

「くそっ！届きそうなのに！あと少し・・・」

届きそうで届かないこちらの攻撃。それに対しでさっきからずっと攻撃を当て続けてくるシャルル
技量が、違いすぎる。時間が立つたびにどんどん勝てる気がしなく

なってくる

「ラウラっ！そっちはっ！まだかつ！？」

「黙ってくれ！くそっ・・・ちょこまかと！」

どうもあっちもあっちで一夏が粘っているようだ
というかこれ、間違いなくシャルルに誘導されてるよな？さっきよ
りも二人と距離が近くなってる気がするんだが・・・

「ごめんね！そろそろ終わりにしよう！」

「んなつ！？」

そういつて、瞬時加速なのか、一気に距離をとったシャルルが出し
たのは――ロケットランチャー？

ヨーロッパの寂れた村あたりで武器商人が売ってそうだった
・・・無限に撃てたりとかしないよな？

『対戦車用ロケットじゃないの！？アレって！？』

「正しくは、対IS用ロケット、だろっ！」

弾の発射と同時に、射線から逃れる
だけど

グググッ

曲がった

「あやかよそんなの!？」

『熱源に向かってホーミングするタイプだよ!マスター!叩き落とさないといつまでも追ってくるよ!!!』

「くそっ!面倒な!」

カテナではたき落そうとする

が、武器の選択を誤った

カテナの間を掠りもせず突き抜けてくるロケット弾

「このお!」

無理矢理カテナを引っこめることで先端の分銅にギリギリ当てることに成功

直撃は免れたが、爆発の位置が近かった

ドオオオン!

「うわあああつ!」

爆風に巻き込まれ、俺は吹き飛ばされてしまった

「先に片方を潰す戦法か。私たちには無意味だな」

ラウラは薫ははなから数に入れていないのだろう。だけど、俺たちからしてみればそれは意味がある

とにかく俺は、シャルルが薫を倒すまでの間、ワイヤーブレード＋プラズマ手刀の波状攻撃を耐えきることだ
これらを捌ききるのは容易ではない。距離を取りたくなるが、必死に食らいつく

「お前の武器はそのブレードのみ。近接戦でなければダメージを与えられないからな」

それもある。それに離ればあのレールカノンのいい的だなにより、また近づくために余計なエネルギーを使ってしまう

とにかく、意地でも食らいつく！

右手に雪片を任せ、左手はラウラのプラズマ手刀―その腕自体を払うのに使い、足でワイヤーブレードを蹴る
ワイヤーブレードは正確にその側面を蹴らなければ、逆に足先がサツクリ切り落とされてしまう

意識を集中させなければ、あっという間に終わりの状況なのだ

「うおおおっ！」

ガン！ガン！ガン！

零距离での高速戦闘

ふとした拍子に途切れてしまいそんな集中力を、シャルルを信じて必死につなぎとめる

「・・・そろそろ終わらせるか」

ラウラがプラズマ手刀を解除する

刹那、ピシツと体が凍ったかのように動きが止まる。

ラウラは腕を交差し、A I Cを発動させている

「ふん」

「くそおおっ!!」

抵抗するも空しく、ワイヤーブレードの一斉射撃が白式の装甲を切り裂く。装甲の三分の一と、エネルギーの半分を持っていかれる
ラウラの追撃は止まらない。さっきの薫のように、足をワイヤーで掴まれ、地面にたたき落とされる

「がつ……」

殺しきれなかった衝撃に、情けない声を上げる
すぐに体勢を立て直さないと……!!

「終わりだ」

その時、俺は、世界が妙にスローモーションに見えた
砲口から溢れ出た炎と煙

それを突き抜けて、飛びだす砲弾

それは、真っ直ぐと俺の方に向かって――

「おまたせ!」

ガギン!と重い音を立てて、シャルルの盾が砲弾を防ぐ

「……助かったぜ。薫は?」

「お休み中」

シャルルのさした方を見ると、土煙が上がっていた
中の様子はよく分らないが、おそらくは薫がダウンしているのだ
ろう

「さすがだな」

「その言葉は、試合に勝ってから、ね」

手に持っていたアサルトライフルを捨て、新たにマシンガンとショットガンを呼びだす

「ここからが本番だね」

「ああ、見せてやるでしょうぜ。俺たちのコンビネーションをな」

「・・・薫。いつまでそうやって伸びてるつもりだ？」

『わりい。まだエネルギーは結構残ってたが、さっきのでスラストーをやられたらしい。今ちよつと動けそうにないわ』

「分かった」

『しばらく一人で頑張ってくれ』

「私を誰だと思っているんだ？そのくらいのこと、造作もないさ」

異変

「ふあー。すごいですねえ。二週間ちよつとの訓練であそこまで連携が取れるなんて」

教師だけが入ることが許される観察室で、モニターに映し出される戦闘を見て、真耶は感心したようにつぶやく

「やっぱり、織斑君は凄いです。才能を感じます」

「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。アイツ自身は、大して連携の役には立っていない」

身内には相変わらぬ辛口評価の千冬に、真耶はやや苦笑気味にいう

「それでも、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身が凄じやないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

一夏と薫の決定的な違いである気もするが、ここでは関係ないので放っておく

「まあ・・・そうかもしれないな」

ぶすつとしたようにいう千冬

真耶はそれが照れ隠しだと最近分かったため、何も言わない。それどころか、『やっぱり弟さん思いだなあ』と、しみじみ思う

「それにしても柳瀬くん、あっさり負けてしまいましたね」

「やはり経験の差だな。初心者にデュノアの戦法を攻略することは無理だろう」

まあ、もった方なんじゃないか？

千冬は興味なさそうにそう付け加え、モニターに視線を戻す

そこには、二対一で互角に渡り合っているラウラの姿があった

「強いですね、ボーデヴィツヒさん」

「ふん・・・」

感心したように言う真耶に対し、千冬は心底つまらなそうな声を漏らす

「変わってないな。まだ強さと攻撃力を同一だと思っている。だがそれでは―」

一夏に、勝てはしない

それは心の中にしまい、口には出さない。言ったら最後、真耶に何を言われるか皆目見当もつかない

わあああつ！

「あ、織斑くん零落白夜を出しましたね！ 一気に勝負をかけるつもりでしょうか」

「さて、そううまくいくかな」

「またまた、そうやって気にしていない態度をしても」

「山田先生。久しぶりに武術組み手をしようか。折角だ、十本ほどな」

「いつ！いえいえっ！私はそのっ！ええと、生徒たちの訓練機を見てないといけませんから！」

慌てふためく真耶をみながら、千冬は低い声でたたみかける

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるように」「は、はい……」

見えて可哀想になるくらいしょんぼりした真耶を見て、千冬もさすがにやり過ぎたと思ったのだろう
頭を軽くポンポンと撫でていた

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見ものだぞ」「は、はいっ！」

「んー……アル。どんな感じよ？」

俺はアリーナに出来たクレーターの中で、もう一人の相棒に問いかける

ちなみに、三人とも俺なんか完全に忘れたように戦っている

いや、ラウラがこっちに弾が飛んで来ないように動いてると考えておこつ。ポジティブシンキングだ

『……ダメみたい。一回きりなら使えるかもしれないけど、修復不可能だね』

「……まじかよ」

戦うためのエネルギーはまだ充分に残っている
だが、さっきの爆風でスラスターが潰され、飛べない
翼が折れた鳥は、こんな気持ちになんだろうか

『背中に一基だけしかつけないっていうのは、さすがにダメだった
ね』

「だなー・・・アレ（・・・）しかないか？」

『今動きたいなら、アレするしかないね。多分、自己修復するより
も時間もエネルギーもかからないよ』

アレだな、修理するよりも新規に買った方が安くて早いつて感じだな

「んー・・・」

アレをやったら、たしかに動けるだろう
だけど、問題はその後だ

今よりもダメージが増えるのに、あの銃弾の雨の中をどう生きるか

「まあそこは準備中に考えるとして、アル。よろしく」

『了解。データ統合するから、ちよつと待ってて』

「ん？ こないだと違うのか？」

『こないだは、そのまんまブルーティアーズだったからね。今度は
複数のデータを組み合わせた、ちよつと凝ったものにしてみようか
なつて』

「ふーん・・・テーマは？」

『怖いもの』

「・・・大丈夫か？」

「コレで決める！」

そう言いながら、零落白夜を発動させた一夏はラウラに直進する

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・
・それなら、当たらなければいい」

ラウラのAICによる攻撃が、一夏を襲う

一夏は、急停止、転身、急加速でそれらをかわし続ける

「ちよろちよると目障りな・・・」

そっぴいラウラはワイヤーブレードを展開。攻撃は熾烈を極める
しかし一夏は先程と違い、一人で戦っている訳ではない

「一夏！前方二時の方向に突破！」

「分かった！」

そこに、シャルルの牽制。一夏への防御も忘れていない
シャルルと組んでよかった。そう、一夏は思った

敵に回れば、十中八九勝ち目はないとも感じる

「小癪な・・・」

一夏はそのままワイヤーブレードを潜り抜け、そのまま射程圏内へと収める

「お前の攻撃は読んでいる」

「普通に攻めればな。それなら！」

下げていた切っ先を起こし、身体の前へと持っていく

「！？」

これが、一夏が思いついた、対AIC戦法
斬撃ではなく、突きで戦えば、読みやすさは変わらないにしても、
腕の軌道は捉えにくいはず
線より点の方が、捕まえるのは難しいのだ

「無駄な事を！」

凍りついたように一夏の動きが止まる

「ようは、お前の動きを止められれば―」

「ああ、忘れているのか？俺たちは二人組なんだぜ？」

「っ！？」

ラウラは慌てて視線を上げた
だが遅かった

ドン！

零距离でシャルルのショットガン六連射を浴び、ラウラのレールカ
ノンは音を上げて爆散した

そして、一夏を包んでいた、AICの網も解ける
対象に意識を集中していないと、すぐに解除されてしまう。AIC
の弱点だった

「一夏っ！」

「おうっ！」

ラウラの顔に、ハッキリと焦りが浮かぶ

必殺の一撃。間違いなく、そういえる様な一撃が――

しゅううん・・・

「なっ！？エネルギーがっ！」

・・・一撃が入る前に、無情にもエネルギーが切れる
情けない音を上げて、零落白夜の刀身が消えてゆく

「もう闘えまい！次の一撃で、私の勝ちだ！」

プラズマ手刀を展開したラウラが、一夏に寄って斬る
一夏は、必死で左右からの手刀による猛攻を弾く
いつ崩れてもおかしくない

「させないよ！」

「邪魔をするな！」

そこに牽制に入ろうとしたシャルルは、ワイヤーブレードによる正確かつ鋭い攻撃を受ける

「うわぁっ！」

「シャルルっ！」

「次は貴様だ！ 堕ちろっ！」

とうとう一夏に、手刀による一撃が入った

火に手をつ込んだような熱。電気を流されたかのような痺れ
それらは、ダメージを受けた事を、高らかに主張している

白式からも、一夏からも力が抜けてゆく

そのまま力なく、床にポトリと落ちた

「は、ははっ！ 私の勝ちだ！」

声たかだかに宣言するラウラ
だけど……

「まだ、終わってないよ」

そこに超接近する物体

それはシャルルだった

「なっ……瞬時加速だ！？」

事前のデータには、瞬時加速ができるとは書いていなかったのだろう
酷く狼狽したラウラだが、同じくらい一夏も動揺している。パート
ナーである彼ですら、知らなかったのだから

「今初めて使ったからね」

「まさか、この戦いで覚えたというのか！？ だ、だが、私の停止結
界の前では……」

A I Cを構えるラウラ

「これで、A I Cは―」

「させつかよお！」

ダァン！

「ぐあぁっ！？」

銃を構え、撃とうとした瞬間、一夏は何かに撥ね飛ばされた
そしてその何かは、銃を撃たせまいと一夏をはがいじめにする

「薰！遅いぞ！」

「悪い！ 今無理矢理動かしたやつだから、また動けない！」

「なっ！ お前はバカか！」

「バカバカ言ってんな！ それより来るぞ！」

「っ！！！」

ラウラが目の前を向くと、そこにはシャルルがいた

「この距離なら、外さない」

「それがどうした！ 第二世代の攻撃力で、このシュバルツェア・
レーゲンを落とすことなど―」

そこで、ラウラはハツとする

シールド・ピアース

「《盾殺し》・・・！」

「『名答』」

盾がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が現れる
単純な攻撃力だけなら、第二世代型最強と言われた武器
それは、拡張領域内にはない。ずっと盾の中に隠してあったのだ

「おおおつ！」

シャルルがそれにより行う攻撃は、先程の一夏と同じ、点による攻撃
しかも先程と違い、瞬時加速を使つての接近だ。全身にかけるには
余裕がない
つまりラウラは、パイルバンカーを止めなければならないのだ

「!!!!」

狙いを澄まし、AIC波を飛ばす

しかし、無情にもそれは外れた

ズガアアン！

「ぐうううっ！」

ラウラの腹部に、パイルバンカーの直撃が入る
絶対防御が発動し、エネルギー残量をごっそり持っていく

しかも、相殺しきれなかった衝撃がラウラの中を駆け抜けたのだろう

苦悶に表情を浮かべている

「ラウラぁ！」

薫は叫ぶが、何もできない

先程の強引な急襲で、本当にイカレてしまったらしい
背中のスラスターから煙が上がるだけだった

話は変わるが、シールド・ピアースはリボルバー機構を採用している
つまり一発で終わりではなく、連射ができる

ズガン！ズガン！ズガン！

さらに三発打ち出され、シュバルツェア・レーゲンからは紫電が走る

このままISが強制解除され、この試合は終わり

——そう誰もが思った時、異変は起きた

異変（後書き）

特に異変も起きていないのに、異変というタイトルの29話目でした

次で30話

一日おきに投稿しているのに、もうすぐ二カ月が経とうとしています
・・・時の流れって、早いなあ

ヴァルキリー・トレース・システム

—こんな、こんなところで負けるのか、私は・・・

たしかに、相手の力量を見誤ったのは、私の重大なミスだ。だが—

—それでも！私は負けられない！

凜とした、私が憧れる教官を、腑抜た顔にしてしまうあの弟が許せない

そして、私の我儘に付き合ってくれた、たった一人の弟子の為にも—

—敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を。完膚なきまでに叩き伏せると！

ならば、こんなところで負けるわけにはいかない

あの男はまだ動いているのだ。二度と立ち上がれなくなるまで、徹底的に叩き潰す！

そして、そのためには—

—力が、欲しい

どくん。 と、私の奥底で何かが脈打つ

『—願うか？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？』

いうまでもない。それがあるのであれば、私など——空っぽの私な

ど、何から何までくれてやる！

だから、私に、比類なき最強を、唯一無二の絶対を―私によこせ！

D a m e g e L a v e l . . . D

M i n d C o n d i t i o n . . . U p l i f t

C e r t i f i c a t i o n . . . C l e a r

《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》

B O O T

「あああああああつっ！」

突然、ラウラが絶叫を上げる。同時に、シュバルツェア・レーゲンから電撃が迸り、シャルルが吹きとばされる

「一体何が―！？」

「なっ！？」

「・・・マジかよ」

俺を含めて、戦っていたものは目を疑った

ラウラが―ラウラのISが変形していたのだ

ぐにやりと金属が溶けるように装甲が曲がり、ラウラを包む
そして地面につくと同時に、粘土をこねあげるかのようにして、再び装甲が形成される

出来あがったものは、シュヴァルツェア・レーゲン《だった物》

ラウラにぴつちりと張りついた様なラインを持つフルスキンのISが、そこにはいた

眼のあたりにある赤いラインアイが紅い光を、あやしく放っている

『そつか・・・これが、ボクの感じていた《何か》・・・』

「なんだよ、アレ・・・薫のISと同じやつか？」

ISは原則として、その基礎形状を急激に変化させることはない。
出来ないと言った方が正しい

しかし、原則女子しか動かせないISを、男子が動せたりしているんだ。この原則に例外があってもおかしくない
というか、現にその例外がここに存在している
・・・例外だらけのはぐれ者だな。俺ら

「アル、あれってトレースか？」

『・・・ううん。あんなブサイクな物、ボクのトレースと一緒にしないですよ。あんなのはただの模写コピーだよ。・・・たぶんヴァルキリーの、ね』

「・・・」

一夏が、無意識のうちに雪片を中段に構える

「――！」

その刹那、黒いISが一夏に切り込む

鋭い一閃。俺には刃が見えなかった

ハイパーセンサーを通してやっと、それが一夏の雪片を弾いたということが分かった

そして、そのままそいつは上段に《雪片の様な刀》を構える
気がつけば一夏は下がり、それは刀を振り下ろしていたようだった

「ぐう……」

一夏を見ると、刃が触れたのだろう。左腕から血が滲んでいる
白式の姿は、そこにはなかった

「……がどうした……」

「は？」

「それがどうしたあああつ……!!」

そう叫びながら、一夏は生身であるISに殴りかかる……って

「馬鹿野郎！死にたいのか!？」

カテナを展開し、一夏を鎖で拘束する

それでもなおアイツに向かって進もうとする一夏
油断すれば、引き摺られてしまいそうだった

「放せ！アイツふざけやがって！アレは千冬姉の太刀筋だ！」

「だからって、このままお前をみすみす殺す気はない！」

「邪魔すんならお前も……」

「いい加減にしろよ……」

カテナで一夏を締めあげ、床に叩きつける。もちろん死なない程度
に、だ

「ぐうっ……」

「とりあえず、落ちつけ。そして、わかるように説明してみる」

叩きつけた衝撃と、床の冷たさで正気に戻ったのか。一夏は、話した

「・・・あれは、千冬姉のデータだ。間違いない。それは、千冬姉だけのものなんだ！それを、アイツは・・・くそおつ！」

「はぁ・・・。お前は、いつも千冬姉、千冬姉だな」

「それだけじゃねえよ。あんな訳のわからない力に振り回されてるラウラも気に入らない。ISとラウラ。どっちも一発ぶったたいてやらないと気が済まねえ」

それには同感

「アル。お前待ちだぞ？」

『トレースの準備ならできてるよ。一夏くんを離してあげて』

「・・・おい。シャルルー。大丈夫かー？」

オープンチャンネルでシャルルに訊く

「通信機器は回復したみたいだけど、ごめんね。もう少しかかるかも・・・」

「・・・だそうだ。一夏、シャルルが回復するまで暫く見てやってくれ」

そついつて、鎖から一夏を解放する

「・・・俺の代わりのつもりか？」

「勘違いするな。お前の代わりにやるんじゃないよ。・・・『意地でも止める』っていつちまったからな。俺」

「はあ？」

「こつちの話だよ・・・アル、始めてくれ」

『了解！ 構成データ反映・・・準備完了・・・よし！複写^{トレース}、開始
っ！』

俺はあの時のように、白い光に包まれた

真っ暗な部屋のなかに、私はいた

どこか、狭苦しいだけだったドイツ軍の宿舎に雰囲気似ている
しかしそこと違うのは、どこまでも真っ暗

置いてある物さえ、光を返さない、漆黒の部屋

唯一光を放つ物体は、テレビのような何か

その光が照らす場所さえ、何があるのか分からない。輪郭が浮き出
て見えるだけだった

この場所には、私一人しかないようだった

—ここは、どこだ？

まず思いつくであろうその疑問。それは思いついたが、すぐに解決
する

理屈はないが、何となく、そうなんだろうと思った

—しかし息苦しいな。ここは

部屋の狭さのせいだけではない気がする

ガン！

テレビからの音につられ、私はその映像を見ている
そこに映ったのは、私が先程まで戦っていたアリーナだった

―ああなるほど。これは私か

すぐに、この映像の意味を理解した
これは、今の私。正確には今のシュバルツェア・レーゲンか

あの男の唯一の武器である刀を弾き、斬撃が決まる
奴は避けたが、切っ先がかすったのだらう。ISは解除され、腕か
らは血を流している
もう闘えないであろうそいつが映された時、声が聞こえて来た

『・・・これが、汝の力だ』

―違う。私が求めた力は、こんなものではないのだ

もつと息苦しくなる

狭かった部屋は、さらに狭くなってゆく
私を部屋ごと締め上げるかのように、押しつぶすかのように

『違う？ 汝は最強の、唯一無二と呼べるほどの力を手にしたのだ
ぞ。・・・なのに、違うだと？』

―そうだ・・・私の望むものは・・・教官は・・・ぐううっ！

苦しい。呼吸と一緒に、思考が止まってゆく

―誰か・・・助けて・・・

そう願った瞬間、目の前のテレビから光が溢れ、私を包みこんだ

ヴァルキリー・トレース・システム（後書き）

という事で、30話目でした

もう投稿開始から2ヶ月です

ここまでずっと、二日に一度で更新できたのは自分でもビックリしています

第三章らへんからはちょっとペースが落ちるかもしれませんが。悪しからず

黒い幽霊へアーテルレムレス

俺を包むように溢れ出ていた、光が弾ける。花火のように、虚空に消えていった

『アルカナ・アーテルレムレス（黒い幽霊）。複写終了だよ』

「薰・・・それってアレと同じー」

「いいや、あんなのはただのコピーさ。アルのトレースとは違うんだとよ」

そういつて、俺は新しくなったアルのスペックを確認する

「『怖いもの』がテーマつつてたけど・・・まさか、ここまで露骨に出すとはな」

黒くてボロボロのマントで本体を覆い、武器はプラズマ手刀を模したのだろうか。プラズマ状の刃の大鎌が目を引く

射撃武器は二丁のクロスボウのようだ。二丁とも腰にマウントされている

フェイスガードも兼任するような仮面のようなハイパーセンサーまで髑髏を模しているというあたり、手が込んでるとしか言いようがない

ハッキリ言つて『死神』だ

「・・・もつとこう、騎士サマとか、カッコイイもの無かったの？」

漫画とかだとさ、こういう場面って騎士が颯爽と出てくる場面じゃん？

間違っても死神様が通る場所じゃないと思うんだけど・・・

『データがなかったからね。諦めて』

・・・はあ

「・・・まあいいか。よし、いくぞアル！」

『うん！』

鎌を構える

すると、先程のように一気に斬りこんでくる、黒いIS

ハイパーセンサーや計測されたデータで、かるうじて太刀筋が捉えられる

それくらい、剣の速度は速かった

ガン！

「うがつ！」

見えないほど速い斬撃。俺は、鎌の柄を前に出すことで防ぐ
だけど勢いを受け止めきれず、そのまま後方に吹き飛んでしまう
追撃と言わんばかりに、吹き飛んだ俺に切り込んでくるIS

「っ！　いつまでも後手後手でいられるかってーの！」

ぐるんと反転して姿勢を整え、壁に足をつき、屈伸運動で勢いを殺し、そのまま壁を蹴って相手に飛びかかる

「らあああっ！」

そのまま鎌を振り上げて突進

相手も切り返すため、受けの姿勢を作り上げる
このままいけば、カウンターで切り捨てられる

―だが、それは意味のない事だった

「――!?」

緊急回避の要領で進路を上に変更に。そして、そのまま腕をつきだす
布からはみ出た腕は、骨のように細かった

ガガガガガガッ！

金属がこすれる音を立てながら飛び出す、四つの鎖
そのすべてが、黒いISに襲いかかる

「――！」

やはりあの捉えきれない刀に全て弾かれる。だけど

「姿勢を崩したな!？」

相手に突っ込む

要は、大鎌での突きだ

相手が武器の振る速さは、武器的な性質や個人差、経験等で圧倒的
に俺を超える。そこは、今考えてもどうしようもない

なら、振らなければいい。斬りと突きだったら、突きの方が速い・
・ハズ

こうすれば、俺みたいな初心者でも、あれとタメ張れるような攻撃
ができる・・・ハズ

ハズばかりだが、コレしか思いつかない。もし決まらなければそ
のままスライスハムだ

「――！？」

慌てて姿勢を立て直し、突きを払おうと刀を振るう

「アルっ！」

『了解！イグニッション！』

瞬時加速。あの日の一夏のように、一気に間合いを詰める
払われることなく、俺の突きは決まった

ドオン！

ザシュッ！

鈍い音と、何かが切り裂かれたような音が、ほぼ同時に聞こえる

「っ・・・」

アルのマントが切り裂かれ、どこかに飛ばされる
下にあったのは、骨のように全身を覆う灰色の全身装甲フルスキン

パキン！

装甲が割れ、少し遅れて赤いものが染み出てくる

「・・・勝った、よ、な？」

「ギ、ギ・・・ガ・・・」

相手のISは紫電を発し、次第に光となって消える

『マスター、ゴメン・・・ちょっと休むね・・・生命維持だけは・・・』

そういつて、アルも光を発しながら消える

なんか、すげえ眠たくなってきた・・・

まぶたが閉じる直前、中から出て来たラウラと眼があった

いつもは冷たい光をたたえている深紅の瞳も、眼帯の下にあるあの綺麗な黄金の瞳も、助けて欲しそうな、捨てられた仔猫のような眼をしていた

今度は真っ白な空間にいた

先程の光の中に引きこまれたらしい

やはり真っ白でなにもないのだが、先程とは決定的に違うところが、一つあった

あったかい

ホットココアを飲んだ時の様な、心にしみわたるあの暖かさ

空間全体がそんな暖かさを持っている。先程の様な息苦しさは微塵にも感じない

そんな心地よさに浸っていると、一人の男が現れた

『どうだ？この場所は？』

― 暖かい

『そっか。そういつてもらえると、アイツも喜ぶよ。多分だけだな』
そういつて、そいつは笑う

― お前は、いつの間にか私よりも強くなってしまったな

『あんなのは偶然さ。それに、あれはお前自身の強さじゃないだろ？それじゃ、お前より強いなんて言えないよ』

― 結局、強さとはなんなのだろうな？

『ん？ そうだなあ・・・俺が思うに、強さとは《赦すこと》かな？』

― 赦す？

『そうだ。一夏曰く、《強さとは心の在り処。己の拠所》。つまりは、自分がどうありたいかって思うことだよな』

― 私が、どうあるか？

『そういつこと』

―お前は、何故そう思うのだ？

『んー・・・それについてはちょっと長くなるかもよ？』

―構わない。私に教えて欲しい

『そう？なら話そうか。・・・ある仲のよかった夫婦がいきなり大ゲンカしたんだ。三日三晩も続いたそれは、とうとう離婚だのどうだのなんて騒ぎにまで発展したんだ』

―それは、大変だな

『だろ？それが、四日目に終わって、気がつけば二人して笑いあっていたんだ。どうしてだと思う？』

―何故？

『夫がとうとう謝って、妻がそれを赦したんだ。・・・夫は、今ではすっかり尻に敷かれちゃってるけど、二人でいるときはいつまでも楽しそうに笑ってるんだ。・・・俺は、そんなのがうらやましくて』

―なるほど

『だから思っんだ。赦し赦され、いつまでも笑いあっていられれば最高だってな』

―たしかにな。だが、それが崩れそうになったらどうするんだ？

『そんなときは戦うさ。それを崩そうとするものや、自分とな』

―お前は、強いな

『いや、俺は強くはないさ。シャルルやセシリアにも負ける、ただのザコさ』

―そういう事を言ったのではない。心が強いといったのだ。私と違って、な・・・

『なにいつてんだよ。らしくねえ』

―そうかも知れないな。・・・私は見つけられるだろうか？《本当の強さ》というものを

『お前次第さ。少なくとも、力〓強さじゃないことに気がつけたんだから、もう力に振り回されることもないだろ？ だから―』

―だから？

『―だから、一緒に笑おうぜ？《ラウラ》』

笑いながら、手を差し出してくる

その笑顔はとてもまぶしくて、思わずドキッとしてしまう

鼓動が早鐘を打つのが分かる。どうやら、コイツの前では私もただの十五歳、ただの『女』のようだと告げているらしい

私は、その手が離れていかないように、ぎゅっと強く握りしめた

黒い幽霊へアーテルレムレス（後書き）

ラウラ 陥落

原作とほとんど変わらない。こんなのでいいのか。／（＾o＾）\n
アルカナの新しい形態、『アーテルレムレス』と、薫の見つけた、『強さの答え』でした。突拍子な感じは否めませんし、詰め込み過ぎた気もしますが・・・\n
アルについての詳しい話は、また後ほどまとめてようかと思っています

ついでに、作者はテンプレとかお約束とか大好きです。やっぱりしつくりまとめられますから

晴れ舞台が短いのは、まあ・・・尺の都合という事で（笑）

さてバトルのクライマックスを終えた訳ですが、恋のクライマックスはもう少し先です。

もうしばらく、作者のご都合的な妄想にお付き合いください

戦いのそのあと

「・・・知らない天井だ」

気が付いたら、知らない部屋の知らないベッドに寝かされていた

「あ？起きた？大丈夫？」

「あ・・・はい・・・」

どうも、教師がいるところを見ると、保健室のようだ。

保健室の担当教師（名前は・・・なんだっけ？）が、訊いてくる

「キミも無茶するよね。一撃入れるために、自分が斬られるんだから」

「・・・肉を切らせて、骨を絶つていいいますよね？」

「・・・はあ」

なんでそこでため息つくんですか

「そういうのもありかも知れないけど、ISが全身装甲じゃなかったら、キミは少なくとも三日は寝たままだったと思うよ。ヘタしたら死んでたかも・・・」

そんな攻撃だったのか、あれ

「ISに感謝しなきゃダメだよ？キミの傷がもうふさがってるのも、ISの生命維持機能のおかげなんだから」

ふと自分の格好を見ると、上半身は何も着てなかった

胸元には、見たことのない真一文字が出来ていた

「へえ・・・凄いなIS」

「でも、その凄いISでもどうしようもないのが、あるみたいなんだよね」

「え・・・それってなんで・・・ぴぐう!？」

ふと膝を曲げようとすると、急に鋭い痛みが走る

「キミ、壁で受け身取った時に膝思いつきり曲げたでしょ？その時に異常な負荷がかかったみたいだね・・・」

「要は・・・関節痛、ですか？」

「うん、それも、かなり重症。動かすには問題ないんだけど、二、三日は痛むよ」

鎮痛剤をあげるから、動くときには使ってね

そついつて、錠剤を渡してくれた。水ナシ一錠らしい。すげえ苦そう

「それと、もう保健室出ていいよ。食堂に行ってなんか食べてくれば？」

・・・痛む足で？

「自業自得だよ。ちなみに、待っててもお見舞いの品とかはないよ」

くっ・・・それで保健室の先生か?!

とは言わない。なぜなら、いっても無駄な気がしたからだ
泣く泣く鎮痛剤を飲んで、俺はベットから立ち上がった

「そついえば、ラウラはどうしました？」

「ああ、ボーデヴィツヒさん？寮の方に連れていかれてたよ。多分自分の部屋じゃないかな？」

「ういっす。ありがとうございます」

そのまま、俺は保健室を去った

「いててて・・・」

とりあえず俺は、痛む足をさすりながら食堂に向かっている

こうやって歩いてみると、刀の傷よりも歩くたびに疼く膝の痛みの方がずっと辛い

膝をさすりながら、よぼよぼと歩く姿は、還暦こえた爺さんそのものなんだろうな

そして、眩暈がするほどの空腹。リンゴ一個でもいいから、腹に入れておきたい・・・

『細胞を活性化させたからね。消費も早かったんだよ』

「ふーん……。で、結局あの空間はなんだったんだ？」

『んーと……。ISのコアネットワークの影響だとおもうんだ。操縦者同士の波長が合って、その時に相互意識干渉が起きるんだ』

「ソーゴイシキカンショー？」

『えっとね……。多分、テレパシーとか、そんなんじゃないかな？』

「へー……」

『それでね、マスターとラウラちゃんがいた空間は、その意識干渉が可視化されたもの。つまり、ボクの中だった……。ってことになるのかな？』

「なるほど。って、やっぱり俺ラウラと会話してたのか？」

『うん』

「・・・夢じゃなかったんだ」

なんか恥ずかしいなあ・・・

「つーか、それじゃあお前きいてたのかよ」

『うん。カッコよかったなあ、《だから、一緒に笑おうぜ？》ってところ』

「・・・改めて聞いてみると、齒の浮く様な台詞だな」

さりげなく自分がりもしてるし、よく言えたな。あの時の俺

『やっぱり、ノリと勢に乗るのはいいけど、飲まれちゃだめだね』

「そうだなあ・・・。言っちゃった以上、なるようにしかならんか・

・・・」

『後悔してる？』

「まさか」

そうこうしているうちに、食堂についた

「お、薫か」

「あ、一夏にシャルル」

学食に入ると、少し遅めの夕食を摂っている一夏とシャルルがいた。ちなみに時間はギリギリ。大方、事情聴取でもあったのだろう。

「薫、もう傷は大丈夫なの？」

「ああ。刀傷よりも、膝関節の方が重傷だよ。痛くてしょうがない・・・」

「なんだよそれ。ジイサンかよ」

「・・・言わないでほしい」

自分でも思ってた事だけど、他人から言われるとキツイもんだな

「で、結局トーナメントは中止か？」

「そうみたいだね。データ取りのために一回戦だけは全部やるみたいだよ」

「まあ、あんなアクシデントがあっちゃ続けられないよな」

まあ、しょうがないよな

訓練結果を発揮すんのはまたの機会としよう

「・・・なあ薫。アレ（・・・）とお前のISの能力ってさ、なんか似てるよな」

「いや、微妙に違う。動きまでマネするのか、そうでないところとか」

「でも、装甲が急に大きく変形するところとか、凄いいてたよね。・・・薫のISはどこでつくられたの？」

「・・・さあ？ 拾い物だからな、コイツは」

拾い物でなければ、捨てISか？

『ペットみたいに言わないでほしいな』

「え、それって・・・？」

「んなことよりもだ。お前、篠ノ之はどうしたんだ？ トーナメントが無効になったんだから、やっぱり話自体がナシか？」

「いや、別に付き合うぐらいいいんじゃないか？」
「は？」

・・・そんな軽い感じでいいの
か、暫く一緒に居て、事あることに思い知らされてるんだった

「別イイだろ？買い物くらい」

一夏は鈍感であるという事を
・・・今更言うことでもないな。あまり強調しすぎるのもうざった
いだろうし

「やっぱりそういうことか。・・・お前って、わざとやってない？」
「何をだ？」

・・・だめだこいつはやくなんとかしないと

「あ、三人とも揃っていますね。織斑君とデュノア君は、先程はお
疲れさまでした」

気がつけば、山田先生がいた

「柳瀬君は、怪我の方は大丈夫ですか？」

「いえ、こんなの、怪我の内にも入りませんよ」

『関節痛は？』

関節痛は怪我とはいはない。多分

「山田先生こそ、ずっと手記で疲れませんでした？」

「大丈夫です！私は昔からああいう地味な事得意ですから！」

えへんと胸を張る山田先生。リングでもつめてんじゃないかと思う
くらいの膨らみが重たげにゆれる

・・・色即是空、煩惱退散、心頭滅却。目を下ろすな。目を見て話
せば入ってこない

「・・・一夏のスケベ」

ぼそつとシャルルが呟くのが聞こえた

「ちょ！ちよつと待てシャルル！それは誤解・・・ムグツ」

とりあえず口をふさぐ

「誤解でもなんでもないだろ。・・・それで俺たちに何か用事です
か？」

「あ、そうでした・・・三人に朗報です！なんと今日から大浴場が
使えます！」

「そうですか！ いやあ、てつきり来月からだと・・・」

「今日ボイラー点検があつたので、元々生徒たちはつかえないんで
すよね。それなら、男子三人に使ってもらおうと。そういうこと
です！」

・・・一夏のテンションがぐぐつと上がったな

「そつか。じゃあ二人とも、ゆっくりつかってこいよ」

「え？薫は行かないのか？折角の大浴場なのに」

「傷が開くだろ？今日はシャワーも我慢だよ」

「あ、そつか・・・お大事に」

「おう」

そのあとは、食堂のおばちゃんに頼んで、リンゴを二個ほどもらってから部屋に戻った

「ただいまー」

やっぱり真っ暗。とりあえず電気をつけると、ラウラは布団にもぐっていた

「・・・まぶしい」

「悪い」

そついいながら、近くのツマミで明るさを調節する
手元が見えないことはないくらいの明るさに調整して、俺は自分のベッドに座る

「・・・傷はもういいのか？」

「問題ないとき。それより、そつちは大丈夫なのか？」

「・・・全身打撲と筋肉疲労だそうだ。すぐくズキズキしていたが、今はいくらか楽になった」

それでも痛いかな。そう続けた

「そつか。・・・ところで、ナイフとか持ってない？」
「ん」

ラウラが、ナイフを取り出した
包丁なんかよりもずっしりと重い、人を切るためのナイフだった
やっぱり軍人なんだなあと、しみじみと感じた瞬間だった

「まあいいや。どうせ、何も食ってないだろ？」

「そういえば、何も食べてなかったな」

「やっぱり二個もらってきて正解だったわ」

俺は、リンゴの皮むきを始める

「・・・上手いな」

「小さい頃、よく剥いてたからな。料理って程のものは出来ないけど、皮むきぐらいなら出来るぞ」

「そうか・・・」

リンゴを剥く音と、ほのかな蜜の甘い香りが部屋を包む

「・・・なあ、薫」

「なんだ？」

剥く手は手は止めずに、訊き返す

「お前は、なんであんなことを・・・」

「あんなことって、ひょっとして最後の一撃のことか？」

「ああ」

たしかに、無謀だった。自分で振り返ってみてもそう思う
相手を止めるために、自分が死んでしまっただけは意味がない。だけど

「あの機会を逃したら、もう二度とチャンスは来ないと思ったから

な。それに・・・」
「・・・それに？」

俺は皮をむく手を止め、ラウラを真っ直ぐに見る

「《斬られても止める》っていったろ？俺」
「・・・そうか」

ラウラは、寝返りをうって、反対の方をむいてしまった
・・・痛くないのか？

また室内にリンゴを剥く音が響く
そここうするうちにリンゴの皮を剥き終える
六つに切り分けてタネを取ったものを、さらに半分に切る

「ナイフはあとで洗っとくわ」
「ああ・・・。お前はとうするんだ？」
「俺は丸かじりさ」

シャクつと小気味よい音を立ててみると、口の中に甘い香りが広が
った

「お、甘いぞこれ。・・・ほら」
「う、うむ・・・」

さつき全身が痛む的な事を言っていたので、口にリンゴを持ってゆく
『はいあーん』というやつだろうか。・・・いかん、意識したらい
かん

シャク シャク シャク こくん

「本当に甘いな。このリンゴ・・・」

「だろ？さすがは食堂のおばちゃんって感じだよな。素材から選んでる」

部屋にはしばらく二つのリンゴを食べる音が響いた

「ああ、ごっそさん」

「・・・」

全部食べ終わった後、ラウラは急にうつむいて黙ってしまった
なんか、赤くなっていつてるような・・・

「ラウラ、どうしームグッ」

それは、いきなりだった

顔色をうかがおうと覗き込んだ瞬間だった

暖かいものが唇に触れる。ラウラの顔が、すぐ近くにある

どうやら、キスされたらしい

「・・・え？」

唇と唇が離れた後、俺がかろうじて出せた声は、情けないことにそれだけだった

「お、お前を、私の『嫁』にする！け、決定事項だから、異論は認めんぞ！・・・けほっ」

照れ隠しなのか、急に声を張り上げるラウラ

どうも、腹筋が痛かったらしい、目に涙をためている
ラウラを見てふと思ったんだが、涙目＋上目遣いって最強だよな。
つまり、そういうこと

「・・・婿の間違いだろ？」

「日本では、気にいった相手を『嫁』にするという習わしがあるの
だろう？ ゆえに、お前を私の嫁にする」

・・・色々間違ってるな。情報ソースどこよ

どうでもいいけど『ジョーホーソース』って初めて聞いた時、新種
のソースだと本気で思ってたことがあるんだ

それが調味料のことでないことに気がついたのは、中二の秋のころ

「え、えーと・・・と、とにかくっ！俺はもう寝るからな！？な！
？」

恥ずかしさの極みにいたり、着替えもせずに布団にもぐりこんでし
まう

経験のないことにはとことん対応できないヘタレめ

だが、そこに追い打ちが掛かる

バタツ。モゾモゾ・・・

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

何かが、俺の布団の中に入ってきた

「夫婦とは、全てを包み隠さず打ち明ける仲だと聞いたぞ？」

そういつて下の方からもぞラウラが入り込んできた

服はもちろんきていない。全身痛いとか言いながら、器用な奴だ

しかしあかん・・・すつごくあかん・・・

いい感じにほの暗い部屋のせいかな、ラウラが非常に色っぽく見えるそれに、リンゴの蜜のものではない、甘い香りが鼻をくすぐる

『あまり、変なこと考えちゃ・・・ダメだよ？』

そんな、何かの拍子にブツ飛んでしまいそんな理性を保っていたのは、頭の中に響く声があったからだと思う

さすがは相棒。ノリと勢いに飲まそうになっっている俺を助けてくれるとは

「そ、それに、今日はこのまま寝たいのだ。・・・ダメか？」

「え、いやそのそれはそのいきおいでそのたいへんなことにあ、あとoryouちようがおこっちゃうかもしれないな」

「・・・ダメか？」

また聞いてくるラウラ

・・・恥ずかしいからって、逃げてばっかじゃダメだよなあ

「仕方ないなあ。・・・今日だけだかな」

『マスター！？なんで流されちゃうの？』

変なことする気はないよ。添い寝だよ。添い寝

『もし、変なことするようだったら思いつきり絞めるからね』

そういつて、腰につけている鎖が動く

・・・なにそれこわい

「・・・ああ」

抱きしめたラウラの体は、柔らかくて暖かった
甘い香りを抱いて、俺は深い眠りへとついた

戦いのそのあと（後書き）

という事で、ラウラのデレでした

Zeit nach dem krieg

「う、あ……」

天井からのぼやつとした光で、私は眼をあけた

「気がついたか」

その声には聞き覚えがある。――いや、聞き覚えがあるなんてものではない

どこで聞こうと一瞬で判断できる。自らが敬愛してやまない教官ごと、織斑千冬の声

「私……は……?」

「無理な負荷がかつたせいで、全身打撲と筋肉疲労がある。数日は地獄だろうが、まあ耐えろ」

「……薫、は?」

「アイツは特に問題ない。胸を斬られていたが、浅かったんだろうな。医務室に運びこまれた頃にはISの生命維持機能だけで塞がっていたそうだ。まあ、刀傷だから痕にはなるだろうがな。それよりも膝関節方が重症らしい」

「そう……ですか」

教官は私の気を逸らしたかったのだろう。やけに薫の状態について詳しく話した

しかし、アイツが無事であるということはすでに分かっている

それでは、私を誤魔化すことは出来ません

「何が、起きたのですか……?」

ゆっくりと上半身を上げる

全身に走る痛み思わず声が出そうになるが、そこはぐっところえる

「ふう……。一応、重要案件であるうえに機密事項なのだな」

沈黙が部屋を支配する

そこにある意図を汲んだ時、教官は話し始めた

「VTシステムは知っているな？」

「はい。……正式名称はヴァルキリートレースシステム。名前の通り、過去のモンド・グロッソにおける部門受賞者の動きをコピーしたもので……」

「条約において、すべての国家・組織・企業で研究・開発・使用を全面禁止されている。やはり、確認する必要はなかったようだな」

何故、そのシステムの名前が……

「それが、お前のISに積まれていた。巧妙に隠されていたがな。どうも操縦者の精神状態、機体のダメージレベル、操縦者の意思……いや、願望だな。この三つがそろった時に発動するようになっていたらしい。近く、ドイツ軍に委員会より強制捜査が入るだろう」

教官が話し終えた時、気がつけば私は眼をそらしてしまっていた

「私が……。望んだからですね」

あなたになることを……

「・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

「おまえは誰だ？」

「わ、私は・・・私は・・・」

私はラウラ・ボーデヴィツヒではない

たしかにそうなのだが、それを口にしようとしたら、引っ込んでいつてしまう

遺伝子強化実験体C-0037というただの記号ですら、それは私に当てはまらない気がしてくる

私が誰であるか。その答えを、なぜかハッキリと言える自信がない

「誰でもないならちょうどいい。お前は、これからラウラ・ボーデヴィツヒになるといい。なに、時間はいくらでもある。あと三年間はこの学校に在籍することになる。それにまあ、死ぬまではずっとだ。たつぷり悩めよ。小娘」

「あ・・・」

あの厳しい教官が、私の事を励ましてくれた

その事実だけで、胸がいっぱいになってしまい、何かを言うべきなのだが、何を言っているかわからない

教官はベッドから離れ、仕事に戻るようだった。だけど、結局何も言えず、餌を待つ雛のように口だけが開いていた

「ああ、それと」

思い出したように、こちらを振り返る

「お前は、私にはなれないぞ」

そういつて、すたすたと去っていつてしまった

「ふふっ……」

ずるい人だ。自分の言いたいことだけ言つて去つてしまった

「ふふ……はははっ！」

《自分で考えて、自分で行動しろ》
そう言われた気がした

笑つたびに腹がズキズキと痛んだが、それさえも嬉しく感じてしまう
負けたのに、今までで感じたことのないくらい心地よさを覚えて
いる

ラウラ・ボーデヴィツヒは、これから始まるのだから――

「ははは……よし、それなら……」

私はそのまま、ある人物にプライベートチャンネルで通信をつなげた

場所は遠く、ヨーロッパはドイツ軍の演習場

「35秒の遅れだ！何をしている！急げ！」

ドイツのIS部隊である、シュヴァルツェ・ハーゼ黒兎隊の副隊長、クラリツサ・ハルフォ

「フは今日も訓練で怒号を飛ばしている

十代の女子が多い黒兎隊の中で、彼女は唯一の二十代
厳しくも面倒見良く牽引する、隊の『お姉さま』的ポジションとな
っている

その彼女が駆る専用機、『シュバルツエア・ツヴァイク』に突如、
緊急回線ともいえるプライベートチャンネルに連絡が入った

『クラリッサ。私だ』

「隊長ですか。定時報告にはいささか早い気もしますが・・・」

『いや・・・そうではなくてだな・・・すこし、訊きたいことがあ
るのだ』

「ふむ。私に・・・ですか？」

隊長というのは、ラウラの事である

彼女は齡15にして、ドイツEIS部隊の隊長なのだ
ついでに、階級は少佐。ドイツ軍の少佐なのである

『ああ。私一人では、解決できなさそうだな・・・』

「部隊を派遣しましょうか？」

『いや、そういう、軍事的なものでは、なくてだな・・・』

部隊の中でも人に頼るなんてことはせず、隊長なのにどこか浮いて
いた

いつもと違う黒兎隊隊長の様子に、クラリッサは「演習一時中止・
招集せよ」のハンドサインを送る

すぐに集まってくる隊員たち。このあたり、さすが軍人と言っべきだ

「では・・・一体どういった問題が？」

『実はな・・・好きな人ができたのだ』
「・・・・・・・・はい？」

以外な一言に、クラリツサは一瞬思考が止まってしまった
先程の様な規律のある声でなく、半オクターブ程高い声がでた

『だ、だから好きな人ができたのだ。それで、お、男の気を引くには一体どうしたらいい・・・？』
「・・・・・・・・」

『く、クラリツサ？ その、黙ってないでだな・・・』
「も、申し訳ありません。そ、そうですね、日本には『気にいった相手を嫁にする』という風習があります」

『う、うむ・・・』

「そして、日本にはもう一つ、『郷ゴイング・ユウに入つては郷に従え』という言葉葉もあります。日本にいるからには、日本のルールに従え。という、先人の教えです」

『そうなのか・・・』

「つまり！日本の風習に乗っ取り、その男を隊長の嫁にしてしまえばいいのです！」

『な、なるほどな！それで嫁にするには一体・・・』

「そこで誓いのキスです。隊長のキスで気が引かれない男がいるでしょうか？！いやいいない！どんな男だろうとイチコロでしょう！」

『・・・よし！分かった！ありがとうクラリツサ！』

「いえ、当然のことです。・・・武運を」

『うむ！』

そこで通信は切れた

「あの・・・副隊長？」

「隊長は、一体・・・」

「それがだな・・・どうも、好きな男ができたらしい」

それをクラリッサが言った時、何処からともなく銃声が聞こえて来た近くで、どこかの部隊が演習をしているのだろつ。おそらくは

「え・・・」

「「「ええゝゝゝつ！！！！？？？？」」」

まあ、聞こえて来たのはほんの三十秒からそこらで、すぐに女子の声でかき消された

「あの隊長に・・・好きな男が・・・！？」

「私は、本気で織斑教官が好きなのだとばかりに・・・」

「そうだろう、そうだろう。私もそうだと思っていた。だがしかし、隊長が『男の気を引くにはどうしたらいい・・・？』と言ったのだぞ！」

「「「きやあゝっ！」」」

「だから私は教えた！日本には『氣にいった相手を嫁にする』という風習があるという事を！」

「さすが副隊長！日本に詳しい！」

「当然だ、私は伊達や酔興で日本の少女漫画を読んでいる訳ではない」

そういうクラリッサは、決めポーズをとっていた

先程までの、背筋が自然と伸びる様な空気はなりを潜め、代わりにそこに漂うのはES学園の女子生徒たち（99.9%）となんら変わらない空気だった

このあたり、さすが十代の少女たち（と、二十代の女性）と言うべきか

「か、かつこいいい・・・」

「そんなかつこいい副隊長が好きです！」

「でも、可愛くなつた隊長はもつと好きです！」

「そうだろう！私もそうだ！よし、今日は祝いだ！」

「たしか、日本ではこういう時、赤いお米を炊くんでしたよね」

「そうらしい。おそらく、血よりもなお濃いものがあるという事なのだろうな」

「さすが日本！痺れます！」

「懂れます！」

「よし・・・諸君！現時点を持って訓練を終了する！今すぐ兵舎食堂に向かい、赤い米を炊くぞ！」

「はい副隊長！」
おねえさま

その後、黒兎隊にジャックされた兵舎食堂では、血よりもなお濃い赤をした米が出された

においや見た目からして、おそらくはケチャップ、タバスコ、トマトピューレ、赤パプリカ。とにかく食堂の赤い食べ物一通りを一緒に炊いたのだろう

――全員分を、まとめて

米派のドイツ軍歩兵一同（大多数が男）が、泣きに泣いたことを、ラウラが知ることはなかった

Zeit nach dem Krieg (後書き)

・・・まずタイトルですが、ドイツ語で戦後という意味だそうです。
読みは調べなかったのできかないください

ラウラと黒兎隊がメインだったので、何となく出しただけです

時期的には前回のチッスのきっかけを書いたものです
もう少しまともなオチを考えていたのに・・・いつの間に

そして日常へ

「うげ……時間ぎりぎりか……」

時間ぎりぎりになった理由は簡単。事情聴取を受けていたのだ
まあ、事情聴取自体は三十分前ぐらいには終わっていたんだけど、
その、膝が痛くて思うように歩けなかったのだ

「うー……鎮痛剤のんでこの痛みってなんだよ……」

『まあ、結構すごかったからね。……《いろいろ》と』

その《いろいろ》にスプラッタのような惨劇が混じっていない事を
祈るばかりだ

痛む足をさすりながら教室に入ると、シャルルがいなかった

ついでに言うとならウラもない。だけど、あいつは俺と入れ替わり
で事情聴取だから、当然と言えば当然だ

ちなみに、もう全快らしい。うらやましいっいたらありやしない
席につくと同時に、始業のチャイムが鳴った

「み、みなさん、おはようございます」

朝から山田先生はふらふらしていた。朝からショックなことでもあ
ったのだろうか

「織斑くん。何となく先生を子供扱いしようとしているのが分かり
ますよ。私、怒りますよ。もう……」

ホントに顔に出る奴だな

しかし、山田先生には覇気がなかった

「今日は、転校生を紹介します・・・というか、もう紹介は済んでいるというか・・・」

また転校生か？

IS学園の性質上仕方ない気もするが、今月で三人目とか、一学期も終わってないのに四人目とか、いくらなんでも多くな・・・

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

な・・・え？

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願ひします」

「という事で、デュノア君はデュノアさんでした。はあ・・・また部屋割が・・・」

問題点はそこなんですか。というか、シャルルってホントの名前はシャルロットっていうんだね

「デュノア君って女？」

「おかしいと思ったんだよね！美少年じゃなくて、美少女だったってわけね」

「織斑君、同室だから知らなかった訳じゃー」

「ちよつとまって！ 昨日男子って大浴場使ったよね!？」

「え！じゃあ柳瀬君も知ってたの!？」

「大浴場じゃなくて、大欲情じゃないのそれ!」

こら、白昼堂々と女子がそういう事を言うもんじゃありません。と
いうか、第四部の後の方とネタがかぶってるぞコラ

『・・・メタ発言は自重しようよ。マスター』
メタ発言という発言そのものがメタだ！

そんな話とはもなく、教室は次第に騒ぎ始め、あっという間に飲ま
れる

「・・・なんつーか、なんつーかなあ・・・」
『なにか、とってもやな感じだよね・・・。こつ、虎が飛んでくる
ような・・・』

Bannon！

ドアを蹴破ったかのような音を立てて、ISが飛び出してきた
こんな時間に、ISを展開できるクラス外の人間は、一人しかいない

「一夏あああつ！」

凰鈴音だった。ISを展開し、烈火のごとく怒っている
うわぁ・・・虎じゃなくて龍がきた。甲龍だけに
ちなみに、龍砲はすでに撃てる状態だった

「死ねっ！」

あ、撃ちだした

『よく、こんな教室内で攻撃とか出来るよね』
十代の乙女とは、そういう、周りが見えなくなるものなんだろうな。

って、そうじゃないだろ！？一夏が・・・

ドオン！

余波で巻き起こった衝撃が開きっぱなしの教科書類を吹き飛ばす
吹き飛ばされた教科書類の向こうでは、汚い花が――

「あーあ・・・あれ？」

汚い花は、そこにはなかった
間一髪割って入った黒い影

シュバルツエア・レーゲンを纏ったラウラだった

「ふう・・・助かったぜ。サンキュ。ところでお前、IS無事だったんだな」

「・・・コアは辛うじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

仕事速いな。壊されたのってたしか昨日だぞ？

「へえ、それで・・・え？」

突然、ラウラが頭を下げた

「その、いままで色々とすまなかった」

「え？・・・あ、ああ。もう過ぎた事だからな。別にいいぞ」
「そうか、それならよかった」

すぐにまたいつもの調子に戻り、ISを解除して席についてしまった

「・・・なんなのよ！アイツ！」

「なんだって、俺に聞くなよ！」

「とにかく、死ねっ！」

そういつて、また龍砲を構える凰

「はいはい。いい加減にしような」

見かねた俺は、とりあえず腕部を部分展開する

「アル。対象は四名。サポート頼んだ」

『わかったよ』

鎖が音を立てて、ある四人に向かう

「わっ？！」

「うわっ！？」

「ちょ・・・なんですの！？」

「きゃっ！」

アルのサポートもあるが、四本のトリックスター全てを操り、凰、一夏、セシリア、篠ノ之の順に捕らえる

「ちょ・・・薫、離せ！」

「何すんのよ！」

「とりあえず、お前たちは教室で暴れるな。他の子が巻き込まれたらどうすんだよ」

「うつ・・・それは・・・その」

「目をそらすな」

「俺は暴れてないだろう!？」

ホントに一直線だな

「わ、私たちは何もしてませんわよ!」

「そうだ!」

「いや、銃と刀取り出すの見たし。そういうのは、廊下でやれ」

「「「きやあああつ!」「」」

「薰!やめて!話せば分かる!」

「問答無用!」

「やめてくれええつ!」

バン!

四人すべてを廊下につまみだし、鎖でドアを閉める

『さあ、一夏』

『覚悟はよろしくて?』

『・・・』

『うわよせなにをするやめアーツ!』

『い、一夏!?!』

ドゴオン! という爆音が、朝から学園にこだました

「・・・ふう。スツキリした」

「お前もなかなかやるな」

「一夏は昨日イイモノ見ただろうからな。そのツケだよ」

「なるほどな。・・・みたいのか？」

「は？」

胸元を広げる仕種をされるまで、なんのことだか分らなかった

「・・・ああ、いや、そういう訳じゃないけど・・・。つか、どうしていきなり一夏に謝ったんだ？」

「お前は言っただろ？『赦すこと』は強さだと。だから、私もアイツを赦すことにしたのだ。そうしたら、アイツに対する、今までの自分が子供のようだったと思ってな・・・」

「それで謝ったと。・・・なるほどね」

「・・・偉いか？」

「え？・・・ああ、偉いんじゃないか？」

赦すことも赦されようとすることも、結構勇気いる事だし

恨みごとかなしで許せた一夏も、素直に謝ったラウラも偉いと思うぞ。少なくとも俺は

「偉い事をした人間には、報酬と言つものがあるはずだが？」

「え・・・いや、なんのこと？」

「だから、報酬だと言っているのだ」

んー？

報酬・・・褒美・・・ごほうび・・・

ティンときた！

「これか？」

ナデナデ

「ん・・・悪くないものだな」

「そうか？・・・よしよし」

頭をなでてやると、ラウラは気持ち良さそうに目を細める
すげえ。みさとみたいだ

『いいなあ・・・なでなでいいなあ』

『柳瀬君って、こうやってみるといいお兄さんだよな』

『どうして私たち、今までスルーしてたんだろ？』

『さあ・・・？』

そんな女子談義の中でも、穏やかな時間を過ごしている二人
忘れてはいけけないのは、廊下は阿鼻叫喚の地獄絵図だという事だ

いまだに銃声や、壁のへこむ音、金属と金属がこすれる音が聞こえてくる

そして、そんな地獄を潜り抜けた修羅が教室内にやってきた

「まったく。お前たちというものは・・・青春を謳歌するのは一向

に構わんが、時と場所を選べ！！」

スッパーン×7

朝から、クラスには快音が響いた

そして日常へ（後書き）

という訳で、第二部は次でラストです

エピソード：深淵への交渉人

「ねーねー。マスター」

「なんだ？」

「シャルル・・・じゃなかった、シャルロットちゃんのこと、いいの？」

「ん？・・・ああ、今はそっとしておくしかないんじゃないのか？
解決策もないし」

「フランスのシャルル・デュノアのデータを消しちゃうっていうのは？」

「んー・・・。それだけじゃだめだろ。デュノア社の人にも口止めしたりしないと、消したところでまた登録されるだろうし・・・」

「むー・・・あ！ そうだ！ マスター、ボク、ちよつと用事できた！ じゃ！」

「え？ あ、おい・・・何なんだ？」

「つか、意識なのに出入りできるんだ・・・変なの

そこは奇妙な部屋だった

何かよく分からない部品が散らばっていて、ケーブルが樹海のように広がっている

「いやあ、久しぶりに声が聞けて、東さん嬉しかったなあ。やつぱりちーちゃんも篝ちゃんも素敵ングだよ。夕陽の向こうにはいいかないでほしいよね」

その奇妙な部屋の中で、一人の女性がそんなことを言いながら、うふふと笑みを添える

部屋も奇妙だが、その人物の服装も奇妙だった

後ろにある大きなリボンが特徴の、真っ青なブルーのワンピース頭につけたカチューシャには、白ウサギがついている

この、『一人不思議のアリス』状態の人物こそ、第の実姉であり、独力でISを開発させた天才、篠ノ之束である
そして、樹海のような部屋は、彼女の秘密のラボである

「さあて・・・また暇になっちゃったな。何処のコンピューターにハッキングしようかな」

ピピピ

今度は機械的な音が、ラボのディスプレイより響く

「おっとお！今日はお客さんの多い日だねえ・・・よっと！」

ディスプレイのボタンを押すと、そこには赤い髪の子供がうつる

『あ！通じた！よかったあ・・・』

「おう！アーちゃんの方からここに繋がってくるなんて以外だねえ。寂しくなったのかい？」

『ちよつとだけね・・・って、そうじゃなくて、ちよつと頼みたい事があるんだけど、いいかな？』

「はいはい！可愛い可愛いアーちゃんの頼みだからね！束さん頑張

「つちゃうよ！万事屋だつて目じゃないつてぐらいに！それで、頼みたいことつていうのはなんだい？」

『それはね・・・』

・・・

「・・・はいはいなるほど。フランスね。地図はあるかい？」

『うん。あとは自分でやる』

「相変わらずアーちゃんは自分でやりたがる子だねえ。もつと甘えても良いんだよ？」

『一人で出来るもん！』

「あつはつは！そつかあ。東さんちよつとさみしいなあ。あ！そうそう！近々IS学園に行くんだけど、何かほしいものあるかい？」

『ほしい物？うーん・・・あ！ボクね、いろんな事が知りたいんだ！』

「アーちゃんらしいね！アーちゃんの持つ能力は知識や情報があつてこそものだからね、それを求めるのは当然だよね。で、その知識の使い方とかはいいのかい？」

『うん。あとは・・・』

「自分でがんばる。でしょ？ おっけいだよ！東さんの持つてる情報全部あげちゃう！」

『うん。ありがとう、あ、あとそれと・・・もう一ついいかな？』

「なんでもいっていいよ！お母さんにもつと甘えなさい！」

『あのね、今のマスターと一緒にいるとね、色々な人とお話してるんだ。ボク、きいてるだけでも楽しくて・・・それでね』

「・・・ははくん。それとお話してみたいと？」

『うん。だから、そういう事ができるような何かを・・・』

「おっけいだよ！さあゝて東さん頑張っちゃうもんね！アーちゃんがほしい物はそれだけかい？」

『うん。じゃあ、行つてきます！』

「頑張つてね」

ぷつんと、画面が落ちる

「さーて、ママちょっとがんばっちゃおうかなあ！……でもデータだけ消してもどうしようもないのにね。やっぱりまだアーちゃんは子供だなあ」

その日の夜、フランス政府が保持するデータ全てが、何者かによって抹消されていた
一時的な混乱はあったものの、バックアップにより事態はほどなくして終息した

しかし『シャルル・デュノア』に関するデータがバックアップすらされなかったことに、気がついた人間はいなかったとか

「社長。IS学園に送った《例の子》についてですが……」
「続ける」

「はい。どうも『アルカナ』と『白式』のデータ奪取は難航している模様です」

「……無能者め。さっさと取ってくるように伝える。どんな手段を講じても構わん」
「はっ」

ここはデュノア本社の社長室

「このままでは、わが社は倒産。やはり、どこかの社の傘下に収まるべきか・・・」

第三世代ISの案件はいくつか出ている

リヴァイヴの上位型としての第三世代。まったくの新規構想の第三世代

だが、どれもイマイチぱっとしない。構想を掛け合わせてみても決めに欠けるものだった

「あの無能者め・・・」

ふと、社長室の照明が落ちる

備え付けられたパソコンだけが、煌々と輝いている

それは、どこかとつながったようだった

『デュノア社の社長さんですか？』

「いかにも、私が社長だが・・・何者だ？」

『ちよつとワケありでして、名前は明かせません』

「・・・ひょつとして、今の状態も君の仕業かね？」

『はい。一対一で話をしたかったので。ご無礼をお許しください』

「構わんよ。ただし、ここまでしたのだ。わが社にとって無益なものではあるまい？」

社長の目がギラリと光る

『おそらくは』

「よろしい。続けたまえ」

『実は、私はある第三世代型ISの稼働データを入手することに成

功しまして。それを提供させていただきたかったのです』

やはり目にはギラリとした光を湛えたまま、社長は口を開いた

「・・・条件は？」

『簡単です。《シャルル・デュノアの抹殺》。あ、もちろん物理的に殺すって意味じゃないですよ。書類上、という意味です』

『無能者』の事後処理。たったそれだけで、のどから手が出るほど欲しい第三世代のISが手に入るのだ

その条件は、破格としか言いようのないものだ

社長としてもすぐに取引に応じたかったが、すぐにはうなずかない。むしろ怪しいとすら思う

「ふむ・・・。それが第三世代ISのデータであることの証明は出来るかね？」

『そこは、こちらを信用してもらうほかありません』

「顔も見せない相手を、か？」

『はい』

「ふん・・・良いだろう。その条件をのんでやる。第三世代のデータであれば、約束どおり《シャルル・デュノアの抹殺》を行おう」

『・・・それを、ちゃんと証明できますか？』

「そこは、こちらを信用してもらうほかかないな」

少しの沈黙の後、耐えられなかったかのようにパソコン側から、幼さの残る声が聞こえた

『・・・分かりました。では、私はこれで。データはこちらになります』

「うむ。お互い有意義なものだったな」

回線は切れ、社長室には明かりが戻った

「まさか、こんな形で使い物になるとはな。しかし・・・あれをどうやって処分したのか・・・」

広告塔として宣伝してしまった以上、情報の全てを止めて自然消滅を待つか

それとも、アレの存在が霞むほどの何かをだすか・・・
考えながら、送付されたデータをあけてみる

「これは・・・！？ ふふふ・・・ふはははははっ！」

『ただいま』

「おう。おかえり。何してたんだ？」

『別に何もしてないよ。いうなら、ちょっとおうちに』

「へえ。・・・何処にあんの？」

『ふふふ・・・ヒミツだよ』

「えーっ・・・教えてくれよー」

『そのうち、ね？』

エピソード：深淵への交渉人（後書き）

という事で、第二巻エピソードでした

シャルロットが無能者扱いであつた点については、色々な人を敵に回しそうで怖いです。悲しいことですが、デュノア社社長なら平気でいいかねない。そう思ったので、なつた次第です

さてさて重要なお知らせです

一日おきに投稿していたこの物語でしたが、十一月中ごろまで更新を止めます

『止めるかも』ではなく『止めます』

詳しい話は、活動報告にて

主人公設定 柳瀬薫（前書き）

私の地域はド田舎なためか、アイマス2は店頭ですら並んでませんでした

売り切れとかは諦めつきますけど、店頭ですら並んでないって・・・
予約しておけばよかったです

さて、そんなことはともかく、今回からその場しのぎにもならない
オリ主 and オリIS 設定になります

私の頭の中にはもう二人くらい出来あがっている訳ですが、まあ、
それは本編に登場してからという事で

主人公設定 柳瀬薫

柳瀬 薫 やなせ かおる 16

黒目黒髪の、普通の日本男児
ちよつと長めの髪を、白いカチューシャでオールバックにしている
というか、今現在その髪型しかできない

春休み旅行の最後に行った博物館の展示品だったISを起動させた
ため、IS学園に入学させられた経緯を持つ
一夏との相性はなかなかのもの

実家は田舎の方にあり、夏休みには毎年親戚共々全員集合している
家族は、みさとという10歳の妹と、兵器オタで主夫な父親がいる
Chapter 2 終了時では未登場だが、他にも一家の大黒柱とな
っている母ちゃん、元気なおばちゃんとおじいちゃん、それに従
姉がいる

詳細はまた日を改めて

ISに関しては初心者で、ようやく基本操作を身につけたレベル
ステータス

格闘：滅多にしないケンカで身につけたレベルのため、剣術云々に
はほとんど通用しない

射撃：センスがあるらしい。が、まだまだ経験不足

能力：集中するとやってのけるタイプ

心情：相手を赦すこと。それと、周り皆と笑って生きること

戦闘傾向

射撃・格闘共に同じくらいだが、気持ち格闘が多く、近距離戦闘になりがち

だが初心者なのであつという間に距離を取られたり、不意の一発でダウンすることも多い

主人公設定 柳瀬薫（後書き）

こんな感じでしょうか

薫に関してはあまり煮詰めてません

今後、細かな設定が増えるかもしれないです

さて、次はアルカナについてです

オリジナルIS Arcana（前書き）

という訳で前回に引き続きオリジナルIS：アルカナの設定です

えーと・・・薫君と比べて、文章量がかなり多くなっています
というか、作者のコメント付きです

ええ、ノリでつけました

また、最後の方には中二及び作者論が待っています
間をあけておりますので、そういうものがお嫌いな方は、ブラウザ
右上の戻るを押してください

オリジナルIS Arcana

アルカナ
Arcana

通常のISよりも過敏に自己進化を行うIS

コアそのものの学習能力が高く、人の言葉を理解し、搭乗者限定ながら会話を行う事ができる

作中での機体名は、主にカナ表記で使われます。アルファベットだとながいですし

《複製》^{トレース}という特殊能力を持ち、装甲を自在に変化させる事ができる
これは、収拾や経験で得たデータを、搭乗者に最適な形（もしくはコアの趣向）で反映させるというもの。いわば簡易形態移行
形態移行と違い、データさえあれば装甲の形状すら変化させることができる

ただし、トレース直後約二時間は不安定で、ダメージが増加する。

この時装甲についた傷は、安定後も残る

ちなみに、装甲素材は拡張領域内に膨大な量が内蔵されているらしい
待機形態は鎖状のアクセサリ。輪の大きさは変わらないものの、伸縮自在

普段はウォレットチェーンとして腰についている

アル

ISアルカナのコアの人格。アルカナでは長いので、薰より『アル』と名付けられた

本来ISコアの人格は、内部の深層にあるものののに、それがなぜか表面化したもの

一人称は『ボク』で、子供っぽい喋り方をする

戦闘中は、主にビット操作や機体制御など、搭乗者のサポートをしている

今のところ「サウンド・オンリー」

情報収集に余念がなく、眼となるハイパーセンサーは待機状態だろうと簡素なカチューシャとなって常に展開されている

《作者より、裏話?》

ISとしてですが、ネタは既出な気がした中でのスタートでした
ネタは既出でも、機体の方で頑張ればいいかなって思いまして

ついでにアルという名前の相方って結構多い気がします

バーニイの相方もアル。エドの相方、というか弟もアル。ソースケの相方も、たしかアルだった気がします。ACERでちらっと聞いたのですが

この三人とそのアルは、相方という表現は微妙な気がしますね
ですが、多分私の中では潜在的に相棒はアルってなったのかもしれません

コアの意識のイメージは純真無垢な子供です。まだ物心ついて間もない、知識だけが先行している・・・みたいな

うまく表現できているのかは甚だ疑問ですが・・・

ー以下、今まで登場した形態・タイプー

各タイプの名前については、基礎形態を除いてラテン語を参考にしています

語感を意識したため、発音云々を文法無視して変えているモノがあります。ご注意ください

『アルカナ 基礎形態』

アルカナの基礎となる純白の装甲

参考に出来る機体デザインがなく、コア自らが手探りで作り上げた

そのため形状は、小学生か幼稚園児が粘土でつくる人の様な、歪で曲がったデザインとなっている

武器は鉄棒一本。拡張領域は装甲素材や複写処理などで埋まっている

《作者より》

自分の力だけで装甲を生成しようとした結果、失敗してしまったという流れです

傍目から見ればただの馬鹿者でしかないのですが、この苦い経験からアルは学んで、色々なデータを取り込むようになった、という流れも持っていたりします

モチーフは、タロットカード0番の『愚者』

『カルレム・サジタリー』

『青い射手』の名の通り、青い中距離射撃向けの形態
ブルーティアーズの他に参考に来るデータがないため、形はほぼ
パクリ

相違点はスラスターの数。こちらは角錐状のものが背中に一基のみ

武器

アサルトライフル『フルメン』と、攻撃支援ビット『トリックスター』。そして接近戦迎撃用装備である『グラディウス』を装備

次形態への試験装備で、左腕にワイヤーカッターを模した鎖、『カテナ』を搭載

個々の輪をつなげるようにして展開するため、実質長さは無限。出し過ぎると引っ込めるのが面倒

衝撃や力に対する強度は十分だが、熱に弱い

《作者より》

初めて戦った相手の、ブルーティアーズのマネッコです

本当の初めての相手は、入試の打鉄ですが、なぜかノーカウントです。というか忘れてました

モチーフはそのまんまブルーティアーズです

『アーテルレムレス』

『黒い幽霊』の名を冠する、中・近距離戦闘向けの形態
骨の様な全身装甲を、黒くてボロボロのマントが覆っている
髑髏の様なデザインの、フェイスガードを兼任するハイパーセンサ
ーが死神という印象を強める
マントはボロボロのくせに耐衝撃性・耐熱性に優れる
胸部装甲には、真一文字の刀傷が生々しく残っている

武器

二丁のビームクロスボウ『フルメン』と、ワイヤーブレード『トリ
ックスター』。そして大鎌の『グラディウス』を装備

グラディウスの意味は剣だが、ここでは固有名称なのでなんでもあり
トリックスターは、両手首に各四基内蔵されていて、そこは枷がつ
いているかのようにふくらんでいる
能力的には『カテナ』と同じ

《作者より》

第二部後半で登場しました、トレースの新たな形態です
モチーフは、タロットカードより13番（死神）です
愚者とは、タロットカードの中でも、同じ欠けた者同士です
愚者には数字が、13番目のカードには正式な名前がないんですよ。
たしか

ISとしては、今後出場予定の形態の中でも、私一番のお気に入りです

言わずもがな、第二章冒頭のエピソードが反映されています。というか、この機体が先で、エピソードは無理矢理くっつけたものです。さて、ラウラを助けたシーンだった訳ですが、何故騎士サマではなく、死神だったのか

なんというか、自分的にはここでの死神は適役だったと考えています。意表を・・・つけましたよね？

後付け的な理由も一応は考えてあります

宗教観についてうんですかね？　そういう価値観の問題が出てくるような気がします

しかも私の持っている情報は、ウィキペディアで調べただけの浅いものです。程度の低いものです

さて、注意書きはしたので色々書かせてもらいます

死神は、彷徨える魂が悪霊になる前に、冥界に送る神です

冥界に送られた魂は、穢れの一切ない清らかな魂となり、再び現世に生まれ変わる・・・そういうもんだと、私は思っています

この考えなら、死神はつまり、転生・変化を促す存在といえます。

つめじはそつごつ事であ

オリジナルIS Arcana（後書き）

という訳で、オリIS：アルカナでした

さて、これよりしばらくの間更新は止まります
皆様、戻って来た時には、またよろしくお願いいたします

ブログ：風薫る朝（前書き）

という訳で予告通り更新再開です

ですが問題が二つ

- 1．ストックがない
- 2．三巻が行方不明

という訳で、更新遅延＆オリジナルな方向へ行くかも・・・
長くなりますが、本編へどうぞ

プロローグ：風薫る朝

「ほっ・・・ほっ・・・」

もうすぐ夏休みという今日この頃。夏真っ盛りなのだが、やはり早朝は少し肌寒い

が、それも目を覚まさせるいい要因となっている

軽快なリズムを刻みながら、俺はグランドの外周を走っている

この間のトーナメントの時、『すこしは走りこんで体力をつける』と、師匠兼相棒からのありがたい言葉があったからだ

はじめは朝起きるのもしんどかったが、今ではもう習慣となっている
まあ、起きられるようになったものあいつのおかげなんだけど・・・

『マスター。そろそろ時間だよ』

「お？そつか？なら戻ろうか」

んー・・・時計いらすっていいな

『・・・ボクって、時計扱い？』

「んー・・・時計に人物認証機に計算機。あとはとても便利なロ―プ」

『・・・なんだか泣きたくなってきたよ』

「冗談だつて」

『冗談に聞こえないもん・・・』

そんな話を、もう一人の相棒の『アル』としながら、俺は自分の部屋に戻った

寮に戻ると、一夏が気持ち良さそうに寝ていた
コイツめ・・・

「やっと戻ってきたか」

「おう。やっと戻って・・・って、ラウラ。起きてたのか」

俺のベッドの上には、ラウラがいた

長袖のメンズワイシャツを着ている。もちろん他には何も着ていない
そそのものがなかったといえば嘘になるが、もう慣れてしまった

そう、あれはあるすがすがしい朝のことだった・・・

『・・・はっ！？ら、ラウラ！？なんで俺の布団の中に居るんだ
よ！？』

『日本では、これが将来結ばれる仲の者同士の起こし方らしいな』
『誰だそんな知識教えたの！？ ああ、いいから！とにかく、コレ
着てくれ！』

『・・・何故だ？夫婦とは、何事も包み隠さないものだろう？』
『そうだろうけど！ほら、一夏もいるから・・・』
『むう・・・仕方ないな』

という事があったのだ

俺、たしか『今日だけだかな』って言ったと思ったんだけど・・・
ちなみに、初めて見た時は全裸の時よりもドギマギしたのはここだけの話

『しかし、効果はてきめんだな』

『はあ？』

『目は覚めただろ』

『・・・男女問わず、目が覚めない奴の方がおかしいと思う』

次には、けろつとした顔でこのやり取り

積極的なのは嫌いではないが、もう少し恥じらいというものをだな・

・

「何故いつも私を置いていってしまうのだ？」

「気持ち良さそうに寝ているのを、起こすのも悪いかと思ってな」

がつしりと掴まれているのを抜けだすのって結構大変なんだぞ
下手すると・・・なんでもない

「いや・・・しかしだな・・・」

頬を赤くして、ムスツとふくれっ面になるラウラ

ああ、そのほっぺをツンツンしたい

「その・・・おまえがいないと・・・」

「それよりも、朝食までもう少し時間があるな」

「うつ・・・そ、そうだな。何をするんだ？」

ラウラは落ちつかないのか、一度束ねた後ろ髪を散らす
ふわりと舞う、朝日に輝く銀色の髪は、いつ見ても惚れ惚れしてし
まう

「・・・？ 何を見ているんだ？」

ラウラがこっちを見る

いつのまにか、見入ってしまったようだ

「いや？ なんにも？」

「おかしな奴だ・・・」

色の違う、ラウラの双眸が不思議そうにこちらを見てくる
吸い込まれたかのように、視線を離すことができなかった
そうやって見ているうちに、ふとあの夜の事を思い出してしまふ

「そういや・・・なんであんなこと・・・」

「ん？ あんな事とはなんだ？」

「いや・・・その・・・キスのこと・・・」

全身が赤くなるのが分かる
やっぱり、改めて聞くと恥ずかしい

「初めてだったんだが・・・」

恥ずかしながら私、柳瀬薫はアレが初めてのチュウ。ファーストキ
スである

「そうか」

「そうか・・・って、おま」「わ、私だって初めてだったんだぞ？

まあ、嬉しくはあるな。うん」

そういつて、ラウラも顔を赤くする

「・・・」

「・・・」

お互いがトマトになってしばらく。何も言えないまま、じっとただラウラを見る

「お、お前はどつたのだ？ その・・・嫌、じゃなかったか？」

「そ、そうだな・・・嬉しかった」

人の好意を嫌がる理由なんてない。まあ、ストーカーとかは論外だけれど

誰かが自分を好いていてくれるというのは、それだけでも嬉しいものだ

ああ、こんな自分でもちゃんと見てくれている人がいるんだ。と、少なからず救われたような気持ちになる
俺はそう思う

「そ、そうか・・・ふふっ」

ラウラは照れながら笑う

その顔は、とても、その・・・可愛かった

「なら・・・また味わいたいか？ その、喜びを・・・」

「・・・ラウラこそ」

どちらともなく近づいてゆく

そして、そのまま唇がふれ――

『・・・マスター、右』

「ん？」

「うーん・・・。ふあぁっ・・・。」

「「・・・。」」

「・・・あれ？」

――ふれ合う直前で、一夏が目を開けた
何故にこのタイミングで目を覚ます。ルームメイトよ

「・・・邪魔したか？」

ヒュバツ！

ガシッ！

グググッ！

「イタタタたっ！？えっ！？な、なにっ！？」

「なぜ・・・今起きてしまうのだっ！？ もう少して・・・もう少しでっ」

「え？あ、あれ？いつの間に！？」

隣にいたと思ったラウラは、気がつけば一夏を組みふせて、よく分から
ないが、寝技を極めていた
・・・ホントに、仕事人だなあ

『それでいいのマスター！？』

「入るぞ一夏。早く支度しないと朝食が――」

「「あ」」

そしてここで篠ノ之である

おいおい・・・目に見えてかたまっているぞ

まあ、裸ワイシャツの女に寝技を極められている一夏。シニールと言えばシニールだ

ラウラがマウントポジションとって組みふせている姿は――あ、なるほど

「あ・・・朝から何をやっているか！この軟弱者め！」

「ほ、箒！？話せばわか・・・」

「問答無用！大人しくラウラごと斬られろ！」

「なんだよそれ！バカ！」

「バカとなんだ大バカ！」

一夏は、朝から災難だなあ・・・

女難の相が出ているんだろうな。あいつ。そしてそれは一生消えないんだろうな

薪割りみたいな姿勢で、真剣を振りかぶる篠ノ之

ああ、一夏が薪みたいに真つ二つ・・・ん？ 真剣？

「つて、真剣はやめろよな！？シヤレになんないから！」

『つて！えっ！？ちよっ！マスター！？』

「必殺！とつても頑丈な鎖アタックっ！」

『うわああああっ！？！？』

待機形態のアルを投げて、篠ノ之の手の甲を叩く

ばっしーん！

「いたっ・・・」『いつたあっ!』

さすがは剣道達人級。正確な級は知らないが、手の甲を叩かれたくらいじゃ剣を離すことなんてしないようだ
だが手の甲を叩いたおかげで一瞬の隙が生じる

「さすがに、私まで一緒に斬られてはかなわないからな」
「む、むう」

その隙に、ラウラがISを部分展開。得意のAICをかける
つかAICってIS以外にも通じるんだ・・・便利だなあ

「はあ。・・・とりあえず落ちついて。朝食でも食べに行こうぜ？
そろそろ食堂も開いただろうし」

「うむ。そうだな。私も腹が減った」

「だろ？ とりあえずラウラも篠ノ之も着替えてこいよ。俺らも着替えるから」

「あ、ああ・・・」

「うむ」

『うう・・・痛いよお』

よしよし。ご苦労さま

「・・・」

場所も時間も変わり、ここは一年生用の食堂
俺たち四人は、少し遅めの昼食を取っていた

隣にラウラ、目の前に一夏、対角に篠ノ之だ

ラウラは、今日はパンとコーンスープ、それにチキンサラダ。一夏は納豆に焼き魚定食。篠ノ之は煮魚にほうれん草のおひたし

なるほど、どれもつまそうだ。さすが食堂のおばちゃん

ちなみに俺は・・・

「よく大盛りのコーンフ레이크二杯で午前もつよな」

「甘いな。フ레이크をコーティングしていたココアがしみでた牛乳よりも甘い。俺はサラダやデザートもしっかり取っているぞ」

「そうなんだ・・・」

むっ、興味なさげだな

不死身の殺し屋の強さの秘訣は、大盛りのコーンフ레이크二杯なんだぞ。まあ、義手つけてまで銃を埋めようとは思わないけどさそれに、朝に限らず、食事で野菜を摂ることは重要だろ

ちなみにサラダはイタリアンドレッシング。異論は認める

『認めるんだ。そこは《異論は認めない》じゃないの?』

だって、青じそドレスッシングだって、胡麻ダレだって、フレンチドレッシングだってうまいもん

『こだわりのないの?』

べっつにー?うまければそれで

「つーか、一夏こそ結構量多いよな。ご飯大盛りだし」

「これくらいしつかり食わないとフルには動けないからな」

「ふーん。まあ、いいか。それではみなさん、両手を合わせて」

「・・・いただきます」「・・・」

いただきますの合図とともに、各々の朝食を食べ始める

好き嫌いは仕方ないけど、食べ残しは絶対ダメだかな

もぐもぐ

チロツ

はむはむ

チロツ

「・・・一夏、人の朝ごはんをチロチロと見てるなよ」

「ごめん。うまそうだったから。つい・・・」

『うまそうじゃない、うまいんだよ。って、おばちゃんいうよね』
実際うまいからなあ

『ボクはそういうの食べられないからなあ・・・どんな感じなの？』
どんな感じって・・・当たり前のようにやってたから・・・どう答えればよいものか・・・

「・・・薫、たまにはパンでも食べたらどうだ？ そんな物ばかり食べていたら、噛む力がなくなるぞ」

「ん、それもそうだなあ」

「だろう？ 仕方がないから、私のを分けてやろっ。ほら」

ちぎったパンを俺の方に向けてくる

「じゃあ、ありがた（スカッ）・・・あれ？」

食べようと思った瞬間、手をひっこめられる
結局、開いた口には空気が入ったばかりだった

「・・・ひでえの」

「今朝の仕返しだ」

そういつて、ラウラはいたずらっぽく笑う
今朝って俺なんかした？

「ほら・・・はむっ」

「なんで口にくわえるんだよ・・・」

「かじっていいぞ」

あー・・・そういう・・・

「って、んなこと出来るか！それじゃあキスマがいー」

ダァン！

「・・・食事中ぐらい、静かにしたらどうだ？」

ギン！

篠ノ之が、机を叩き、にらみをきかせる

ふっ、初めてあったころのラウラに鍛えられた俺にとって、こんな
睨みなど・・・

『マスター、足震えてるよ』

黙ってる！あんな怖い笑顔してんだぞ！？目の光が消えてるんだよ
！？ラウラだってあんな顔しながら睨んでこなかったぞ！？

「ふむ・・・嫉妬か？」

「な、なにいつ！？」

「自分ができないから、うらやましいのだろう？」

「誰ができないものか！い、一夏っ！ んっ・・・」

そういつて、篠ノ之は自分の味噌汁を口にふくんで、一夏に迫る

どうでもいいけど、味噌汁をミソスープっていうと、なんかリッチに聞こえるよね

でも味噌汁っていうと『オフクロの味』って感じで素朴な暖かさがあるよね。言葉ってフシギ

『ど、どうする・・・？』

『腹あ、括るしかないか・・・』

『決断早いぞ！？』

『大丈夫。朝食取るにはもう遅い時間だ。セシリアも凰も来ないだろう。なら・・・』

『どうしてそこでセシリアと鈴が出てくるのかわからないが、誰にも見られないなら・・・』

『大人しく従っておこう』

こんなアイコンタクトが、一夏と俺の間であった結果、『殴られたくない』という方向で決着
いやあ、便利だよなあ。アイコンタクトって

「・・・よし」

「やっとその気になったか。ほら」

覚悟を決めて、パンを口移しでもらおうとすると

「ち、遅刻だ遅刻だああっ！！！」

そういつて、シャルロットが食堂に飛び込んできた

二人とも、それを見るなり口に含んでいたものを急いで飲み込んだ

た・・・助かった。ありがとう神様仏様シャルロット様

『別にもうキスした仲なんだから、別にどうでもいいじゃん』
『そういう事言わないの！TPOだ！TPO！タイム プレイス オケーション 時間！場所！場合！』
『そういうわりには、鼻の下が伸びてた気がするよ？』
なっ……くっ！

「つて、遅刻？」

「そつだよ！もう時間が……」

時間を見る

「……なるほど、たしかに遅刻してしまうな」

「だったら、なんでそんなゆっくりと」

「今日が平日ならな」

「え？」

「……今日は、日曜日だぞ？」

「……あ」

そう、今日は日曜日。部活はどうかは知らないが、授業や実技はない日

ちなみにここにいる全員、今のところ部活に入っていない。あ、いや、篠ノ之はたしか剣道部に所属しているらしい。一夏から聞いたんだけど、俗にいう幽霊部員と言っやつだ

まあ、とにかくだからこそ、こっやってゆっくりと食事を取っているのではないか

「だ、だったら、僕もゆっくり食べようかな？」

「おう、そうすればいいんじゃない？」

『食器洗いが進まないから、出来るだけ早めに食べちゃって！』

「……」

そんなおばちゃんの声が聞こえて来た

「あ、俺自分で洗いますー！だからゆっくり食べてても良いですかー？」

『そうかい？助かるね！今度ちよつとおまけしたげるよ！』

「まじっすか！？ やつりーい！」

「じゃあ、私もそうさせてもらおう」

『あんたもかい？！助かるよ！』

ゆつくりと、野菜の味をかみしめるように食べる

うん。やっぱり新鮮な野菜はおいしいな

野菜そのものの味を引きたててるドレッシングって、地味にすごいと思わないかい？

これはイタリアンドレッシングではなく、おばちゃん特性ドレッシングだったようだ

「薫・・・」

「ん？」

「なんか・・・すげえよお前・・・」

「そうか？」

別に特別なことした気はないんだけど・・・

『そのあんた達も手伝ってくれるかい？！そしたらのんびり食べてても良いけどー？！』

「じゃあ・・・俺たちはどうする？」

「僕はゆっくり食べたいな」

「私もだ」

「なら・・・わかりましたー！自分たちで洗っておきますー！」

『ありがとねえ！その洗剤使ってね！』

そういつて、おばちゃんは食器洗いを切り上げて、お昼ごはんの仕込みに入った

忙しい人だ。でもその分手間暇かけてるから、こんなにうまいのか。

「しかし珍しいな。しっかり者のシャルロットが、曜日を間違えるなんて・・・」

「ぼ、僕だって、そういう日はあるよ」

「一夏。頬にご飯粒がついているぞ」

「ん、サンキュ」

「ふが、ふが（のんびり食うのも、悪くはないな）」

『マスター、口に物を入れたまま喋っちゃダメだよ』

すまん・・・

団欒のような、仲間との食卓はあっという間に過ぎて行った

「さあ、それでは皆さんと一緒に・・・」

「「「「「ごちそうさまでした」「」「」「」

そのあと皿洗いをしてから、自由時間となった

『レゾナンス』・・・って、何語なの？

「うまい朝食だったな」

「ああ。やっぱり朝ごはんは、皆で食べると一層うまく感じるよな。さてと・・・俺は用事あるからちよつと出るけど？」

「なら、私も一緒に行こう」

「言うと思った」

「それで、何を買った？」

さて、場所は飛んで『レゾナンス』。駅前の大型ショッピングモールにきている

完全に駅とくつついているから駅前とは言わないのだろうが、なぜかみんな駅前というので、俺も駅前ということにしている

和洋中全ての料理屋が存在し、なおかつ大抵のものはここに来ればある

『ここに来てもなければ、この地域のどの店にもない。』そういわれるほどの品揃えだったりする

もちろん内部も結構広い。目的の物の場所にたどり着く前に疲れてしまいそうだった

「んー、まずは水着だな。ほら、臨海学校があるだろ？」

IS学園の臨海学校の目的は『非制限下におけるISの稼働試験』

らしい

華の十代の女子達に配慮してか、初日は完全自由時間で遊んでよし

元々すんでいた場所が山地だったため、海にはあまり縁がなかった小さいときに家族旅行でいった海は、白くて熱かったのがいい思い出だ

『・・・それって、砂浜だけじゃない？』

まあ・・・それはいいとして、早い話今の俺にあう水着がないという事で、駆け込みで買おうということである

「そういや、ラウラは水着あんの？」

「いや、私もないな」

「そっか、ならちょうどいいな。ついでに買っておけば？」

「そうしよう」

『・・・マスター、アレ』

ん？

『なるほど、この中華スープは・・・』

『あ、あの、お客さん・・・？　そう行っただ事をなされるのはちょっと・・・』

『黙ってろい！』

見るとそこはある中華レストラン

そこには、メモを取りながら調味料や素材を研究している、中年のおっさんがいた

「どうした？」

「いや・・・なんでもない、いじつぜ」
「？」

昼間から、何してんだよ・・・親父よ

「ふう・・・びっくりしました」

「あ、危なかったわね・・・」

心臓をときどきさせながら、物陰から二つの影が出てくる
セシリアと、鈴だった

傍目から見れば、不審なお客その一とその二だったが、コレにはマ
リアナ海溝より深い事情がある

「まさか、あの二人まで来てるなんて」

「一夏さんとシャルロットさんも気になりますけど、あの二人に見
つかるのも、何だか・・・」

そう、一夏がシャルロットを誘い、ここに買い物に来ているのだ
一夏からすればただの友人との買い物でしかないのだが、三人にと
って、これは『一夏とのデート』である。当然気にならない訳がない
という訳で尾行していたのだが、ばったり薫とラウラに出くわし、
とっさに身を隠したという事である

「あの二人にも見つからないように、一夏さんとシャルロットさん

を追跡する・・・」

「難しいだろうけど、やるしかないわよね」

二人は人ごみにまぎれ、尾行を続けるのだった

「ほえー。ここが水着売り場か」

『カラフルなのがいっぱいあるね』

赤い水着、黒い水着、白い水着、黄色い水着

ビキニやレオタードの様な物や、露出のかなり多い際どい物、果てには競泳水着もある

「しかし、男物は影も形もないな」

「だなー・・・見た感じ、女物ばかりみたいだし」

『マスター、ここは女性用の水着しか売ってないみたいだよ』

そうなの？じゃあ、男性用は？

『地図によると、ここから三十メートルくらい進んだところみたい。かなり小さいね』

「はぁ・・・。ラウラ、どうやら男物と売り場が違うみたいだ」

「そのようだな」

・・・こいつ、ひょっとして分かった？

「どうする？俺は自分の選んでくるけど」

「なら、私はここで水着を見ている」

「りょーかい、んじゃ、買ってくるから、勝手に動くなよ」

「・・・さて。もうそろそろ出てきてもいいのではないか？」

薫が水着選びに行ったのを確認したあと、ラウラは向かいの衣料品の店に声をかけた

「・・・やっぱ、アンタには勝てないわよね」

セシリアと、鈴だった

ちなみに、一夏に謝った後、ラウラは二人にも謝罪した
すでに水に流すことに決めていた二人だったため、結局は特に禍根もなく終わったのであった

「しかし、何故分かったのですか？」

「簡単だ。そして、目的も何となく分かる」

「へえ。じゃあ、教えてくれないかしら」

「ISの《潜伏状態^{ステルスモード}》だ。普通ISは互いの位置が分かるようになっている。が、お前たち二人は潜伏状態で位置が分からないようになっている」

「・・・つまり、私たちが何か隠れなければいけない状態だった。・・・そういたい訳ですね」

「そういう事だ。それに水着売り場から、シャルロットと一夏の反応があつた。そこから察するに、大方二人の尾行というところだろう。そしてこのあたりで隠れられそうな場所は、その衣服の間ぐらいなものだ」

「ぐうつ……」

「正解……です」

『そうだろう?』と言いたげな得意顔に、二人は苦虫を噛み潰したような顔で応えることとなった

「それで、私たちをどうしようっていうの?」

「別にどうする気もないぞ。あ……いや、少し聞きたいことがある」

「なんですか?」

「水着がほしいのだが、選んでくれないか?」

「あれ? 薰も来てたのか」
「お、一夏。偶然だな」

男物の水着売り場で、俺はぼったり一夏と出くわした

「お前も、駆け込み派か」
「まあ、そういう事だな」
「で、肝心の男物の水着は……なんか、奇抜な色合いのものが多いような」

赤と緑。補色の関係じゃねえか。目に悪い
他にも、黄色地に水玉模様の赤色だったり、やたら明度の高い色どうしの組み合わせだったり、やたら低い色どうしの組み合わせ

果てには、色を組み合わせすぎてピ。ソの絵かと思うほどのものもあつた

「・・・この色合いを見ると、『シンプルイズベスト 普通が一番』っていうのがよく分かるな」

「奇遇だな。俺もそう思った」

「俺らつて、妙なところで馬があうな」

という訳で俺たちは、出来るだけシンプルな物を購入することにした

一夏は単色ネイビーの水着を手に取り、俺は波のような白いラインが右側に入った、マリンブルーの水着を手に取った

「ところで一夏。今日は一人か？」

「いや、シャルと来たんだ」

「シャル・・・？ ああ、シャルロットか。」

「そういうお前はとうなんだ？」

「俺？ ラウラと来たぞ」

「・・・ひょつとしてデートか？」

「お前はとうなんだ？」

「どうって何が？」

「・・・最早、何も言うまい

「だってよ、シャルロットと二人きりなんだろ？二人で買い物とか、それ即ちデートだろ」

「別に、デートとかそんなんじゃないよ」

「・・・はあ」

「？」

分かっていないらしい

多分、この状況でデートと思いつかないのはお前だけだと思う

『ホント、こういふところで損してるっていうか・・・』

「・・・まあいいや、じゃあ、女物のところに帰ろうぜ?」

「おう。・・・あ、ちょっと待ってくれ。もういくつかほしいものがある」

「いいぞ。先行ってるからな」

「りょーかい」

そうして、一夏は行ってしまった

『マスター。それホントに必要なだったの?』

「気分だよ。気分。大事だぞ?」

『ふーん・・・お小遣いは大丈夫なの?』

「正直大丈夫じゃないけど、あとで親父からもらうから」

昼間から何もしないで飲食店に入り浸り、あまつさえお店の人に迷惑をかけていたと知られれば、間違いなく親父は殴られるからな。
母さんから

「
」

鼻歌を歌いながら、女モノの水着売り場に戻る

「うわー! どちらも似合いそうです!」

「そうか？　なら、この二つのうちから選ばうか」

・・・凄く聞きなれた声が聞こえる

「あ！　柳瀬君！」

「山田先生と織斑先生。どうもです」

声の主は、山田先生と織斑先生だった

『みんな、自分の水着もってなかったのかな？』

まあ、先生方はみんな忙しくて、旅行とかあまりいけないんだろうからね・・・

「・・・ひょっとして、明日もっていく水着ですか？」

「なんだ？　お前ももっていないクチか？　それとも、休日はいつもここで水着を見ているのか？」

「俺は変態じゃありませんよ」

「冗談だ。気にするな」

「冗談に聞こえませんか・・・」

というか、真顔でいつている時点で半分本気なんじゃないだろうか・・・

「ところでだ。お前に聞きたい」

「なんですか？」

「山田先生と一緒に水着選んだのだが、男の意見がほしい。どっちがいいと思う？」

そういつて、織斑先生はもっていた水着を二つ見せて来た
白い水着と、黒い水着ね

『どっちも似合いそうだね』

「白い水着が―「よし、黒い水着だな」俺の意見は無視ですか!？」

聞いていてそれはないんじゃないんですか!？
先生は生徒の話も聞くべきだ!

「いや、そんなことを言われてもだな」

「柳瀬君、白い水着の方をほとんど見てませんでしたよ?」

「え?マジすか?」

「はい。マジです」

・・・いつたい、何故?

「大方、無意識のうちにあいつ(・・・)を意識したんじゃないのか?」

「・・・そうなんすか? まあ、でも確かにラウラ(・・・)に黒は似合いそうですよね」

黒色は、あの子の銀色の髪の毛とかを一層際立出せて見せる・・・
気がする

「うーん・・・」

『・・・マスター、二人の顔を見てみれば?』
ん?

「なににやけてるんですか?二人して」

「いや、だって・・・」

「おい柳瀬。私は一言も『ラウラ』とはいっていないぞ?」

「・・・え?・・・マジすか?」

「おう。マジだ」

『マジだよ』

・・・あ

「てことは俺、・・・自爆っすか？」

「自爆ですね」

「自爆だな」

『自爆だね』

・・・急に暑くなってきたな。特に顔面当たりが

「お前、相当ラウラの事を気にいつているみたいだな」

「い、いや俺は別にそんなことは・・・」

「嘘をつくな。明らかにうるたえているぞ？　まああいつは見た目だけは―」

シャツ

いつの間にか、試着室の前まで来ていたらしい
着替え終わった男女が二人出て来た

あれ？試着室つて二人で入るものだったかな？
それに、俺なんか変な事言ったような

「・・・あ」

「・・・あ」

目の前には一夏とシャルロットがいた

『レゾナンス』・・・って、何語なの？（後書き）

という訳で、レゾナンスなお話でした（謎）

・・・どうしましょう。

「ハイあーん」なイベントとかいちゃいちゃシーンとか、恥ずかしくて書けません；

いや、私にそういう経験がないだけですが（泣）

ヘタしたら、全面カットの可能性が・・・

とびに飛んで臨海学校！

さて、ここは臨海学校に向かうバスの中

位置としては、トンネルに差し掛かったところだろうか

ゴオオというトンネル特有の雑音と、オレンジ色のランプが見える

「ったく、あんときはマジでビビったじゃねえか・・・」

「う、だから俺だってだな・・・」

一夏が、シャルロットと一緒に試着室（女性用水着売り場）から出て来たあの一件

どうも、尾行していたセシリアと凰を巻くためのものだったらしい

つか、あの時セシリアも凰もいたのかよ

『・・・多分、気づいてなかったのマスターだけだよ』

・・・そっぴや、さっきから前からの視線がきついんだが

『さらっと話を逸らさないでよ。・・・でもまあ、一夏くんの隣を取ったらそっなるよね』

デスヨネー

どうも、とある女子三人が一夏の隣をめぐって恋の駆け引きをして
いたらしいジャンケン

そんなこと知る由もない俺が、横からさらっとかすめ取ってしまった訳だ

一夏の隣は、倍率が高いのを忘れていた・・・

こういう時、なんと云ったらいんだっけ・・・？

『んっ・・・漁夫の利？』

俺に利がないからそれは違うな

そうそう。キミはガンマナイフというものを知っているかい？

たしか放射線治療に使われる器具で、無数のレーザー装置を備えているらしい

一つ一つは、そこまで強い力はないんだけど、その無数がある一点で重なる、ものすごい力になるそう

で、それをつかって隊内の腫瘍をピンポイントで死滅させることができるのだとか

『つまり、どういうこと？』

一つ一つの視線はそこまで重くはないんだけど、三つ重なるもんだから、非常に重くなる訳だ

それこそ、移動中はいつも寝ている俺でも眠れないほどに

っーか、海はまだか。もう二時間は走ってんじやないか・・・
そんなこんなしているうちに、トンネルを抜ける

「海っ！見えたあああっ！」

『イエエエエツッ！』

「や、やかましい・・・」

一夏が隣でぼそつと言う。まあ、わからんでもない
こっ、ぐおーんと来たもんなあ・・・

「はあ・・・。移動中ぐらいは、静かにしている！」

そんな織斑先生の一喝があっても、女子たちはテンションがかなり

「・・・」

『あ、青筋たつた』

メキメキメキッ

「イタイ痛いいたい！ 無言で力強めないでくださいよっ！」

「分かったなら、くだらないことは考えるな」

「りよ、りよーかい・・・」

ブリュンヒルデの青筋。それは死亡フラグ

またひとつ学習したぞ

「とまあ、冗談はともかく。お前たちの部屋に案内する。ついてこい」

笑えない冗談だったこととか、実は本気だったでしよってこととか、ツッコミどころばかりなんですけど。

『それを言って、また青筋が立ったら、今度こそマスターはザクロだよ』

黙っておきます

「さて、ここがお前たちの部屋だ。鍵はこれだ」

中に入ると、そこは綺麗な和室だった

オーシャンビューっていうんだっけ？窓からは真っ青な海を、水平線まで一望できるようになっている

日の出か日の入りかは知らないが、海に浮かぶ太陽を見れるんだろ
うな

「女子たちの部屋とは少し離れているが、それでも尋ねてくることが予想される。ゆつくり休みたいのであれば、締め出すなりあしらうなりしておけ。どうしようもないようなら、隣は職員用の部屋だから私を呼べ」

「多分、お菓子の城があっても、鬼の根城が隣じゃ誰も来ませんよ・

・

「私は鬼扱いか？ 上等だな？」

あ、やっちった

「いや、薫のはあくまでも喩え話ですよ。・・・というか、正直なところそれを狙ってるんですよね？」

「まあ、それはそうだがな。よく分かっているじゃないか織斑。どこぞのボンクラと違ってな。さて、予定は分かっているだろう？ 今日是一日自由時間だ。さっさと荷物をまとめて、海に行け」

そついつて、織斑先生は部屋を出て行った

「・・・一夏。ナイスフォローだ」

「薫、もつと考えてからモノ言おうぜ」

「よく言われんだ。それ」

その後荷物をまとめた後、タオルを持って（・・・水着？も装着こんでる）途中に合流した篠ノ之と一緒に、更衣室へ向かっていた

「・・・」

「・・・」

「・・・」

『あゝ・・・これって・・・』

アル？なんか知ってるの？

『あゝ・・・んゝ・・・いや、知らない』

そうか・・・

目の前に落ちてている―いや、刺さってるウサギの耳

いくらなんでも本物ではない。『ウサミミ』というアレだ。ちなみに俺は『ネコミミ』・・・というか、猫が好きだ

俺には、これがなにだかさっぱりだが、篠ノ之と一夏が神妙そうにしているところ、アルが微妙そうにしているところを見ると、俺以外、これがなにだか知っているみたいだな

「『引っ張ってください。』って書いてあるな。・・・引っ張るか？」

「なあ、これって―」

「知らない、私に訊くな」

ブイツとそっぽを向いてしまう篠ノ之む、何かあげだな

「・・・引っ張っていいのかな？」

「知らない、勝手にしてくれ」

そういつて、すたすたと去っていつてしまった
ますます気になるな・・・

「えーと、じゃ勝手に引っ張ろつか・・・ほいっと」

結局、そんなに力を入れずともさっと抜けてしまった

ウサ耳の下には何もない

「あ、あれ・・・？ おかしいな」

「いや、この下に何かあると思うお前の方が・・・」

『・・・マスター。上空より未確認飛行物体が高速で接近中。・・・
ぶつからないようにだけ注意して』

迎撃いらないのか？

『要らないよ・・・たぶん、ママ（・・・）だもん』
それって・・・

ズドオオオン！

凄い衝撃と共に砂煙が巻きあがる

それが晴れると、俺の目の前少し先に、人一人入れそうな未確認飛行物体が刺さった

『ACT』と『バスタオルお化け』

「・・・だれ？束さんのお楽しみの邪魔したのは？」

そういつて、ニンジンの中から出て来たのは変人・・・もとい、アルの『ママ』だった

『人のママに変人って、酷いんじゃないの？』
いや・・・そうはいつでもだな・・・

ブルーのワンピースにエプロン

頭には、いつの間にか俺からひったくってたウサミミ
それでいていかにも不機嫌そうなかめっ面

他に言い表せる言葉がなかったぞ

「・・・一人アリス？」

「キミに束さんの趣味を理解されても面白くもなるともないよ。人のお楽しみの邪魔をしておいて・・・」

そこで、その人は言葉を止め、待機状態のアルをじっと見つめる
ちようどいいので、一夏に聞いてみる

「・・・一夏、この人だれ？」

「・・・篠ノ之束さん。ISつくった人だよ」

へえ。なら、アルが『ママ』っていうのも分かるな
『驚かないの？』

驚いてるんだけどね。一周回って落ちついてしまった

「んっ・・・おおっ！」

何かを見つけたように、その人は声を上げる

「アーちゃんじゃないの！なるほどね、じゃあ、コレがキミのマスターか！へえっ！アーちゃんもモノ好きだねえ！」

「あ、アーちゃん？」

「そうだよ！アーちゃんだよ。キミが、マスターか、えーっと、たしか・・・んー・・・『かーくん』！」

「か、かーくん・・・また独創的なニックネームですね」

かーくんとアル・・・なんかおしいぞ

「んー？ 不満は受け付けないよ。ホントなら、キミなんてどうでもいいんだから」

うわ・・・手厳しい

「まあいいや！それよりアーちゃん！ 頼まれたもの持って来たよ！えーと、たしかここらに・・・」

そういつて、ニンジンの中をこそごそしだす、篠ノ之博士

「あ、あの、束さん・・・？」

「おう！ なんだい、いつくん？」

「いや、さつきから気になってただけど、『アーちゃん』って誰なの？」

「んっふっふっ。それなら今から分かるよん！ コレでね！」

じゃじゃ〜んと言いながら、その人はケータイよりもちよつと大きいぐらいの何かを取りだした

「『アクティブ・コミュニケーション・ターミナル』！縮めてAC^{アク}T！いや〜やつぱり束さんは大天才だね〜」

「あ、あくていぶ・・・？　なんですかそれ？」

「ふふふっ！よく分かっていないいくつかのために教えてあげよう！これは、ISと会話できちゃう端末なんだよ！」

「へえ〜」

それって、大分すごいんじゃないの？

なんて言うか、おおざっぱ過ぎてピンとこないけど

「使い方は簡単！　ISとこの端末をリンクさせるだけ！分かりやすいでしょ！？　じゃあ、アーちゃんやってみようか！」

そついうと、篠ノ之博士はいきなり俺の腰にあった鎖をひったくつて、端末の背中にあつた出っ張りに巻いた

「さあ！準備は出来た！いくよ・・・3！2！1！　ポチット！」

画面に光がとまり、次第に人の姿のようなものが見えてくる

「ママ、もう少し慎重に扱ってくれてもいいんじゃない・・・？」

「あつはつは！ごめんねアーちゃん！うまくいくか実験してなかったもんだからついつい！」

「もう・・・でもママは完璧なんですよ？」

「まあね！」

博士は、画面に映った誰かと会話している

鎖が邪魔して顔までは見えないが、赤い髪の毛をツインテールでまとめている辺り、女の子なのだろう

「束さん、これ、誰なの？」

「うふふふっ！このこはね、『アルカナ』のコアの意識だよ」

「す、すげえ・・・」

なんて言うか、他にどういい表していいか分からないって感じだな俺なんて、言葉に出来ない

「まあ！ざっとこんなもんだよ！白式で上手くいくかは分からないけど、アーちゃんは使えるみたいだね！それと、コレもあげちゃう！」

そういつて博士は何かをおしつけて来た
みるとそれは、USB記録メモリのようなチップだった

「その中には古今東西あらゆる武器のデータ、束さん考案のIS兵器・装備のデータなど盛りだくさん！データの使い方は、まあ自分で考えてね」

「うん。ありがとうママ」

「・・・」

大変だ。俺も一夏も会話についていけない

「っと！そうそういつくん！篝ちゃん知らない！？」

「え、あ、篝なら、海に・・・」

急に話題を振られたせいか、多少しどろもどろになって応える一夏

「まあ、私のつくった箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあね
いっくん！またあとでね。それと、キミはもういいかな？　ばいば
い」

そういつて、ニンジンに飛び乗って飛んで行ってしまった

「・・・いまのつてー」

「あの、一夏さん、今の方は一体・・・」

「うおおっ！？」

「ひっ！？」

「な、なんだセシリアか・・・びっくりした」

「す、すいません。声をかけようかと思ったのですが・・・」
「タイミングがなかったのか」

嵐のような人だったもんなあ・・・
どっと疲れが・・・

「今のが、束さん。箒の姉さんだよ」

セシリアは一瞬、ほんの一瞬だけキョトンとしてから

「ええええっ！？あの、各国で指名手配されているＩＳ開発者の！
？」

「ああ、その束さんで間違いないよ」

「なんつーか、凄い人が知り合いだな。一夏。俺、なんかつかれち
まったから、少し昼寝でもするわ。午後には出れると思うから・・・」

「

「お、おう・・・じゃあ、セシリア、行こうか」

「え、ええ・・・」

楽しまなきや損！とは思うんだがなあ・・・

『中途半端にはじめても、面白くないもんね』
そういうこった

という事で、旅館の部屋で三十分ほどの小休止をした後、更衣室に向かった

同じころ、女子更衣室前

「む、むう・・・」

もぞもぞと動くバスタオルから、何やらそんな声が聞こえてくる

（うう・・・セシリアと鈴が推してたから買ってしまったものの・・・
・派手すぎやしないか？）

ちなみに、購入後にクラリツサ達黒兎隊に聞いたところ、『最高です！隊長！』『可愛いです！隊長！』

とまあ、こんな感じの返答が返ってきた

それを聞いて自信が湧いたといえは湧いた——のだが、やはり肌の露出が気になるのか、一歩が踏み出せないでいる

「やはり、戻ろうか・・・」

そう思い、綺麗な回れ右で女子更衣室に戻ろうとしたラウラだったが・・・

がちやつ

「むうゝ。皆置いてくなんてひどいようゝ。．．．はっ！バスタオルのお化けゝ！？」

バツチリなタイミングで、布仏本音が女子更衣室から出て来たのだ
った

「あ、いや、私は．．．」

「成敗ゝ！ ええいつ！」

そういつて本音は、バスタオルの端をつまみ、ぐるぐると引つ張る！

「の、布仏！？やめ．．．」

「ふははゝ。よいではないかゝ！」

「何がだ！？」

これは、完全に楽しんでいる。そう思ったラウラだったが、気がついた時にはバスタオルはすでに取り上げられてしまっていた

「んー．．．気分爽快全力全快！っと！よし、着替えに行くか！」

勢いよく飛び起きて、荷物を持って更衣室に飛んでゆく
風が気持ち良くて、さっきの疲れが吹っ飛んだようだった

ちなみに、俺たちの部屋から海へは更衣室をくぐれば直行！・・・らしい

部屋にあったマップをよくみてたら、発見してしまったのである

更衣室に飛びこんで、制服をさつと脱げば着替えは終了
便利だね、あらかじめ着込むのって

『なんか、テンション高いね』

日常と違つところに飛びこむと、人間不思議とテンションが上がる
ものさ

『ふーん・・・。マスター、あれなに？』

「え？」

よく見れば、きぐるみとバスタオルが何かしている

こんなところでもきぐるみなんて着るのは、布仏ぐらいなもんだろ
じゃあ・・・あのバスタオルは？

『あ、引つpegしだした』

『お代官様！おやめください！』

『よいではないか〜！』

『あ〜れ〜』

そんな時代劇が、頭の中に浮かんだ

で、バスタオルの正体は・・・

「ラ、ラウラ・・・？何してんだあいつ・・・？」

なんと、ラウラだった

「あ、ヤナツキーだ〜!」

「なっ!?! か、薫!?!」

「いよう。お二人さん。・・・っか、布仏は暑くないのか?」

こんな真夏の海岸線。きぐるみはさすがに暑いと思うんだけど・・・

「おしやれは我慢だよ〜」

・・・なんか違う気がする

「ところで、ボーちゃん見てどうとも思わないの?」

「え、あー・・・んー・・・」

黒くて、フリルのついた水着

思ってたたとおり、ラウラの白くてきれいな肌や銀髪によく似合っている

「正直にいたら・・・その・・・可愛い」

瞬間、ラウラの顔がトマトになった

「だよね〜。私もそう思ってたんだ〜。ほらほらボーちゃん。いいよ〜」

「いや、でも・・・その・・・」

どういう訳か、進もうとしない

「むう〜、いいや!ヤナツキー、行こうよ〜!」

「なっ・・・」

「え、いいの？」

「いいよー ボーちゃんは海に出たくないみたいだからさー」

んー・・・どうしたものか・・・

と、そんなことを考えている間に、布仏は俺の肩までよじ登っていた

「んーじゃー！しゅっぱーっ！」

「へいへい。出発進行っ」と

「ま、待てっ！ や、やっぱり私も行くぞ！」

ラウラもついてきて、結局三人で海岸まで行った

『ACT』と『バスタオルお化け』（後書き）

という訳で、束さんとバスタオルお化け（ラウラ）でした

本編補足

ACTとは

Active Communication Terminal
（自発的意思伝達端末）

の略で、名前の通りISの自発的なコミュニケーションを補助する端末です

今のところ、他者とのコミュニケーションに積極的なアル以外では成功してないと

か。AICの親戚ではありません。ぶっちゃけ某メガマンのP.O.Tです

サポートとかでSを使おうかとも思いましたが、語感を意識した結果、微妙な日本語に・・・

使い方、その他機能は・・・まあおいおい本編で

海とお魚（前書き）

とーとつですがっ！

とうとうクリスマスまであと一月です

ツリーを飾りつけて、靴下用意して、大切な人と大切な時間を・・・
はぁ

12月初めにテストとかまじで現実から逃げたいです

話題に出しておいてあれですが、クリスマスネタを出すきはありません。ヘタしなくても真冬に夏休みの話書きます

海とお魚

という訳でやってきました。海です

波打ち際には、夏の海を堪能している女の子たちがたくさん・・・
というか、女しかない

この中に一人、男がいるはずなのだが、どという訳が見当たらなかった

「ほい。到着つと・・・よっ」

「ありがとヤナッキー！ またあとでね」

いたずらが成功した子供のような笑顔を見せてから、野仏は友達のところに行った

・・・はて？

「まあいいか。折角来たんだから、いろいろ楽しもうぜ！ラウラ！」
「あ、ああ・・・そうだな！うん！そうしよう！」

ラウラも何かをふっ切るように、ぶんぶん首を振る

「んで、何しよ・・・」

『あ！柳瀬君だー！』

『ホントだ！ ねーねー私にサンオイル塗ってー！』

「・・・どうしてこうなるんだ」

ついで最近まで一夏ばかりだったのに、こここのところこっちに來る
女子が増えている

人気が上がるのは嬉しいっちゃ嬉しいけど・・・

「ビーチボールやるー！」

「あの岩まで競争しようよ」

「ねーねー。サンオイルぬってー！」

御覧の通り、ゆっくりしている暇がないのだ

しかも、ラウラが氣勢をそがれてしまうほどの勢いで来る
そんな勢いを俺が受け止められると思う？

「その、薫は、私と・・・」

「うわーっ！ ラウラの水着って大胆！」

「だ、だいた・・・っ！？」

よつぽど恥ずかしいのか、また顔が真っ赤になるラウラ。心なしか
身体もほんのり赤い

「や、やっぱり私は部屋に戻る！」

「あ、ちょ、ラウラっ！」

びゅーん！

『・・・いつちゃったね』

あーあ・・・

「あれ？ ラウラいつちゃった・・・。残念だね」

「うん。チヨー似合ってたのにね」

「多分、露出に耐性が無いんだろ。・・・で、キミらは何しに来た
んだい？」

出来るだけの紳士スマイルを見せながら、出来るだけ穏やかに訊く

「うつ・・・、ねえ、柳瀬君。・・・怒ってない？」

「オコッテマセンヨー。ホントダヨー」

「・・・ごめんなさい。なんでもないです」

何故謝る？

そしてなぜ去ってゆく？

「ヤナッキー！・・・あれ？　ボーちゃんは？」

「なんか、やっぱり部屋に戻るって」

「恥ずかしがり屋さんだな。一緒にビーチバレーやりたかったのにな」

「そうだなあ」

「ところでさ、ヤナッキー」

野仏がこっちを見て訊いてくる

「ボーちゃんのこと、好きなの？」

「ブハッ」

ど直球かこの子は！

「ど、どうしてそう思うんだい？」

「あ、図星だね？」

グサッ！

「ふふふ・・・乙女の勘っていうやつだろうね。で、ボーちゃん

のどんなところが――」

結局その後、野仏の友達が呼びに来るまで、詰問され続けた
野仏本音、恐るべし……

「うう……」

あのあと海には行けず、部屋でじっとしていた
何度も行こうとは思ったものの、またあの水着の事を考えると、恥
ずかしくてどうしようもなかった

楽しみにしていた臨海学校だったが、初日をほとんど楽しむ間もな
く、夕食の時間となってしまった

夕食は海鮮料理。刺身が出された
生臭いのが嫌という者もいるが、私は別に問題ない
生だろうとなんだだろうと、食べるものは食う。そうでもないとな
人島では生き残れない。そうドイツ軍で教わった

「……」

「あ、あの、ラ、ラウラ……」

ふいつ

しかし、どうしたものか

（薫と顔が合わせられない・・・。）

薫の顔をみると、どうしても水着の事を思い出してしまい、恥ずかしいのだ

（そうだ！こんなときは・・・）

私は、プライベートチャンネルで、ある人物にプライベートチャンネルで通信をかける

『はい。こちら、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

『う、うむ・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ』

『隊長？ 何か問題でも発生しましたか？』

『あ、ああ・・・その、個人的にとっても重要な問題だな。相談に乗ってほしいのだ』

『私でよければ』

や、やはりクラリッサは頼りになるな

『その・・・薫と食事の席が隣になったのだが、どうすればいい？』

『薫・・・ああ、隊長の片思いの人でしたね。そうですね・・・』

『ごそごそごそごそ・・・』

『なっ！ し、しかしだな、その、他人の目の前でやるのは・・・』
『だからこそ、です。誰もやらないだろうと思うからこそ、効果は絶大になるのです』

『む、むう・・・そうか。よしっ！ ありがとうクラリッサ！』
『隊長を支えるのが、副隊長の役目です。では、ご武運を』

そこで、通信をきる

「か、薫・・・」

「ん？ なんだ？」

正座が苦手な私に合わせて、テーブル席に来てくれた彼は、さっきから不思議そうに私を見ている

「そ、その・・・はい、あゝん・・・」

クラリッサが教えてくれた、日本の心。『ハイあゝん』

どうも、日本ではこれが普通らしい

「・・・あのさ、ラウラ・・・」

「む？ なんだ？ これが日本では普通なのは・・・」

「いや、そうじゃなくてさ。・・・それ、ワサビ玉だぞ？」

「え？」

そういつて、箸でつまんだものを見ると、刺身ではなく、緑色の何かだった

たしか、刺身が傷んでいても、多少もたせるために使うものだった気がする・・・

「「・・・」」

たしか、これは凄く鼻にくる辛さらしい

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はい、あゝん」

「そこで強行策！？　せめて刺身をのつけてくれ！」

「あゝん」

「・・・・・・・・・・はあ。あゝん」

溜息をつかれるのは仕方がないかもしれない
だが、ここで箸をおいてしまったら、ハイあゝんは出来ない・・・
と思う

「ううっ！・・・・・・・・・・だ、大丈夫・・・・・・・・多分」

その後、明らかに箸の手が止まった薫だった

・・・・・・・・悪い事を、してしまったな

海とお魚（後書き）

えーと・・・

すいませんでした

書き進めているうちに、何だかラウラがアホの子に・・・
テンパってたってことで、収めてください
文句があれば受け付けます。はい

それと、ラウラは気の知れた仲間の中ではグイグイいけるけど、あまり大勢だと恥ずかしがる・・・と思ってます

謎の擬音『カポーン』（前書き）

お風呂場のカポーンっておと。なんの音なんでしょうね
未だにピンときません

多分本編とは何らかかわりありません

謎の擬音『カポーン』

「まだ口がひりひりする・・・」

『なんていうか・・・その、災難、だったね』

食事が終わってしばらく

俺は一夏と湯船に浸かっている

眼前には月に照らされた海が広がっている

男二人で入るには、いささか贅沢な露天風呂だ

「しかし、ラウラはどうしたもんだが・・・」

「ラウラ？　どうかしたのか？」

「夕食の時のワサビ玉といい、今日は何だか空回りしてる気がするな」

「ワサビ玉？　何かはわからないけど、多分思い出を作ろうって躍りになってるんじゃないか？」

・・・あの一夏が恋について語りだした

「おもひで？」

「そうそう。学園行事とはいえ、好きな人との初めての海だろ？　それなら、思い出作りたいうって思うのは当たり前じゃん？」

「あー・・・そうだな」

「いつも以上に躍りになって、結局空回りしてんだと思うぞ」

「なるほどな。・・・お前、他人の恋愛事情に関しては鋭いな」

「はあ？」

・・・やっぱ、ニブチンな奴って他人には鋭いもんなんだな

「その鋭さがなあ・・・」

「別に鋭くは無いだろ。俺は、思った事を言ってるだけだよ」

「へえ・・・」

あー・・・湯船が気持ちいい

「お前、俺の話聞いてないだろ」

「おう。『はあ？』のあたりから聞いてない」

「・・・はあ」

「つーかお前、イイヒトいないのか？」

「どういう意味だよ、それ」

「言葉どおりの意味だよ。魅力的な奴だって結構多いと思うぞ？」

シャルロットとか、セシリアとか

この二人と比較すると凰と篠ノ之は厳しいかもしれんなあ

一夏と距離が近すぎるから、多分『幼馴染』で終わる可能性がでかいかもしれん

初代のデジ。ンでも、完全体から究極体にはなれないだろ？
つまり、そういうこと

「友達だよ。そういうお前は、ラウラに首ったけだよな」

「・・・ホント鋭いなお前は。野仏といい、どこからその鋭さが出てんだよ」

「のほほんさん？」

「いや、昼間の話だよ。で、どうしてそう思う」

「ラウラがいるときは、ほとんどラウラを見てるからな。結構分か

りやすいぞ」

「なるほどね・・・」

俺って、わかりやすい人間だったのか

『・・・』

それから、一夏も俺も喋らずに、湯船で今日の疲れを取った掘り下げてこなかったのは、一夏なりの配慮だろうか

カポーン

時を同じくして、ラウラの部屋

「ラウラ、何処行くの?」

「少し風にあたろうと思ってな」

もちろん、嘘である

本当は、薫の部屋に遊びに行く気だ

「ふん・・・どうでもいいけど、織斑君ならお風呂だよ?」

「別に、薫の部屋に行こうとは思っていないぞ」

そこで、部屋の空気がガラッと変わる

「な、なんだ・・・?」

ラウラも気がつき、思わず訊き返してしまった
しかし、ここで訊き返してしまったのが失敗だった

「だってねー？」

「私、織斑君とは言ったけど、柳瀬君とは言っていないよ？」

「えーあ、・・・いや、私は夜風に・・・」

「顔真つ赤にしても説得力無いよ？　いく気だったんでしょ？」

「だ、だから違つと・・・！」

「ラウラってば可愛い〜！」

完全にルームメイトの女子のペースだった
となれば、ラウラに勝ち目はなかった
そこからは質問攻めが待っていた

『柳瀬君の、どんなところが好きなの？』

『告白したの？』

『もうキスはした！？』

そんな質問が飛び交う
もちろん、ラウラも逃げようとした。逃げようとしたのだが

「逃がさないよ〜」

気がつけばドアに先回りされ、出るに出れない状況となっていた
そうなれば、一つ一つに答えていくしかない

「んー・・・じゃあ、かわいそうだから最後！」

「はあ、やっとか・・・」

質問が十個目を超えたあたりから、もう数えるのをやめていた

「柳瀬君に好かれていると思う？」

「・・・どういう意味だ？」

「んとねー。ラウラの話を聞いてるとき、柳瀬君が受け身だなんておもってね。それで、柳瀬君はどうなのかなーって」

「アイツのことか・・・それは、答えようがないな」

「ちゃんと、『好き』っていつてもらえた？」

「むう・・・そういえば・・・」

受け入れる態度は見せたものの、ハッキリと『好き』と入ってもらえてない

「なら、今日しっかり話してくれば？」

「だが、そうはいつても、時間が・・・」

「ふふふ・・・実はこんなこともあるうかと！・・・じゃじゃーん！」

そういつて、彼女が出したのは、銀色のかつらだった

「色似てるのを選んできたつもりだったんだけど、大丈夫かな？」

「な、何故こんなものを・・・」

「知ってる？ ラウラが柳瀬君にゾッコンっていうこと、噂程度だけれど学年に広まってるんだよ？」

「そ、そうなのか？」

「うん。そういうこと。だから、あとは任せて、柳瀬君とゆっくり話してくるといいよ。引きとめてごめんねー」

「う、うむ！　ありがとう！」

そういつて、ラウラは部屋を出た

『さて、枕は三つあれば足りるかな?』

『簡単にはれないようにしないとね』

『あ、録音しておけば良かった・・・』

『そこは、みんなで寝たフリして誤魔化すしかないっしょ!』

声がない、という事以外は完璧な『ラウラ人形』が出来あがっていた

「あゝ。いい湯だったなあ・・・」

湯からあがり、部屋に戻る

「んじゃ、俺は千冬姉にマッサージでもしてくるわ」

「え? お前できるの?」

「素人だけどな。部屋番頼むわ」

「ういーっす」

そういつて、一夏は隣の部屋に移動した

「あーあ・・・俺何してよっかなあ」

『アレ試してみればいいんじゃないの?』

「お、それもそうだな・・・よし」

少し前、篠ノ之博士にもらった『ACT』を取り出す

「えーと・・・どうやってリンクさせるんだ?」

「あ、これISのコアが内蔵されてるみたいだね。それを辿って、ボクの方からアクセスすればいいみたい」

「アル次第なの？さつき博士が使った時は、呼出してたみたいだけど」

「んー……。コアネットワークでの通信を発展させたものみたいだから、呼出することもできるみたい」

なるほどね、他には……

コンコン

「一夏さんはいらっしゃいますか？」

「一夏なら隣だよ」

「分かりましたわ」

ボタン

「他には地図機能と、ISコア探知機能。それに――」

コンコン

「一夏ー？ いるー？」

「一夏なら隣だよ」

「あつそ。ありがとね」

ボタン

「――それに、電話機能。……これって、市販のケータイいじっただけじゃ――」

コンコン

「いち・・・」

「隣だよ」

「・・・分かった」

ボタン

「ーケータイいじっただけか？ 他にはー」

コンコン

「一夏くんなら隣だよ？ そのの、三人がたむろしてる扉の部屋」

「だ、誰！？」

「あー、気にすんな。ちょっと電話してんだ」

「う、うん・・・ごめんね？」

ボタン

「いきなり声出すなよな。みんな、お前の事知らないんだし・・・」

「うん・・・ゴメンね」

「んで、他にも機能は色々ありそうだけど・・・まあ、今はいいか」

「ママが作ったものだからねー・・・どこかにぶっ飛んだ機能があるかもしれない」

「だよなー。あの人ぶっ飛んでもんなー」

同じころ、部屋の前では

「・・・お前たち、何してるんだ？」

「ラ、ラウラ・・・」

「教官に用事があるのなら、さつさといればいいだろう?」

なんでそんなに耳をぴったりと・・・

「一夏が中にいるのよ」

「なら、なおさら入ればいいだろ」

「それが、入るに入れない状況で・・・」
「?」

不思議に思った私は、ドアに耳をあてる

『どう?千冬姉、ここ気持ちいいだろ?』

『つつう・・・そうだな、そこは・・・』

『やっぱり、大分たまつてたらしいよ』

『お前が・・・世話を・・・焼かせるのが悪いのだ・・・あぁっ!』

・・・なるほどな。たしかに、入るに入れないな

四人の顔をよく見てみると青い顔をしている

むう、私も薰と・・・いや、今はそうではなくてだな・・・

『さて、次は・・・』

『いや、待て一夏』

む、扉の向こうの空気が変わったな
何故だか退かないとまずい気がする

ガチャ、ボタン

主目的であった、薰の部屋に転がり込むことに成功

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193v/>

IS～インフィニットストラトス～ 不思議な翼

2011年11月27日21時46分発行